

PROLETARIAT ALLER LÄNDER
VEREINIGT EUCH!

理論戦線



No.

日本社会主義学生同盟理論機関誌

2

Für die Freilassung der unterdrückten Völker !
Für den Sturz der Bourgeoisie !
Für den Sieg der Arbeiterklasse !
Für die Weltrevolution !

理論戦線

共産主義青年インターナショナル第五回大会 (1928) における宣誓より

目次

偉大な闘争と奇妙な勝利

森 茂 (一)

「学生運動の転機」とは何か？

熊谷 信雄 (三)

全学連に寄す

一老詩人のうたえる (四)

激動・革命・共産主義

姫岡 玲治 (五)

◆表紙はコミンテルン機関誌

「DIE KOMMUNISTISCHE INTERNATIONALE」より

偉大な闘争と奇妙な勝利

警職法闘争と労働運動の諸問題

森 茂

十一月二日、自民党首脳会談が「会期延長有効」を確認し、十月七日からはじまって、全日本の国民を闘争の渦中にまきこんだ警職法をめぐる闘いは完全に終りをつけた。

ちょうどその日、一二七日にわたって流血の大闘争を続けた王子闘争に、「大中に組合の要求をのんだ」といわれるあっせん案の提示が発表され、ここでもまた闘いが終って「日本の社会に久しぶりに平和がもたらされた」というプチブル的安堵感が、商業新聞の紙面をおおった。

たしかに警職法闘争は終わった。警職法の廃案が、まるで自民党がすすんでしたかのような型で行なわれ、あの十一・五の炭労や国労のプロレタリアの偉大な戦闘力は、社会党のかけひき一つで、次の闘いのステップとなることなく無駄死にさせられてしまったかのうにみえる。

警職法闘争が火を吐いたその最初に、あるいは、プロレタリア自

らが炭労で、全金でゼネストという闘争型態をつかんで立ち上ったその時に、警職法廃案の可能性と、今日の事態が作り出される可能性とをどの程度であれ予見し、そして真にプロレタリア的な戦術を提示した者が、どこにいたか？

前衛、あるいは階級政党と自称するものは、それをなしたか？ 恥しいことではないか。否、断固として糾弾すべきことではないか。彼らがそれをなしえず、それどころか、全く誤った、反階級的な戦術を提示し、そしてその責任を、なんら真剣に負おうとしてないばかりか、逆にいくらでもプロレタリア的な戦術を提示した、または遂行した全学連、学生運動の指導的部分に対して、攻撃を加えるならば、糾弾を受けるのも当然ではないか。

警職法闘争が終らせられてしまった今、われわれはこの闘争の評価と、当面の方針において、またしても誤謬と非階級的観点が横行しているとき、正しく闘争を総括し、そして教訓を学び、新しく切

りひらかれた時点に立つて正しく闘争の見通しと方針を打ち立てねばならない。

私が最初要求された原稿は、日本の資本家階級の労働政策と労働運動の現状・問題点についてであり、とくに夏の総評大会以後の動向についてであつた。だが、そのことは現在では、警職法闘争を除いては考えられない。

警職法闘争における労働者階級の闘争の主要な問題についてのべよう。

(1)

二二日、両党首会談の手打ち式の終わった後「国会正常化はなにより結構だ」「警職法改正が延びたといつても財界としてそうあわてることはあるまい」(東京新聞)と語った、日本独占資本の理論的政治的指導者の一人、石坂経団連会長は、しかし十月十七日の日経連臨時総会では、労組、全学連等の暴力化を前にして、警職法は「遅きに失した」といつていた。この日、日経連臨時総会は「入口からはみ出すほどの」資本家を集めて、政府に「法秩序確立のために断固たる措置をとれ」と警職法の強行の要求を満場一致決議していた。

警職法闘争の過程の検討に入る前に、このブルジョアの警職法改正要求が出てきたところの諸事情について検討せねばならない。

疑いもなく警職法は、労働者階級の闘争に対する弾圧の要求から出されたものであり、現在における資本攻勢の一環である。

昨年の春闘から、日本の資本家階級と労働者階級との闘争は、新しい段階に入った、とよくいわれる。

た。彼らは、プロレタリアの力量を過少評価した。

(2)

このとき労働運動の状況はどうであつたか。(1)でのべた階級矛盾の激化が、現在の民同幹部の支配下にある日本労働運動の中にも、一九五一年から五年ごろまで存在した激烈な派閥抗争を、数年の沈黙の後ふたたび新しい型で復活させた。

すなわち、昨年の春から夏、十月にいたる国労の闘争は、全体として下部大衆のきわめて激しい闘争力が、幹部に圧力を加え、幹部の予想以上に発展するという経過をとりつつ、同時にその闘争の指導評価をめぐって、革同が明らかにその大衆の動向を代表し、民同は左、右ともにそれに対立して、闘争の鎮圧、消去、ないしは部分的に押しとどめることに努力した、という事態を皮切りに年末から春闘そして夏にかけて、多かれ少なかれ資本のより激しい攻撃に直面している総評系のほとんど全単産で、当面の労働運動の戦術をめぐって、一方の側のいわゆる「低姿勢論」をめぐって、論争が行なわれそれが総評大会でも見られた。

民同左、右に対抗する批判勢力は、これまでの革同(48年)53年ごろまでは旧労働系、その後現在までは統一派とほとんど合同(統一派(共産党および、それとの統一行動を認め、出張する民同対抗派)、高野派、というこれまでの色分け以上の多くの部分を含んで、炭労以外のほとんどの大単産にあり、明確な理論的統一も思想的統一も、もっていなかったが、現在の労働運動の直面している事態の深刻さを本能的に感じとり、民同と違って革命的打開の道

それは資本家階級の側からすれば、不況を前にしての、国際競争力養成のための主産業部門ほとんどでの合理化の実施を基礎とした、首切り、賃金ストップ、賃下げ、であり、そのための組合の弱体化、破壊、労働者の階級意識の骨抜きであり、そして同時に、直接に恐慌による首切り賃下げであつた。それがとくに国労に対する攻撃としてはじまり、全官公労のスト権への攻撃として展開され、今年に入って日教組の勤評実施を中心とした攻撃であり、民間では、昨秋の鉄鋼、造船の闘争への賃上げ拒否であつた。同時に労働者の側もこれらの攻撃の危機を本能的に感じとり、新潟で、東京で、和歌山で、偉大な戦闘力を発揮して闘った。

しかし、この闘争が、なによりも労働者階級の闘争指導の日和見主義からして、徹底的に闘いぬかれることなく、すべて敗北か、押され気味のままに終った。

今年の夏から秋の闘争の決戦的位置を占めていた勤評闘争も、九・一五全国半日ストというきわめて重大な闘争として発展しながら、ついに政府に押されたままで、下降をたどらうとしていた。

ちょうどその時、十月のはじめ、臨時国会に、一応以前から準備はされていた警職法改正案提出が、決定された。

このプロレタリアートの力の下降期に、一気に警職法を成立させて、ブルジョアジーがきわめて有利な立場に立つて労働運動に対する攻撃を進めようとしたのであつた。

臨時国会の期間はそこから一カ月、補正予算、最低賃銀法、その他の重要法案を控えての国会提出は彼らの議会戦術からしてもある程度冒険であつたろう。だが自信満々の政府、自民党は「自民党だけの審議も辞さない」と呼号しつつ(八日)提出をあえてし

を求めて、総評大会前から統一懇談会という組織に結集しはじめていた。

総評大会以後、とくに日教組の勤評闘争において、この抗争は、平垣派、宮之原派の抗争という型でさらに激化していた。

労働運動は全体としては、日教組の9・15政治ゼネストが、労働者を大きく政治過程にひき入れ、その政治的覚醒をうながしながらついに直接には勝利をも、前進をもかちとることなく、他の単組の闘争もこれに結合されず、秋闘は全く組まれていないという状況の下でこの警職法提案を迎えたのであつた。

十月八日の総評の「実力行使による阻止」の声明の発表からはじまる労働者階級の闘争の立場は、この事態からみれば全く驚くべきことであり、ブルジョアの計算も、政治的に全く鈍感な自称「前衛」の無能ぶりも、故なきことではなかったともいえるよう。

警職法をめぐる情勢の全過程は、労働者階級の闘争を条件として型づくられ、一つ一つの事象がプロレタリアの力の刻印を押されて作られたといつても過言ではなからう。

警職法闘争の全過程は、次の三つの点で特徴づけることができるように思われる。

第一、短い期間のうちに、ブルジョアの側では、日経連、プロレタリアは、総評をはじめ、日頃直接には政治の舞台に姿を現さない諸勢力が一気に、めまぐるしく政治勢力として登場し、両階級の抗争と諸階層の動向が、むき出しに現わされたこと。

第二、刻一刻の闘争の段階、政治事件に、プロレタリアートの力

が反映し、多かれ少なかれその形成の要因となっていたこと。しかし、重大な要因であることができたとき、なんと低い位置しか占められなかったことか。とくに十一・五のはたした教訓。

第三、労働者階級の内部における絶えざる論争、重要な段階での民同の裏切りの行為、労働運動内の革命的部分のこれとの闘争と、その弱さ、ついにイニシアティブを握ることができなかったことである。

さて、十月七日、政府の国会提出決定は、ただちに社会党、総評の反対闘争宣言を引き出した。労働者は警職法にほとんど本能的に重大な危機を感じとり、中間諸階層の多くも、自己の自由の侵害に恐怖を感じ、なかならず戦前の弾圧の経験を持つ人々は、その恐怖を想起して、反対か、反対運動支持の側にまわった。社会党戦前派は右も左も反対闘争をやらねばならないことを一致して確認した。この反対闘争のイニシアをとったのは労働者階級であり、なかならず炭労であった。九日、現在における日本プロレタリアの最後の部隊の一員であり、当時長い協定の大闘争にむかって体制をととのえつつあった、炭労戦術委は総評に廿四時間ゼネストで闘うことを早くも申し入れ、これが労働者階級に電撃的影響を与えた。

さる一九五二年の破防法闘争が、日本労働者階級を鍛え、総評の左傾を大きく進めたことは、今さらいうまでもない。だが、炭労がその破防法ストの主力部隊でもあったこと、そしてこのストとその後の大経済ストの鉄火が、今日の炭労を作ったことを想え、炭労はこの破防法ストの経験を今革命的に復活させることを要求

は東京でも、部分的にしかとられずに終った。

そして第四に、闘争が一方で炭労等のイニシアで急速に発展させられようとしていたちょうどそのとき、社会党は「巾広い国民的結集」のために、大衆の圧力から反対運動に加わらざるをえない状態にあった全労、新産別を含んだ、国民共闘会議を結成、すべての闘争を、ここを中心に進めることを決定した。そして全労、新産別の要求に依拠して、社会党は「共産党系団体」との共闘拒否を確認した。

そして、その上に立って、十五日、社会党は「一切の審議拒否」の方針をだれにこわりもなく変更し、星島議長あっせん案を受入れ、本会議審議からはじめることを決め、議会の混乱をもって徹底的な大衆行動、ゼネスト準備を促進させて行くことという観点が全くないことを示した。このことをどのように批判した者は、だれもいなかった。

こうして闘争は第二の局面に入った。

この対峙状況の中で、十七日、日経連臨時総会が開かれ、最初

のべたように公然と岸政府を激励、シッタした。

その翌日と翌々日、社会党の中央委員会が開かれた。どれだけ徹底的な闘争方針を打ち出すか、に最大の注目がそがれたこの中央委員会は、党の組織問題と警職法闘争方針を二つの議題としたが、実際は前者はほとんど討議されず、中心は、議長あっせん受諾、今後の闘争方針をめぐる一部左派議員の徹底的批判が集中された。

二二名の左派議員は、警職法が、岸政府の戦争準備、核武装のためのものであり、国民的統一戦線をもってこれと闘わねばならない

した。

この日東京地評もゼネストを決定、翌日総評、単産代表者会議で十一月四日か五日のゼネストが確認され、十四日には総評幹事会が十一・五を決め、同日中立労連も総評と統一行動を決定、日教組大会全職中央委も実力闘争を決定した。

この過程が明らかに、社会党の闘争に大きな拍車をかけ十三、十四日の激突の力になったにちがいない。

だが、闘争のこの段階からすでに、妥協と背信によって汚されている。

しかもこの間に問題となったことを結局はもっとも重大なことであった。

それは、第一に、炭労のゼネスト主張、東京地評のゼネスト主張は国会会期が終る十一月五日をめざしては決まっていた。東京地評は五日ではなく、二八日のゼネストを主張していた。五日にヤマがおかれたことは、参院段階の闘争を予想した、すなわち衆院での決定的闘争を避けた戦術であり、場合によっては抗議ストになりかねない戦術であった。これは結果としてはちょうど国会審議のヤマに当ることになったが、次の闘争提起をさせない最大の理由となった。

第二に、二四時間ゼネストという目標は、結局受け入れられたにせよ、努力目標として受入れられた。

第三に、東京地評は、ゼネストを行うにあたって、大衆のイニシアを完全に発揮させるために、職場から単組単産にいたるまでのストライキ委の結成をよびかけていた。もし、この方針が全国に波及すれば、全く画期的な闘争が闘われることがきたろう。この方針

という中執の基本的評価には賛成しつつ、第一に妥協のない闘いであることをはっきりさせよ、第二に、実力を含む一切の手段をもって国会審議を阻止せよ、第三に、共産党系団体とも共闘せよ、という要求を提出、同時に労組にゼネスト要請を出せと主張した。これらはすべてその場では受け入れられず、しかも第三をのぞいては、結局、労働者階級の闘いの発展の中で、社会党はそのあとをおっかけて受け入れ、主張して行ったのだが、左派中央委員の中でもほんの一部がこのような案を提出したことは、労働運動の新しい分裂の状況と合せて、社会党がこれまでの左と右の対立とは別の対立を内部に生ずるかも知れないその萌芽を示すものとして、注意されねばならない。

ついでに言うておくが、ゼネストを避け、怖がったのは社会党だけではなかった。共産党も全く同じでアカハタ主張でゼネストを「支持する」というまで、一度もゼネストを主張したことも呼びかけたこともなく、それどころかいく度かにわたって、「国民全体を闘いに立たせる」方策について、プロレタリアの独自の闘争をぬきにして語っていた。

そして、まさしく警職法によってむき出しになったともいえる岸の階級支配をバクロするかわりに、警職法は、アメリカへの従属を強化するためのものだという、「民族的従属」の「バクロ」に終始していた。

国会では、廿日に委員会審議付託が行なわれ、廿四日から審議が開始され、社会党の十五日ごろの思惑であった廿五日には条項は通されるという見通しは良い方向で崩され、会期延長が問題となりはじめ、それとともに11・5が重大な闘争として人々に意識されはじ

めた。

廿二、三の国労中央部長会議、廿三、四の私鉄中央組織委等、このごろから各単産で十一・五の戦術決定が次々と行なわれて行く中で、廿四日、総評臨時大会が開かれた。

この総評臨時大会、日本史上最大の十一・五ゼネストの組織を決定したはずの歴史的総評大会の状況もまた、その瞬間における、あるいはもう少し長い意味での現在の労働運動の実状と問題点を冷静に示しているように思われる。

この歴史的総評大会は、なによりも十一・五ゼネストを満場一致で決定した。それはたしかに偉大なことであった。そしてその上、炭労の代議員の提案により、社会党に議員総辞職戦術をも考慮せよという要請を出したりした。

だが、この総評大会の討論全体も雰囲気も、その瞬間の日本プロレタリアートが直面している課題を深刻にとらえ、闘争の見通しと戦術において明確に一致するという事態とは、なんとかけはなれていったことか。

総評大会の発言者は七人であった。発言は大体十一・五の準備の実状等を中心に、討論は国労の細井中執と電通の太田書記長の間でただ一度交されただけだった。いうまでもなく細井は革同の指導的人物であり、太田は民同左派の中心的存在である。とすればこの論争もまた労働運動の核心にふれるものであるはずだった。

大会二人目の発言に指名された細井中執は、警職法闘争の勝利の途を、フランス人民戦線の教訓にもとづいて、ゼネストと社共の統一戦線にある、と発言した。

すぐこれを受けた太田は、警職法闘争の勝利の途は、中広い国民

激励を与えるとともに、全学連の共闘における発言権をいじめるしく強めた。全学連に対するあらゆる誹謗と中傷は、事実をもって粉碎された。この上に、廿、廿一日と、都市交、炭労、電通、海員等続々五日のスト指令が発せられた。

どうやら中間層の圧倒的部分は、政府の必死の宣伝にもかかわらず（二七日の岸の声明をはじめこのころから政治ストへの「警告」がさかんに行なわれた）政府の側につかず、かなりゼネストに好意的中立を守っていた。

この状況の中で、石橋をはじめとする反主流派が公然と審議強行に叛旗をひるがえしはじめた。二八日の翌日二九日、反主流派四派が懇談して「慎重審議」を決めた。

自民党の地方議員等、下部党員から、中央へ、警職法は反対が多から強行するのは再考慮してくれ、という要請があったという話がある。それが反主流派の動きを作った基本的な力ではなからうが、これ自体はおそらく事実であろう。

労働者階級内の闘争が、広汎な中間層を味方につけて進んでいたこのとき、政府は窮地に立っていた。

その窮地打開の強引な一手が、四日の会期延長事件であった。

自民党がこれによって反対運動の意気を沮喪させてしまおうとした戦術は、しかし、翌日の十一・五ゼネストによってかえって逆に中間層を全く反対の側にまわしてしまふ結果を生んでしまった。いつもなら社会党に負わずはずの「暴力によって議会の規制をふみこむ」という小市民的批難が、自民党に集中してしまった。

十一・五のゼネストは、炭労の廿四時間百%遂行、全金、全鉱も高度の遂行率をもって廿四時間ストに入ったのをはじめ、官公労も

の統一戦線にあり、現在の運動の現状からして、共産党と共闘はできない、というものだった。

論争はたしかに、統一戦線におけるプロレタリアートの独自性と主導性の問題にふれているかぎりでは、即ち「国民戦線中広論」といわれる、労働者階級の闘争の目標、型態を中間層の要求に従属せよとする傾向についての論争を含むかぎりでは、重要な論争であった。

だが、論争がこのように、現在の警職法闘争の正しい評価からも展望からも切り離されて、それらなしで、勝利のカギとして社共の統一戦線が論じられることはナンセンスであり、それでは闘争のサポーターと妥協のためにこそ共産党を追いつく社会党、民同左派への的をついた批判でもなく、その批判の中で大衆を獲得することもできないだろう。

そういう実状があったとしても、労働者階級は今や十一・五へ向かってバク進をはじめた。廿五日の国民大会は、その型態が生産点の闘争と全く無縁であることからして問題であったが、闘争の雰囲気を作り出した。この中で二八日、多くの単産で時間内職場大会が行なわれ、集会、デモが主要都市で行なわれた。

官公労の時間内職場大会はほとんど指令通りか、あるいは指令を幾分か上回る闘いとして組まれ、民間の中小企業の単組のいくつかはストで集会に参加した。この労働者階級の戦闘力は、幹部に自信を与え、十一・五の準備に好影響を与えた。社会党はおくればせながら「最高の戦術をもって闘う」ことをやっと声明した。

この日の闘争で全学連は全学連はじまって以来の数のストライキ校、動員数をもって参加した。これは労働運動に対するこの上ない

指令を高度に消化、全参加四〇〇万といわれる日本史上最大のゼネストとして闘われた。

このゼネストの特徴をいえば

第一、四〇〇万の動員数、官公労を含み、廿四時間を含む政治ゼネストとして、破防法をはるかに上回る量的な面で画期的な闘いであったこと。

第二、政治情勢のもっとも重要な時に行われ、広汎な中間層を好意的中立におき、警職法闘争に一つの段階を画し、決着をつけるような一撃となったこと、まさしくこのストこそ、四日の自民党の「力の政策」を力によって政治的に粉碎し、警職法闘争をめぐる力関係を、決定的に労働者に有利にしまった。

第三、戦術的な点では、炭労、全金、全鉱が廿四時間ストという偉大な経験をつんだこと。破防法の経験が今度の闘争にうけつがれた様に、必ずやこの闘争の経験はいつの日か重大な役割を果すだろう。

同時に、東京他いくつかの地域の闘争で、国労の闘争が中心となり、結局十一・五の中心は国労の闘争であったのだが、この国労の闘争が、一面では国労に大きな自信を復活させるとともに、今一面では、さらに高度な戦術設定であったのが民同によって崩されたこと。

東京では、国労の闘争を東京地評、都学連が、全力支持を行なった。万を越す労働者、学生が、早朝五時から各駅で乗客対策、国労ストの支援行動に当った。

国労は部分的に汽車、電車をとめた。そのことが、今度のストでももっとも大きな政治的影響を与えた。ストの成功と右にのべた組

織された部隊の支援、それに中間層がスト破りにほとんど組織されなかったことは、国労に自信を復活させた。

だが、国労の戦術は何日前かには「汽車をとめる」にとどまらなかった。「電車」にも影響を与える戦術で、支援体制も考えられていた。それが五日の直前に、このように変更された。さらに同じ運輸部門である私鉄がストを弱くしかしなかったことが、国労のその日の戦術遂行を非常に消極的にさせてしまった。

第四、労働運動内部の革命的部分は、このような昂揚期にこそ、大量に大衆を獲得しつつ闘争の指導的地位をえ、闘争のヘゲモニーを握るべきだった。それはごく部分的には行われた。たとえば炭労の闘争、東京地評の闘争はそのような意味をもっており、国労東京の闘争の組織には、革命的な労働者のグループの力があづかって力があった。だが、全体としてはそういう事態はなく、統一懇談会も、政治方針と見通しがないことからこのように闘うことがほとんどできなかった。

ストライキ委の組織も東京地評の若干の単組で行われただけだった。

だが、これらは、今後の闘争において発展させらるべき萌芽としてきわめて重要な意義をもつものだった。

さて、十一・五ゼネストは、政治情勢に新しい局面を開いた。五六、七の会期期間中、自民党はほとんど打つ手がなく、五日反主流派は、四日の強行はゆきすぎだといった、事態収拾を主張しはじめていた。

五日の午後のデモは、自民党に深刻な恐怖を感じさせ、自民党代議士は怖ろしくてほとんど国会から外へ出られなかったといわれた。

自民党は社会党の歩みよりにだけ期待をかけている状態であり、方針さえ示されれば、労働者は闘いに立ち上る力をもっていた。五日に闘えなかった鉄鋼、造船が二六日ストをきめていた。

だがこの大会はこの日まで大衆行動がないという状況下で右派の大攻勢の下におかれた。地域的には行われている共産党との共闘などについて右派から攻撃が集中され、結局、岸打倒、国会解散、警職法廃案を確認し、国会の終了を確認しつつ、事態収拾のための自民党との話し合い権を中執に一任することが決定された。このごろから自民党は、「国会正常化」をスローガンとして、警職法は消える覚悟で、社会党を話し合いにひきこむことに全力をあげていた。社会党大会の前日、経団連理事会は「国会正常化のために政府は譲歩せよ」という見解を発表していた。

その意味で社会党大会によっていつ裏切りが行われるか、いつ社会党が自民党と話し合っって国会会期延長を認めるかわからない、という薄氷を踏むような事態が生れたのだ。

この期に国労、日教組を中心に、十一・五の弾圧が大々的に開始された。

けれどもまだ手は打てなかった。急速に衰えて行きつつも、労働者階級のエネルギーはまだ存在していた。廿日の全金の国会デモには、職場が終ったからの自発的動員に三千が参加し、猛烈なデモを行っていた。

このとき共産党はどうであったか。

共産党は七日以後、安保条約改訂反対、廃棄の目標を中心スローガンとして提起し、そのスローガンとともに岸打倒をしかけていた。

ている。

労働者階級にとってこの数年来なかったきわめて有利な情勢が生まれていた。

まさにちょうどそのとき、社会党、総評は、とくに総評は、最大の裏切り行為、闘争放棄をやったのけた。

翌六日からこの闘争でもっとも戦術的に闘った部隊の一つである全農林への弾圧が、すでにはじまったそのとき、総評は六日の幹事会で六日七日に予定されていた国会動員を放棄し、実に廿六日のゼネストをきめて、それまでは十五日の動員だけという実際上にもしない方針をきめたのだ。

六日から闘争に全く空白が生まれた。ただ全学連だけが、七日に国会にデモをかけた。

自民党は打つ手を失い、党内の混乱をかかえて十二日の社会党大会で社会党が妥協の線を出してくるのを期待しているだけという状況であった。彼らにできることは、時をかせいで、闘争の熱をさますことだけだった。十一・五への弾圧も、この間はあまり行われなかった。

しかも一方教授、舞台芸術家等の中間層の警職法反対声明は次々と発表され、労働者階級が自己の目標をもって闘争を組めば、これらを結集しつつ、政府を窮地に追い込み、岸政府を、責任追及の非難の只中で総辞職に持ちこむことすら可能であるような情勢があった。

ところがこの瞬間に、総評、社会党は右のような方針で、実際上自民党の熱さまし方針に協力したのである。

社会党大会の行われた十二日にも、その情勢は残っていた。いぜ

戦略についての全く誤った規定と、小市民大衆に広がりつつあった警職法闘争はもう終わったのだという気分への追従、警職法闘争にまだ広汎に戦っている労働者大衆のエネルギーの全き無理解が、この戦術を生んでいる。

そして驚くべきことには、社会党大会の翌日、社会党大会への批判を行うかわりに、そのころからブルジョアジーによって全面的に開始された全学連攻撃カンパニーの一環をなすかのように、主張で一細胞のピラの文句の批判から全学連攻撃を開始した。

総評は何もしなかっただけでなく、廿六日はもし廃案になればやらない、といい、経済要求を併せて闘うともいつていた。各単産は続々と廿六日ストをきめていったが、ほとんど岸打倒でなく、警職法廃案だけできめた。

十五日日教組中央委は廿六日二時間カットをきめたが、岸打倒のスローガンは宮之原派の手によって否決されてしまった。

十四日からはじまった自社会談は、両党の「党内事情」から、社会党の場合は労働者階級の圧力から、すぐに妥結することはできなかった。

だがこの困難は、河野が大野と組んで打った芝居、継続審議は絶対必要だという確認によって、自民党を一応固めたことにして強硬派をまとめ、社会党に譲歩を高く売りつけ、それをあえて譲るのだからということと社会党の面子も立てる、という芝居によって一切が解決した。

河野の一暴れの後廿二日、全農林、国労、日教組、全学連への攻撃が進行している真空中、鈴木、浅沼、岸、川島会談は警職法審議未了と国会会期延長を確認し、一切が終った。

総評は廿六日のストは、「国民から浮き上る」からといって経済要求での時間外職場大会にきりかえる線を出した。

王子闘争のあつせん案提示と同時に、廿二日、日本国民に「平和」が戻ってきた。

警職法審議未了は、まるで自民党が社会党に「与えた」かのようだった。

偉大な闘争と勝利がなんとという裏切りでふみにじられたことだ。

(3)

闘いの全体を総括して、なにを教訓にとどめ、どこからわれわれが発するか、について二、三のべよう。

第一。この闘争における階級間の力関係の動きについての問題と現在の問題。

警職法闘争の経過の中での階級間の関係の移動、一時的に生じたプロレタリアートの力がブルジョアを押した、という事態についてはどういわない。

その闘争の結果、臨時国会の法案は予算をのぞいてほとんど全部流産し、ブルジョアジーのプログラムは大巾に遅延を余儀なくされた。独禁法、最賃制法等は、すべて通常国会にまわされた。六月の参院選挙を前にして、安保条約改訂等の課題をも持って、自民党は通常国会のりきりも決してそれほど簡単には考えられない。

廿二日以後闘争のエネルギーが急速に冷却し、固定化してしまつた今でも、労働者階級の戦闘力が、全くもとにもどつた、ということはない。破防法ストが、炭労、電産の大経済闘争を生んだように

このストの経験は、経済闘争における戦闘力を強めているに違いない。

王子闘争の押し気味での妥結は、廿二日現在におけるそのような状態と、見通しの上に立つたブルジョアの譲歩であろう。

だが、この闘争による力関係の変動を、政府、自民党の動揺という以上に拡大して、資本家階級の支配そのものに動揺が起つた、とみるのは明らかな過大評価であろう。経済闘争には、今書いたような有利な条件が生れながらも、労働者の攻勢という段階には決して行かず、どの経済闘争も資本の政治的配慮によって影響されただけだった。

したがってその点では、決して甘い見通しを立てることはできない。年末から春闘にかけて、経済闘争が激化することが日経連臨時総会によつてもいわれている。彼らはそこで「景気の不安定な今、どんなに総評が迫つてきてもそう唯々諸々とこれを聞くわけに行かない」(前田理事報告)といっている。国会における法案審議、その他政治的問題である程度不利な状況が生まれていても、弾圧等では今、労働戦線の体制ができてないとき、攻撃に出ていく。今後もあるであろう。それに対して、警職法闘争で戦闘力を下部大衆が引き出されたとしても、幹部の指導がこの力に依拠し、これを発展させるように行われないなら、その力の多くは無にされてしまうだろう。

秋闘、年末闘争を統一要求で民同で闘うぐくわずかの単産の一つであり、その獲得額が春闘に大きな影響を与えるともいわれていた日通は、二千円の賃上げ、二カ月の年末手当を要求して、二八日二四時間、その後四八時間のストを決定し固交を行なっていたが、二

七日、九五〇円、一・八五カ月という中労委あつてで、闘わずして妥結してしまつた。これも一方では資本の強硬な態度に直面し、闘う見通しと自信を持つことのできなかつた幹部が、今年の春闘の相場程度の賃上げと官公労なみの年末手当で、これ以上は闘えないと考へて妥協したのであらう。

なお、この問題で最後に労働運動の現状の評価についていえば、この闘争で、現在の労働運動の力量についての過少評価が実践的に粉碎されたのと同時に、しかも九月ないし十月から逆に労働運動が攻勢に出て、それが警職法闘争に発展したという評価も、廿二日前後それ以後の闘争の状況を正當に評価できない。警職法闘争で示された労働運動の現状は、一定の条件があれば、爆発的な力量を発揮して闘える力を、労働者階級は持つており、しかしその戦闘力が民同支配下で、容易に発揮できずにいる、という点にこそ見るべきである。

第二。労働運動の革命的左翼の形成と強化、右翼幹部の労働運動からの追放についての問題。

すでに闘争の経過の中でべたように、警職法闘争において労働運動内部でこれまでの派閥とある程度違つたところが一つの革命的な潮流を形づくつてあらわれてきた。たとえば、炭労は総評主流派の拠点であるが、ゼネスト要求の先頭に立つた。

しかし、それは、明確な理論を持った一つの潮流となることができず、自分自身を堅固にすることも、他を組織することもできなかった。

闘争の経過全体が、労働者大衆と、労働者大衆のおくれた部分に依拠する、ある部分は小ブルジョア化した、ある部分はブルジョア

ジーの代弁者である総評、全労他の幹部との力関係と争いによってきめられていった事實は、もし明確な階級的な政治方針があり、その上で統一戦線戦術の正しい適用があれば、革命的左翼は、広汎な大衆と先進的分子を獲得し、右翼幹部をどれだけでも機関から追放することができたであらう。

とくに十月七日、十四日、十・二八から十一・五まで、十一・十二以後は、そのことができる機会であつたし、闘争の発展のためにはそれがどうしても必要な時であつた。だが、そのことをしたものはだれもいなかったし、社会党、総評への左からの批判は、ほとんど共産党の、政治方針の提示と批判ぬきの統一戦線論でぬりつぶされてしまつていった。

だが、これはまだ現在の課題でもある。廿二日の裏切りの事實は今でも説明すれば広汎に受け入れられる。警職法闘争は、労働運動の非階級的な理論の多くに、事實をもつて痛撃を加えた。これを理論的に総括して、日和見主義理論に對置することが必要である。

たとえば「低姿勢論」は当面全くかげをひそめざるをえず、国鉄根上中闘が東京駅で十一・五の闘いのあと、大衆に、「低姿勢は大衆のものでなく、幹部のものであることが明らかになった」と公然と語ることができた。この戦術問題を理論的に展開して日和見主義に打撃を加えること。

「国民戦線中広論」もまた十一・五で打撃を受けたといえよう。統一戦線におけるプロレタリアのヘゲモニーの思想を對置せよ。警職法闘争はまた、経済主義にも打撃を加えた。国労では、警職法闘争も経済闘争だ、という宣伝が機関から下りてきたという。この闘争が、政治闘争であつたが故にあのように

【四九頁へつづく】

「学生運動の転機」とはなにが(つづき)

学生運動と社会主義

熊谷 信雄

一

「革命の経験」をすることは、それを書くより愉快であり、有益である(レーニン)学生運動の転機について私が論じようとした試みは、ほかならぬ「学生運動の転機」が、あれやこれやの言葉や気分ではなく、一つの現実的過程としておとづれ、私自身がこの過程の中におかれ、「転機」の内容を実践の中で示す愉快な機会を与えられたことによって、中断されざるをえなかった。

勤評闘争から警職法反対闘争へ、労働者階級が破防法反対闘争スト以来二度目の、そして戦後最大の全国的政治ストライキを敢行することによって、日本の労働運動に転機をつくりだしていったその最中に、一九五八年九月―十一月の日本学生運動は、語られた言葉よりも幾百倍もの明瞭な豊富な転換の過程をみずから経験して、事

実をもって「転機」についての真の内容を示したものである。

十・二八から十一・五へ、日本プロレタリアートが岸ブルジョア政府のふりかざした斧II警察官職務執行法改悪に対して、全国ストという階級的武器をもって立ちむかい、守勢につづく守勢の姿勢から抑えられていたそのエネルギーを解き放って階級的反撃の火ぶたをきったまさにそのとき、この主力部隊と固い隊伍をくんで全国の学生が全学連の旗の下、これまた破防法以来の、あるいは戦後最大ともいわれる大規模な同盟休校と街頭デモンストレーションに立上ったその事実が、「学生運動の転機」の内容を、「少数尖鋭分子の闘いへの傾向」とか「小市民的急進主義」とか「一般学生から遊離した一部有志学生を駆りたてる運動への転落」等々によって抱えようとしていたブルジョア階級の期待、小ブルジョア・イデオログたちの危惧、左翼の仮面をかぶった偽マルクス主義者たちの批判と予測をふきとばし、その理論を破産せしめ、色褪せたものにしたのである。

それでは、もはや学生運動の転機について語ることは不要になったであろうか!?

中断されたというよりも、書きはじめられるまえに未完になった私の一論は未完のままで終るべきか?

かかる問が、筆不精の私に、誘惑の手をさしのべる。しかし、この魅惑ある誘いの手は階級闘争の現実の「否」という答によってさえぎられる。もし、この三カ月の学生運動の教訓を、日本のプロレタリアートの指導層たち、革命的プロレタリアート、社会の真の解放者である労働者階級を勝利に導くべき日本の社会主義者たちが正しく把握し、みずからのものとして撰取して、日本学生大衆が示した見事な政治的力量を指導する能力を身につけていたならば、私の過重な負担はとりさられたであろう。

もし、労働者階級がこの二、三カ月の激動せる階級闘争の昂揚に示したエネルギーを、守勢から反撃へ転ずる機会までつくって岸政府を震撼せしめたエネルギーを、正しく汲みだして反撃から追撃へうつるべき絶好の機会を逃さず、労働運動の転機を正しく指導しうる指導層が存在していたならば、あえてふたたび、「学生運動の転機」を論ずることは、余暇に富んだ傍観的評論家の筆に委ねておけばよかったろう。

だがしかし、この労働者階級にとって絶好の機会が、そしてブルジョア階級にとってピンチの状況が、十一・五以降の一週間の間に「冷却戦術」によって急速に失われ、十一月二十二日の「奇妙な勝利」がもたらされることで結末がついていたとき、一カ月という短い期間ではありながら平時の数年間にも数倍する内容をもつ階級闘争の学校を経験した労働者階級は、なかば方向を失いながらも、

「勝利」をして「奇妙なもの」から「真の、終局的なもの」にするべき理論と方針は、現存する指導層からは決して与えられないことを知ったのである。この認識を真に代弁しうる政治的イデオログの未存在こそ十一・二二以後の、かれらの足踏みの裏にある意味を予測させる。

労働者階級の同盟軍として闘うことによってみずからの転換を、大衆的運動の基盤の上になしとげた学生運動もまた、労働者階級のこのような昂揚としゅんじゅんのジグザグを反映せざるをえない。十二・八、十一・五、に示された学生のエネルギーはその後の「冷却指導」による労働運動の足踏みのまえに、一時的下降の状態に入ることを余儀なくされている。

しかもこのとき、労働者階級に「奇妙な勝利」をなめさせてブルジョア階級とその政府に安どの胸をなでおろさせることを許した労働運動の指導部分の総体は、主力部隊の指導において裏切り、誤ったばかりではなく、学生運動の転換の教訓を全く学ばないばかりかこの運動が「自分たちの領分」を犯してくるのに恐怖さえ抱いて、みたび、あらぬ攻撃と批判を加え始めている。労働者階級のエネルギーの爆発を四畳半の会合にとじこめ、しめらせることに成功した、支配階級は、その政治的動揺に息をつくかたわら、戦闘的労働者とともに学生運動II全学連に対する徹底的な攻撃にのりだした。

私が前稿において指摘した、「転機」についてのお喋りが三度開始され、学生運動の指導部隊である全学連はまたまたブルジョア・ジャーナリズムの脚光を浴びるに至っている。

このような状態が現実存在するかぎり、私は、筆をとり、同じ内容の標題について語らなくてはならないのである。

「激動せる世界」のなかで、決戦ともみられたフランスにおいて、プロレタリアートの敗北が日に日に明らかになつておりながら、いまだに、十月に始まる世界プロレタリアートの勝利と敗北の教訓採取についての真剣な努力が放棄されているかのとき今日、世界資本主義の大きな柱を担っている日本において、労働者階級がいまみずからの闘いの諸教訓をくみだして前進をはじめることは、世界の革命的プロレタリアートに劃期的貢献を行うことにもなる。学生運動とともに、一大政治闘争の試験を経験した労働者階級は、今こそ戦後いくたびかはたさるべき機会を持ちながらはたせなかった、運動の指導理論の再検討と革命的理論と方針の確立によって現存する指導部の方針を克服し前進しなければならぬ。

私が学生運動の転機を語ることは学生運動の発展のために同時に日本労働運動、そして日本社会主義運動の転機にあたって、これを真の転機にしたいからである。

このためにこそ、私は筆をとらねばならない。

しかし三カ月の経験は、その形式をかえずにはおかない。

五六年以来の歴史的教訓から始めるべくとりかかったその作業に、若干の変更を加えることを許していただきたい。

みたび浴びせられる学生運動の転機についての各種の批判から始める。

「総評・全学連などに痛手を」

十一月五日の夕刊は、労働者の政治ストとともに「全学連」の言葉で埋められた。

十一・五の闘いによって危機的状況に追いつめられた政府当局はすでに知られるように、「国会の正常化」と「政局の安定」をスローガンにして、大衆運動冷却のための妥協工作を始めて、このことに成功するメドをつけるや、このかたわら、官憲によるあくことのない弾圧の手を戦闘的労働者に対してのばし始めたが、そのスローガンには「全学連を徹底的に」と掲げられていた。塩川都学連委員長中村社学同委員長らを始めとする幹部の検挙と起訴、書記長の自宅捜査が行われ、公安当局は、「近い中に幹部の大量検挙を行う」と公言している。

十一月十六日、政府閣議が「暴力化した全学連と学生運動の対策」を討議したことを各紙は報じている。

「全学連の二月革命説」が公安調査庁からまことしやかに流布される。

たかが学生の組織である全学連に対して、自民党と政府が示す異常な関心と攻撃の執拗さはなにを意味するか？

社会主義者はこれにいかに対処するか？

かかる支配階級のデマを混えた宣伝を、「デマ」だ「挑発だ」といって守勢的に見るべきなのだろうか。

支配階級のかかる攻撃に脅怖を抱いて、「全学連と一線をかくす」ことによって身のあかしをたてることが労働者階級の道なのか。

また、このブルジョアジーの宣伝と歩を一つにするごとく、「学生運動の中の挑発者とたたかえ」と叫び、その破壊工作の一助となる

警職法改正案を必ず通そうと呼びかけた自民党機関紙の特集号のトップ見出しは煽情的な〇号活字でこうよかびけた。そしていう。

「……わが国では最近組織的集団暴行事件が頻発している。……俗に革命運動の予行演習といわれる総評を中心とするわが国の労働組合のストやデモが絶えず行われ流血事件までおきている。……」

わが国の労働組合が本来の労働運動の範囲を逸脱して政治闘争にのみ熱中し、違法なデモやストを平然と繰返し公共の安全と秩序を脅かし……砂川事件、あるいは最近では八月十六日の和歌山流血事件やその後の道徳教育講習会反対阻止闘争などがくりかえされている。これは、わが国の総評を中心とする労働運動が革命を目的として、その中核には日共や、全学連の尖鋭分子が坐り、運動を指導し、行動隊を組織しているからである」

「……こんどの警職法改正の背景になった一大要素は何といっても最近の総評、日教組、全学連などの暴力デモがあまりにも目にあまるものがあつたことだ」……（自民党機関紙「自由民主」一九五八年十月二十日号、傍点は引用者による）

このような主張による警職法改正強行の陰謀は、彼らにとって残念なことながら、かえって労働者階級の秘められたエネルギーの爆発を誘致しただけでなく、労働運動と固く結合した学生運動の偉大なる昂揚をつくりだしてしまった。

しかも十一・五の闘いは、ただ抗議ストと街頭デモの大規模さによって特筆されるのみならず、東京においてみられたごとく、四千にのぼる学生が明確に「国鉄労働者のストライキ防衛」という階級的視点に立つて、完全な行動隊を組織し、闘いに参加するという学生運動末曾有の経験をつくりだした。

ことが革命的プロレタリアートの任務なのか。

大人びた顔で支配階級への批判をなした返す刀で、学生運動の行きすぎをきり、みずからを「全学連」より一步高い場で区別しつつ小綺麗な評論家の立場を守ることが、社会主義者を名のものすることなのか。

私は、これらの立場とは全く別に、最近の支配階級の攻撃の中にこそ学生運動の真の転機の内容を見出すのである。

この三カ月の階級闘争の中で、学生運動の転換の真の内容を正確に感じとったのは、第一に、ほかならぬ支配階級であったのだ。

学生運動がただ学生運動であるかぎりにおいては、未来の支配階級の有能な働き手でもある学生に対して、「若さからの情熱を尊ぶ寛大さ」を誇ろうとつとめているブルジョア支配階級は、常日ごろは、最小限に官僚組織である学校当局に運動の対策を委ねている。だが運動がひとたび支配階級の専政への反抗を意味する社会運動にはみだすときには、もう、彼らの落着きは失われる。

社会運動も自由主義的ブルジョアイデオロギーで導かれる間はまだ我慢できるというものだ。

「社会主義運動」も改良的な、温和な漸進主義の運動なら若さのエネルギーの発散の場所として、見逃してやらぬこともない。

しかし、専政に反抗するエネルギーが階級的視点を有する革命的プロレタリアートによって導かれ、しかも学生の敏感さによる運動の政治的性格によってまだ階級的に目ざめていないプロレタリアートの覚醒剤として作用したり、あるいは資本家階級との闘いに立上ったプロレタリアートの同盟軍としての活動を始めるときには、もはや一切の寛大さはなくなり捨てられ、どう猛な牙がむきだされて

「学生運動狩り」が開始される。
そのときには、もう大学当局の「アカデミック・フリーダム」なる看板も、邪魔になる。

「手飼いの犬」に噛まれた口惜しさに、労働者階級へ向けられる以上の憎悪と弾圧が学生運動に浴びせられる。

専政に抗して立上った学生は、ブルジョア的理性の透明さによって、ブルジョアジーの残した科学の遺産を学ぶことによって、逆にブルジョア支配のからくりを見事に看破し、暴露する。

「最良の子弟をこんな積りで学校へ行かせたのではなかった」という親の歎きは数万の、数十万の学生運動に直面したときには、歎きでは済まされない。恐怖がとってかわる。

戦前の日本学生運動が、反帝、反戦、天皇制の野蠻への反抗への方向を労働運動とともにとったとき、襲いかかったあの暴虐なテロルを想起したまえ。

戦後の学生運動が支配階級によって負わされた戦争の痛々しい記憶の中から再建され、全学連を生みだして、労働者階級とともに闘う道を歩み始めてからの歴史をたどってみたい。

一九五〇年、アメリカ占領軍の本質を労働運動にさがけて見ぬき、反帝の闘いに立上ったとき、つきつけられたM・Pのカービン銃の記憶をよみがえらせよう。

日本労働者階級にとって、現在に至るまで決定的な傷あとを残している一九五〇年のレッド・パージが抵抗なく進んでいったとき、全学連の学生が試験をボッコイトし、学校に立てこもってまで闘い学園のレッド・パージを防止したとき、時の民自党首相、吉田茂が「大学の一つや二つつぶしても構わない」と放言して、数百名に

のぼる学生を検挙し、大学から追放した血塗った弾圧は、学生の英雄的事業とともにどの戦後史の頁にも刻まれている。

一九五六年、砂川の基地拡張を阻止した学生の英雄的スクラムに襲いかかった警官隊の棍棒と、自民党のあわて方はまだわれわれの脳裡に鮮明な映像として残っている。

日本の学生運動は、高度に発達した資本主義国の運動としては世界的にも比較するものがない強力なものである。戦時および戦争直後の国際的運動の昂揚の中で、はじめて国際学生運動が登場し、広汎な学生の基礎の上に立つ国際学連(I. U. S.)が各国の学生組織を統合して結成されたが、戦後十三年の試練の中にあつて、国際的ブルジョアジーの分裂工作の策動の前に大資本主義国の学生運動はすべて、国際学連よりはなれ、しかも、多かれ少かれ革命的プロレタリアートの指針を失われていったが、日本全学連のみは四八年の創立の時からその旗をかげつづけ、新生のアラブ、南米の学生運動とともに、弱体化しかつた国際学連の中で中心の役割を担っている。この全学連に結集している日本学生運動は、戦前においてもそうであつたが、戦後の再建のとき以来、迂曲の道を歩みながらも、つねに革命的プロレタリアートの意識をもった社会主義的學生によって、その戦列が保たれ、支配階級に対する非妥協的な闘いを続けてきたという輝かしい伝統によって特徴づけられている。

このために、ことあるごとに苦汁をなめされてきた支配階級は、あらゆる手をつかつて、学生運動から社会主義的前衛分子を放逐しようとして策動してきた。

直接の国家権力暴力装置による弾圧とことこの警官の暴力、

監獄。さらにブルジョアジーみずからの公々然たる脅迫。五二年の日経連、関経連による「赤い学生の就職しめだし」声明。今日では就職の際の思想調査は常識になっている。

文部省による学生自治活動の統制、学校当局による補導の強化、処分。デマ・ゴギの流布とプレス・キャンペーンの組織による活動的學生の一般學生からの孤立化の陰謀。「一般世論」からの浮き上らせ。ブルジョア政党の學生の中における組織化と運動の指導権奪取の試み。

労働運動の上部指導層の日和見主義者に期待をよせての労働運動と学生運動の分離工作。

さらには、指導的地位を確保してきた前衛的階級政党の指導方針の日和見主義への転落への期待さえも。

間断なく、くりかえされるこれらの手のかえ品をかえての攻撃は、一時的には成功するかのごとく見えながらも、かれらの意図する学生運動からの「赤い學生」の追放、全学連の分断とセン滅は効を奏しなかった。一九四九年—五〇年、労働運動から共産主義者の支配を締めだし産別を崩壊させ、社会民主主義者の手にその指導を委ねる工作を成功したときにも、学生運動から革命的分子を追放することとは成功しなかったし、全学連の分裂は実現できなかった。

五二年以降、共産党内の所感派によってクーデターの全学連占拠が行われ、その右翼的、極左的指導のために運動とその組織が危機に類しながらも、五六年をきっかけにした革命的學生の正しい再建工作は、その後二年半の巨大な運動の前進を生みだし、日和見主義的指導方針の入りこむ余地は失われ、統一がかととられていった。あらゆる弾圧には一層の抵抗の増大がこれに応えた。

五五年暮、都学連・関西学連の全学連の拠点が解体を宣言し、学生運動が混沌の淵に彷徨ったとき、手をうって喜んだのはブルジョア支配階級であつた。

だがしかし、この低迷の淵から学生運動を救いだし、その再建の道を歩ませたのに一助を与えたのも彼らであつた。

賢明な文部官僚が、「学生運動を刺激するかも知れない」といって反対したのも無視して行われた「国立大学授業料値上げ」の措置は、学生運動の再建の契機をつくつてしまつたのである。このとき以来「奇蹟」とまでいわれた急速な学生運動の立直りは、小選挙区法案、教育三法に対する闘いから砂川基地拡張となり、さらに一九五七年の帝国主義者の戦争政策への果敢な平和擁護の闘いとなって引きつがれていった。

しかもこの二年半、日本学生運動は、ただ立直つたということにとどまらず、労働運動の指導層、社会主義政党をも支配している右翼的日和見主義方針を批判し、克服する戦闘的方向で指導されることによって、日本の社会運動の一つの大きな勢力となつたのである。

かくて、むかえられる一九五八年後半。五五年以来の「神武景気」の好況の中で巨大な資本蓄積と投資を行いつつ発展をとげてきた日本独占ブルジョアジーは、五五年末保守合同を完成し、五七年には、岸内閣を登場せしめて、帝国主義的支配の道を進んできた。そして、五七年後半以降始つた経済危機の進行に際して、世界市場の再分割競争と対社会主義国家群への侵略準備におけるみずからの地位を強固に固めるために、労働者階級への攻撃を強化してきた。政治的反動攻勢が始められ国鉄労組へ集中の矢が向けられた。今年

春闘には全通労組へ。さらに勤務評定強行によって日教組へ。不況の進行にともなう資本攻勢が、階級連帯によって始められる。昨秋の鉄鋼、造船への零回答。春闘での私鉄闘争への日経連の攻勢。さらに繊維、合化での首切り、賃下げ。王子製紙の労働協定改悪。炭労への長期雇用計画協定の更新、首切り。

プロレタリアートの抵抗が続けられる。階級闘争の激化が続けられる。これにつれて労働運動の指導方針がゆらぐ。左翼的言辭を弄していた総評幹部、民同左派の「長期低姿勢論」「総退却論」など右旋回が目に見えだす。

労働者大衆の左翼化と指導方針の批判がどこでも始まる。この中で総評主流に対立する反主流派の分派が左翼的部下大衆の願いをこめて再結集される。二つの潮流が激しく争う。しかし、真の革命的指導はどこからも与えられない。逆に、国鉄新濁闘争のごとく、勤評闘争のごとく、前衛政党からも日和見主義が放散される。

労働者階級の闘いは一戦線で激化され、一局地で激しくなりながら、全戦線には拡大しない。支配階級の各個重点撃破、短期高姿勢決戦の構えに対して、味方は守勢につく守勢。

まさに、このとき、全国的組織をもつ学生戦線が革命的社会主義者の指導権のもとに強化され、しかも全学連第十一回大会、十二回大会で、右翼的日和見主義との闘争に終止符をうち一層鮮明に階級的見地に立って、労働運動の左翼化の方針のもとに、学生運動を転換せしめ、この転換の過程が和歌山において、奈良において勤評闘争において実践的に始められていったのである。これは警戒すべきだ。そのうちに労働運動と結合して発展していったら大変になる。しかし今のうちなら、大丈夫。まだ労働者は低姿勢だからこの

文部省は、全学連対策の特別通達を各学校にむけだしたと新聞は伝える。

福島大学、新潟大学、京都大学の学生自治会解散の措置、東大、早大、法大、中大、日大等において行われた三百名にのぼる退学を含む学生処分等の学生当局による弾圧もまた、近年みられなかったものである。

これらの攻撃の開始は、ブルジョア階級がその階級的治本能に、よって、開始された学生運動の転換の内容を正確に感知したことを物語っている。

彼らは、革命的社會主義の理論と方針によって導かれた学生運動が、彼らの階級的攻勢の内容を正確に知りこれに対する階級的視点に立った闘いを、労働者階級との固い提携を目標に進められることによって、日和見主義的方针によって指導されている労働運動がその闘いの中で政治的に覚醒され左翼化への傾斜が促進されることを恐れているのである。

国鉄から日教組へ——このスローガンがある程度成功的に進んだ。一挙に全通を。そして炭労と対決せよ、労働者と学生を分離せよ。労働者の意識とその眠れる力を過少評価した彼らは、みずから魔術にかかってしまった。

政治ストと、部分的勝利の経験を労働者に与えてしまった彼らは、同時に、一九五六年につづいてまたまた日本学生運動の偉大な転換に手をかしてしまった。一応態勢をととのえた彼らは報復の執念に燃えた憎悪の牙をむきだしにして生意気こしやくな学生に向かってきた。

ブルジョア支配階級は、学生運動の転換の内容について口で語っ

分離もはかれる。第一波の全学連批判、攻撃が組織される。

勤評闘争で日教組は労働者階級から孤立している。中間層の大半を、「教員の実力行使反対」で組織し、教組の日和見主義潮流の勝利は確実だ。

おごりたかぶった自民党とブルジョアジーは、この機に一挙に全面攻勢へふみきる。全学連の若造たちは一ひねりだ、労働運動も相手にしないだろう、全学連に罪を負わせて、一挙に労働運動の全面的弾圧の機会をつくれ。かくして、「警職法改悪」の打ち上げが行われる。

だがこの結果は？

予測できなかった労働者の闘いを誘致し、しかも広汎な小ブル層からも総スカンを食らい、社会党の国会ボコイトにまで発展し、「政局」の混乱をつくりだしてしまつた。彼らは、ついに譲歩の決意をかためて、この退勢挽回にのりださざるをえなくなった。それにしてもただではひけない。

学生運動の見事な転換が目の前で進行するのに驚いた彼らは、労働運動の転換が指導層によって正しく自覚されず、また下部労働者が一カ月の激しい政治的闘いの後の階級的成長にもかかわらず、まだ上部指導層の日和見主義を克服できていないのに乗じて、全学連退治を高い調子でヒステリカルに行うことにきめた。

この三カ月の間に行われた全学連に対する弾圧の強烈さは支配階級の恐怖と狼狽として階級的執念を示している。逮捕され検挙されたもの公式記録だけで六十名。起訴されたもの十五名。全学連書記局の自宅捜査三回。

ているだけでなく、小ブルジョアのシニカルな傍観性などおよびもつかぬ疲れを知らぬ精力を動員してかれらの階級的利益固守のために動きだしたのである。

「よき敵は、わるき友より味方を知っている」

この古き格言を、少しとりかえるならば、いまおこりつつある学生運動の転換の内容と支配階級の攻撃の真の階級的性格を与えるものになろう。

三

支配階級が、以上のような階級的見地にたつて日本学生運動の転換の内容を察知し「学生対策」にのりだしているとき、ブルジョア階級打倒の事業を担う日本の労働者階級は、いかに「学生運動の転機」を真の転機あらしめようとしているのであろうか。

「学生運動の転換」は果して、ただ「友」としての変化として眺めていけばよいのだろうか。

この間にプロレタリアートの前衛党を名のる日本共産党機関紙「アカハタ」が答えた。(十月十六日、十一月十三日「主張」)

だが、その答えは、ブルジョアジーの攻撃の新しい階級的性格を見抜くべき革命的プロレタリアートの緊急の任務とは全く逆に、「支配階級の挑発を惹きおこした学生運動の中の挑発的分子の策動とたたかえ」という指示と、「挑発的トロツキストの影響をうけ」「学生運動を危機におとしめている」「全学連、社学同指導部」の方針への誹謗と攻撃であった。

学生運動の転換をかくよぶ労働者階級の「前衛政党」は、こうして労働者の中に一般的に内在する学生への不信に依拠して労働運動と学生運動との離反を行って、弾圧に躍起となる支配階級を喜ばせているばかりでなく、労働運動のなかに生れつつある転換の過程を意識させることを麻痺させようとしている意味で二重、あるいは三重の罪を負っている。

現在の支配階級の学生運動への攻撃の階級性を見ぬき、労働者階級自身がこの攻撃をわがみへの攻撃と意識して学生の闘いを支援し立上るよう訴える任務をもつべき「アカハタ」は、今世紀のあけぼの、労働者階級の革命化のために活躍しボルシェヴィキ創立の基礎をつくった「イスクラ」の事業を思いだすべきであろう。

ツァーリズムの弾圧に対して立上った学生たちの闘いについて、レーニンが「イスクラ」を通じて労働者階級によびかけたつぎのような言葉と思想はただ、資料部屋の奥深くしまわれてしまっているだけだろうか。

「しかし政府にたいして回答するということはひとり学生だけがやらなければならない事ではない。政府自身がこの事件を純学生的事件よりはるかに大きなものにするために骨折ったのだ。政府はまるで自己の処罰の断乎たることをほころうとしているかのよう、またいっさいの解放への志向を嘲笑しているかのようなふう、世論に立ちむかっている。そして人民のあらゆる層のなかのあらゆる自覚せる分子はだまって汚辱をしのぶ声なき奴隷の状態になりたくないならばこの挑戦に応ずる義務がある。ところでこの自覚分子の先頭には先進的労働者と、これをきりはずせないように結びついた社会民主主義組織とが立っている。労働者階級は、いま学生たち

かったことは、日本の革命運動にとって不幸なことであった、といわねばならないだろう。

なぜならば、転機を迎えていたのは、決して学生運動のみではない、労働運動とマルクス主義—社会主義運動そのものであったから。学生運動が革命的プロレタリアートの意識をもった社会主義学生に指導されているというそのことは、学生運動の変化が決して学生運動の枠の中でとどまるものではないことを、日本革命運動の教訓を学んだものならば知ったであろうが。

革命的社會主義は、大衆運動より一歩先じた見通しと先導する方針をうちだすがゆえに「前衛」の理論といわれる。

反対に常に運動が終った後で、傍観的批評を加えることで辛うじて失職となることを防いでいる社会主義者がいたならばそれは「前衛」としての名前を剝脱されても仕方がないであろう。

私が前号において、始まりつつある学生運動の転換の過程がおそらく戦後のいくつかの大転換にも比すべきものであるといったとき「嘲笑」をもって答えた偽マルクス主義者たちはその後三カ月の闘いの中で、悲しいかな嘲笑った大声をいつのまにか消しきろうと努め、口をひんまげ黙してしまいか、あるいは図々しくも、また別の評論的悪罵のネタを探し求めることによって職業的後衛に自らを転じてしまっているのである。

全学連第十一回大会後二カ月の、八月の半ばに私が「転機」の真の指標としてあげたものは、四つの大会であった。（前号五一—六頁）

表面の華やかな事件に手をうち喜んで「全学連批判」にうつつてぬかしていた批判者のお喋りは、学生運動の転機の指標が「大会」で

がどのように鋭く衝突した警察的専政権力から、はかり知れないほどより多くの抑圧と侮辱をこうむっている。

労働者階級はすでに自己解放のための闘争をはじめた。そして彼らはつぎのことを記憶しておかなければならない。それは、この偉大な闘争は彼らに偉大なる義務を負わすということ、労働者階級は全人民を専政支配から解放しないでは自分自身を解放できないということ、労働者階級はなによりもさきに、またなによりも多く、あらゆる政治的抗議に反応し、これにあらゆる支持を与える義務があるということである。わが国の教育ある諸階級のもっともすぐれた代表者たちは、自分たちの足からブルジョア社会の塵をはらいおとして、社会主義の隊列にくわわる能力と用意をもっていることを政府によって悶死させられた数千人の革命家の血で証明し書きしるした。そして政府が学生青年に軍隊をさし向けているのを平然としてながめていることのできる労働者は社会主義者の名に値しない。学生が労働者をたすけにやってきた。——こんどは労働者が学生をたすけにしなければならぬ。政府は政治的抗議の志向を単なる乱暴であるかのように声明して人民を愚弄しようとしている。労働者は、これは嘘であること、暴行と放恣のほんとうの根源はロシアの専政政府であり、警察と官吏の専政権力であることを、もっとも広範な大衆にたいして公然と声明し説明しなければならぬ。……」（「一八三三人の学生兵籍編入」一九〇一年二月「イスクラ」第二号、レーニン全集、第四卷、四五八頁、傍点は引用者）

学生運動の転換の過程が「共産党本部の暴行事件」ということによって暗示的には感知されながらも、この事件のジャーナリスティックな喧伝のために、ほとんど正しくは労働者階級の前に示されな

あり、語られた言葉にとどまっていたときには、まだこれを見逃すことはできた。しかし、この転換が一つの現実の過程として日本の階級闘争の中で進行し、ブルジョア階級の恐怖まで誘いその階級的対策が講ぜられつつあるまでに至っているときに、いまだにこれらの学生運動について「乱暴ものの大学生」の「放恣な行動」「駄々っ子の世話焼かせ」というブルジョア・ジャーナリズムと呼応してその行方を欺いていることは、ひとり前衛的社会主義者だけでなく、労働者階級としても恥すべきことといわねばならない。

指導する部分の日和見主義的理論と戦術を許しておくことがいかにみずからの階級の利益を損い、階級闘争の発展をおしとどめるものであるかをいやというほど知っているのは、「転機にある労働運動」であり、そしてこの一カ月の偉大な政治闘争の経験をくぐったプロレタリアートではなかったか。

「われわれはかかる労働者階級の期待に応えてもいまや「転機の内容」について語らねばならない。

八月ごろ、「学生運動の危機」について語り、それぞれの色合いに応じて「危惧」や「期待」を抱き、「予測」を行ってきたまぎまぎの全学連批判の諸潮流のイデオログたちは、九月—十一月の三カ月の期間に二度の意外な事実、目をまるくして、驚いたり、腹をたてたり、安どの胸をさすったりした。

その第一回目、九月四、五日とひらかれた全学連第十二回臨時大会。

「代々木の暴行事件。中執の指導的部分に対する共産党の除名処分」という事件を前大会とはさんでひらかれたこの臨時大会によせられた「代々木と全学連の対立」「全学連の分裂」というジ

ヤーナリズムの異常な関心と期待は、第一目の経過報告における討議の過程で早くも完全に裏切られてしまった。

なるほど、第十二回臨時大会は、おそらく八回中央委員会以来、みられなかった激しい討論の場であった。

中央執行委員会の指導責任に対する追求も、予想以上にきびしいものであった。

形式のうえでのかかる状況は、「分裂」を予想し、「運動の危機」を囁いたた論者を一瞬よろこばせるかにみえた。

だがやがて、そこで展開された内容が、ジャーナリスティックな興味のみで見守るものには全く「理解しがたいもの」であることを知るにおよんで、彼らの会心の微笑は消えさり、第一日の討論が中執による卒直な自己批判とともにまとめられ、第二日には、彼らの期待した「全学連反主流派」といわれるものの意見は、全体の論議とは全く噛み合わない次元でつぶやかれたのみで、ほとんど万場一致に近い二百一対十で中執提案の方針が可決されるにおよんで、あつ氣にとられた驚愕の顔がのこされたのであった。

それでは、彼らには理解できない第十二回大会の討論の内容はなにか。

私は戦後学生運動の転換の金字塔といえる大会の決定そのものにこの内容をかたせよう。

決定は、六月大会以降の全学連の活動経過についてのべ、和歌山高知の勤評闘争に際しての学生の激しい不屈の闘い、および第四回原水爆禁止世界大会の活動が第十一回大会以後の「転換期」にあふきわしい陣痛の苦しみをとまなかった闘いであり、血まで流されたその

る。

その理論的諸問題はどこにあったか。

その一つとして、彼らは、「平和擁護闘争」——最近では誰もがその「第一義性」を口にする問題をとりあげる。

「その一つ。九大から十大に到る過程において、われわれは平和擁護闘争がわれわれの運動の第一的任務であること再三確認した。国際的な諸階級の闘争を国内の闘争という枠の中からしか、とらえない傾向がばつこしている中で、問題を何よりもまず国際的な観点からとらえ、平和運動を敵のいない話し合い運動に解消する傾向に抗した。国際帝国主義が世界支配の中心政策として打出していた社会主義諸国、植民地諸国に対するアイク・ドクトリンにあらわされた、原子戦政策に対決する任務を、われわれの闘争の中心任務にすえ、把握したことは、画期的なことであったし、この闘いにおいて日本学生運動は飛躍的な前進を勝ちとることができた。

しかし、真理は常に具体的である。『平和擁護闘争が第一義任務である』という命題もまた、それが現実の日々変遷する諸階級の国際的闘争の現実からはなれて、固定化されるならばそれはドグマと化する。

ブルジョア民族主義に反対する国際主義の強調が、もし現実に関内に存在する階級闘争をぬきにしてされるならば、それは小ブル的世界連邦主義に転落するであろう。

さらに進んで、すべての情勢を平和擁護運動の課題をひきだす観点からのみ分析するならば、それは事態を正しくはとらえない。第十一回大会における討議は、明らかにこれらの問題に対する積極的発展の意見を含めて行われたのである。」

闘いが「学生運動の歴史に輝しい一頁を刻んだ」成果をおさめたことを確認しながら、みずから卒直に問うている。

「われわれは……この闘いの重大な展開に比して大きなたちおくれをなしたのではないか？ 和歌山、高知の闘いのあのエネルギーを最大限有効に組織するうえで不十分はなかつたか？

第四回世界大会の活動と勤評闘争とが並列的にとらえられ、この二つの闘いの関連が明らかにされないで、実践的に若干のたちおくれと混乱が存在しなかつたか？」（全学連書記局編「全学連第十二回大会報告決定集」七頁）

そして大胆にいう。

「われわれは、このような問題の検討を卒直に行うとき、その根本原因はあれやこれやの戦術上の問題、体制の弱さではなく、第十一回大会と基本的意義とその方針の認識にあったことを指摘しなければならぬ」（同上書七頁）

この問題提起によって、転換の契機をつくった六月第十一回大会の検討にはいる。

「それでは問題はどこにあったか……第十一回大会は、一部右翼的部分との闘いと、その妨害を排しての右翼的路線の完全な圧殺にその意義のすべてがあつたのではなかつた。

圧倒的代議員にとっては、問題は単に八中委―九大委―十大大会の基本路線を防衛するに終始したのではなく、一層、高次の次元に立つてこの路線を進展させることであつたのだ。

すでに昨年の暮以来、右翼的部分の論争の過程の中で、実践的には四、五月闘争の中で、われわれは一層の理論的発展をとげなければ現実の闘いには十分応えられない状況にも当面していたのであ

この「平和擁護闘争」についての問題は、さらに進んで世界情勢の全面的評価に発展していく。

「国際情勢の分析についても、現在の特徴を単純に二つの体制間の矛盾・反植民地闘争の激化・平和運動の発展・戦争勢力と平和勢力との対立としてみる視点から、これらの現象の底を流れる階級諸関係、現代資本主義の矛盾とその解決をめぐる二つの基本勢力ブルジョアジーとプロレタリアートの相対にまで分析を進め、そのことによって、フランスにあらわれたファシズムの危険、あるいは植民地革命の動向、各国の帝国主義の諸動向、そして世界的な核武装政策の意味をとらえたのである。

……この討論は前述した平和擁護運動に対する右翼的傾向に反対し、平和運動の目標を社会主義諸国の外交政策からのみときおこしたり、運動の階級的視点をぼかして、反植民地闘争をとらえる見方も批判したのである」（同上書八頁。傍点は筆者による。以下おなじ）

さらに国内情勢については、戦後の歴史的展望を試みて、「アメリカと日本の関係」「従属か独立か」「民族革命」か「社会主義革命か」という議論が現実の階級闘争から全く遊離しておこなわれていたのときであつて、つぎのような指摘がおこなわれた。

「経済情勢とその底に横たわる階級闘争の現時点を明らかにし、現在の日本の矛盾が一般的には世界資本主義の諸矛盾と連関して生れてきており、特殊的には日本のブルジョアジーとプロレタリアートの階級的対立をよびおこしている資本主義生産制にその根元があることを明らかにしたのである。そして、日本のブルジョアジーが明らかに帝国主義としての姿をあらわして人民に立ちむかっている

状況に目を向けねばならない……。

だからこそ、かつてなく日本労働者階級の動向に分析がむけられ、そして日本学生運動の位置を彼らの闘いと密接に関連させて更めて確定したのである」。

このようにのべて彼らはいふ

「第十一回大会のこれらの討論と意見は、明らかに発展の歴史に、とって画期的転換の内容を萌芽として含んでいたものであったのであり、現実の闘いに応えうるものであったのである」

「しかし」……と卒直に自己批判する。

「この大会における討論は、右翼の部分との闘争に目を奪われたことも相俟って十分には全体によって意識されず、完全な意見の一致をみたといえなかった。」

すでに昨年来、そしてとくに四・五月闘争における実践的闘いがこれらの問題を提起していたにもかかわらず、大会全体が、以上のような討論内容——事態の根本認識にまで高められず、つかみえないままに終わったのである。

したがって、以上のような内容は、さらに具体的に、当時日本の労働運動の対決の中心としての、日本独占ブルジョアジーの帝国主義的支配の鍵としての、そして労働運動の内部における日和見的部分と論争の実践による対決の中心としての『勤務評定粉砕の闘い』の本質的把握と、この闘争への全力集中の方針とつかねばならなかったのであるが、大会においては、ここまで認識が貫徹くまでには至らなかった」。(同上書九頁)

そして結論する。

「さきほどのべた全学連第十一回大会における画期的転換の内容

このようにみたとき、全学連第十二回臨時大会の討論と方針は、ただ学生運動の転換としての内容としてのみ記録されるべきでなく、あきらかに日本プロレタリアートが現在摂取するに値する十分な内容をもっているものであったといわねばならない。

すなわち、国際・国内情勢の理解において、プロレタリアートの戦術において、マルクス主義の仮面をかぶった裏切りの理論が国際的にも横行し、それがまた国内に至少化され直輸入されて日本労働運動の闘いを阻害し、社会主義理論の発展を沈滞させているとき、全学連のなかの革命的學生が従来のあらゆるドグマにとらわれることなく、約一年半の実践と理論の闘いのなかでえた教訓を基礎に、学生運動という制限された分野でありながら発展させた理論的諸命題と革命的方針に労働者階級と革命的社會主義者は注目を払っている。

かれら革命的學生は、平和擁護闘争を帝国主義に対する闘争としてもっとも果敢に闘ってきた自分たちの経験のなから、昨年暮以来流行語のごとく語られている「平和擁護闘争の第一義性」の理論に、大胆に疑問を表明した。しかもさらにすすんで、この理論が単に戦術上の右翼日和見主義を生みだしているだけではなく、その実はソ同盟共産党第十回大会がその批判の契機を与えた、レーニン死後、国際階級闘争を害しつつつづけてきたスターリニズムの世界革命論における日和見主義にあることを発見したので。

すなわち、国際的階級闘争の現状を二つの体制間（あるいは少し前までは陣営間）の対立から導きだし、世界社會主義プロレタリア革命の遂行というレーニンの思想を「資本主義から社會主義への移行」という客觀主義的発想に墮落させ、「国際的發展の方向」が「二つの対立する社會体制の競争と結果で定まる」ということによ

を十分に認識することができなかったこと、中央執行委員会がその後、大会においてあらわれたこの発展の萌芽をさらに理論的に発展させつつ、この内容を闘争の具体的指導において正しく提起しなかったことこそ、大会以後の闘いにおいて多くの立ちおくれが生れた根本原因である」(同上書九頁)

第十二回臨時大会は、第十一回大会においてはまだ全体的には明確に意識されなかった転換の内容を完全に確認するまでに成長した学生運動の到達点であり出発点であった。三月の勤務闘争の実践過程こそこのことを可能にしたのである。

中央指導に対する責任追求は、階級闘争の激しい進展のなかで急ピッチに開始されている転換に追いつけないでいた中央指導部への批判であった。

激動の三カ月は平時の三年に優るさまざまな経験を大衆に与えた。もし運動の指導部がこのようなとき階級闘争の進展に目をむけず、運動の上にアグラをかいて旧態依然の停滞に安閑としているならば、それは階級闘争の指導者たる資格を大衆的に喪失するという歴史の教訓の一縮図をしめしたのがこの六月から九月にいたる学生運動の状況であり、また臨時大会の光景でもあったのである。しかしこれらは、このいかなる労働組合あるいは政党的大会にもみられない白熱的な、徹底的な民主討議を経て、全体的に転換の内容についての認識を一致させ、そして九月—十一月の闘いにとりくむべき完全な意志の一致をかちとったのだ。中央執行委もこの討論に加わり、討論をみちびき、きびしい自己批判の先頭になって、他にみられる官僚的指導者とは全く異った指導的分子の姿をあきらかにしたのである。

って世界社會主義革命をめざすプロレタリアートの任務を、ソヴェト、中国の外交政策に従属させて提起するという考えと理論をのりこえて、進もうとした。この鋭い批判的見解は、平和擁護の闘いを階級闘争から分離し、階級闘争に優越させ、ブルジョアジーとの協調さえも導いているドグマ化した「第一義性」の理論こそが、労働者階級の闘いを阻げる「巾広論」を生みだしていることを明らかにすることによって、二年半つづけてきた平和擁護運動における右翼的日和見主義との論争を新しい一段高い次元で行うことを可能にしたのである。さらにこのことは労働者階級のなかに根強く存在する「經濟主義」(エコンミズム)と無原則的巾広論を克服しようとするあまりに、世界プロレタリア革命と国際平和擁護闘争を直結させたり、あるいは平和闘争と階級闘争とする理論や、労働者を平和街頭デモに動員することのみにプロレタリアートの階級的成長を見出し、あるいは労働者階級の經濟闘争の偉大なる意義を認めないでこれを經濟主義に直結して批判するような独断的見解の誤りと未熟さをみずから克服することにも役立った。

かれらの批判的目は、フランスのドゴール政権の樹立、イラク革命などに示される世界情勢の活動にたいして与えられている従来の諸定式と「常識」をのりこえて、進められる。

だが第十一回、第十二回大会の討論は当然のことながら、もっとも多く国内情勢にむけられた。しかしここでもかれらは、国内で昨年の国鉄職場闘争を激化してきた労働運動における戦術での二つの潮流——総評主流派と、高野派——統一懇談会——の対立の根底を一層明確にする必要性を実践上からも迫られていた。

学生運動を労働者階級の闘いとびったりと結びつけることがもっ

とも大きな関心にまでなったことは、討論を日本社会の解放の道についてまで進めざるをえなかった。

学生運動のなかに生じた右翼的分派との戦術上の対立の根底に、日本社会解放の道についての理論上の命題がよこたわっていることも明らかにされていった。

大会の討論は国際的情勢の中での日本の地位を明らかにし、「半占領」とか「民族解放革命」とかいう分析と方針がいかに現実の階級闘争から遊離したものであるかを、すでにたんなる危険とか復活しつつあるとかいう以上に明確に帝国主義としてたちあらわれている日本ブルジョア階級の支配と、これに対決し闘っている日本労働者階級の闘いの現状にメスを入れることによって片隅においやった。

この「民族解放」理論が、核兵器禁止闘争において、あるいは沖繩・砂川闘争において、いかに、有害な役割を負ってきたかを身をもって感じその理論との闘争を二年半にわたって続けざるをえなかった学生運動の実践上からの批判は、第十一回、第十二回大会においては、日本社会と人民の闘いの全面的分析と社会主義をめざす労働者階級解放の理論の次元に昇められた。

現在の国内情勢の特徴を、大会報告は次のようにのべている。

「第一に、国際帝国主義者の世界政策は原子戦準備政策に積極的に協力しつつ、自らの帝国主義的發展をめざす日本独占資本と日本人民と矛盾が一層明らかとなったこと。第二に日本経済の本質的矛盾の暴露の中で、労働者と人民への搾取と収奪の強化によって海外へ帝国主義的進出をとげ矛盾の切抜けを期するブルジョア階級と労働者・人民との矛盾が激化していること。第三に、日本支配層の政

治的矛盾の暴露と人民大衆の闘いのための有利な条件が新しく展開していること。第四に、闘いの進行につれて、人民内部において、運動を前進させようとする傾向と、運動の発展をおしとどめようとする傾向とが明確になったこと。

「そして、とくに、(1)資本主義経済の矛盾が、世界的過剰生産の危機となって顕在化してきたことに注目し、この中にあってその矛盾をきりぬけるために、すでに五一年以降戦前の力をとりもどしてきた日本独占ブルジョア階級が対外的にも、対内的にも、経済的、政治的軍事的に明白に帝国主義的政策をとってきている状況について、(2)したがって平和、自由、生活擁護を求める日本人民の闘いは階級的闘いとしての姿を明確にあらわしてきていること。(3)現況の人民の闘いは、この矛盾の激化を前にして、矛盾の切りぬけを帝国主義的反動支配体制の確立しようとするブルジョア階級の攻撃に對して、徹底的な階級的闘いを闘うか、あるいはさまざまな理由をつけてこの闘いを回避しブルジョア支配層に屈伏するか二つの方向が深刻に争われていること」(同上書三七頁)

労働者階級の闘いを真剣に考えだし、プロレタリアートの解放の道にまで心をよせた学生運動は、かくて、「平和、民主、生活擁護向上を求める国民戦線の一翼」としてみずから位置づけられて済むことに安じてはいなかった。労働者階級の階級的指導性のもとに学生運動を労働運動の友として、発展させることが語られねばならなかった。

労働者階級の階級的闘いを「国民戦線の統一強化」の名のもとに阻害している労働運動指導部の改良主義的日和見主義と、これに反する、民族解放革命論の非階級的理論との戦術的齟齬の原因を看

破したかれらは、さらにこの理論が日本型に歪曲化されているがその背景に戦前ドイツ・ファシズムに対する闘いのなかで、あるいは戦後のフランスの階級闘争において、さらにアジア・アラブの植民地革命のなかであらわれている国際的な民族主義の誤謬とつながったものであることに気づかないわけにはいかなかった。

しかし、全学連第十一回大会のなかで学生運動の右翼的見解としてあらわれた潮流さえも、この「民族解放」理論に依拠するにはこの理論の歴史的破産は、あまりにも明確であった。

右翼的分派もまた、日本独占資本との闘争を主張し、社会主義、日本をとらえて登場し、かくて全学連第十一回大会の討論は「左翼」と、同じく「左翼」の仮面をかけた「中間派理論」との論戦として闘わされたのである。この「中間的社会主義者」の国際的綱領は、

先述した「平和共存」の「定式化」である。かくて、かれらの主張は二つの統一戦線なる、世にも見事な図式化となる。曰く、「平和統一戦線」と「反独占の左翼統一戦線」(註・牧野秀夫「平和擁護闘争と日本における革命の展望」団結と前進第二集所載論文参照)この思いつきの借り元であるデイトロフさえも、二つの統一戦線とは、「ファシズムに対する労働者階級の統一戦線」と「プロレタリア統一戦線」の基礎の上にたった広汎な人民戦線、一方ではプロレタリアート、他方では、勤労農民と都市小ブルジョア大衆との間の戦闘的同盟」といっているのに、この借り方は二つの政治目標の統一戦線なる珍論で、労働者階級を面喰わせ、また「民族民主統一戦線」の論者に冷やかされたのである。(宮本顯治、アカハタ一

九五八・一・四所載参照)だがこの混乱をかれらひとりの責任にすることはできない。多くの「社会主義革命」の論者も、社会主義に

いたるまえに確乎とした一線をひいた前段階の統一戦線の綱領をつねにそう入し、かくてさまざまな政府形態があらわれる。曰く「民主的政府」曰く「平和戦線政府」曰く「政策転換の政府」。社会主義はかくて後方へ後方へと追いやられる。資本家階級と日々強烈に闘っている労働者階級に与えられるものは、この自分のテールで、図式的に考案された議会主義的政府の青写真である。「反独占」の独占資本はあたかも資本主義生産関係とは別の一人の悪者の形容詞のごとくつかわれる。そしてまた社会主義日本にいたるさまざまな道が空想される。「平和的移行の道」——これがよい。プロレタリアートの階級闘争の現実はいかなる理論よりも豊富であり、もっともすぐれた革命家の頭脳をこえて発展するものであり、真の革命家の真髄はいかなる条件が生れた場合にもこの条件をプロレタリアートの権力獲得に向っての動員する適切な戦術を生みだすことにあるという一九一七年の教訓は、もはや、「四十年もまえのことだ」と一顧だにされずに新しい外国の理論がもてあそばされる。

かくて、「政策転換の政府」が生れ、「反独占民主革命論」がつくられ、「社会主義でもない民主主義革命でもない過渡的的革命」が作文され、そして「構造的改良」が流行語になり「議会を通しての」「平和的移行」の道のレールにのるようプロレタリアートは強制される。「経済の体質改善」のブルジョア並みの言葉までつくられ、プロレタリアートのヘゲモニーのもの——しかもブルジョア階級の手による?——日中貿易促進が「不況」克服の道として語られる。経済恐慌の人民的克服が、賃下げと首切りに対して闘う労働者階級に社会主義者の名において説教される。

このような「社会主義日本革命論」が学生運動の分裂的分子によ

って語られることを全学連の革命的學生は、徹底的に批判した。

この批判を通じてかれらは、勤評闘争の遂行のなかで労働者階級とが手をつなぐんだあの和歌山での闘いの試練をくぐるにおよんで、一分裂分子の思いつき理論の批判から現在の転機に立つ労働運動が要求している真の革命理論の創設へ発展させねばならないことを認識したのである。

真の左翼の理論と戦術——いっさいのドグマと、外国の權威に名をかりた改良主義をのりこえて、世界社会主義革命の一環として日本プロレタリア革命の方向がレーニン思想によってうちたてられること——このことが、戦術的な右翼に抗して新しい左翼への結集をはじめつつあり、しかし国鉄から日教組へと一歩一歩敵の集中攻撃のもとに守勢の闘いをつづけている労働運動が、真の転機を迎えることを可能にするであろうことを全学連の中の革命的社會主義的學生は感じとり、一歩足をふみだしたのである。

かかる転換の内容をもった全学連第十二回臨時大会は完全な意志の一致のもと、秋の闘いの進軍ラッパを吹きならし、この転換の全国の実践過程がはじまる。

進軍の開始は、奇しくも労働運動と日本社会主義運動の転機と照合していた。

七月の国鉄労組大会における民同左派と民同右派の六年ぶりの癒着、山形山の上大会以後新聞紙上を一カ月にわたってにぎあわせたのち七月末ひらかれた日教組職時大会での平垣派と宮之原派との抗争および後者の勝利は転機の一つの指標であった。

また総評大会を前後とした、高野派、統一懇談会の結集は他の一

な闘いを続ける教育労働者の闘いを全労働者階級から孤立せしめていたのである。

この総評主流派の右傾化に反対する下部の労働者層の表現として結集された統一懇談会は、現在の労働運動の左翼としての役割を果そうとしており、その限りでは以前の高野派よりはるかに前進した勢力ではあるが、戦術的左翼にもかかわらず、その革命理論のかりもの、性格により、さきに批判した「平和闘争論」「民族解放革命論」「国民戦線戦術」「構造的改良の社会主義革命論」などに依拠する枠をとって進むことをしないために、真の革命的左翼としての役割を果しえず、また大単産に依拠する官僚主義者としての民同左派の政治的マヌーヴァーに対抗しえないでいる。しかも労働者政党としての社会党は左派の中核たる総評民同左派の右傾化を反映して、岸自民党の高姿勢におしまくられた総選挙闘争の後では、ほとんど闘いを指導しうる姿勢を保持しない低姿勢を続けていた。

期待された共産党第七回大会は、一つには過去十一年の貴重な教訓を真剣な自己批判のうえにたつてくみとることをふたたび後にのばし、しかもあれほど華々しくおこなわれた「綱領論議」の結果、泰山鳴動してねずみ一匹といった行動綱領の採択で終るることによって革命的労働者階級を失望させていた。しかもその後の状況はふたたび「平和闘争」と「民族統一戦線」の国民戦線論がアカハタの主張に一貫しはじめて、全く労働者の闘いから立おくれている。

このような労働運動指導部の状況を反映して、支配階級と労働者階級の対決の中心として九月十五日の闘いを頂点にした日教組の勤評闘争がたたかわれていたのである。

労働運動指導部の先述せる状況は、日教組の孤立化とその動揺を

つの標識であった。そしてこの総評大会と日教組大会と日をおなじくして、十一年ぶりにひらかれた日本共産党の第七回全国大会が、第六回全国協議会以後三カ年の党内論争の結末がいかなるものかわからないままに、「党章草案」として発表された綱領の一部であるスローガンの「行動綱領」と「モスクワ会議の二つの宣言について」の文書を探検してこれを行動の指針とすると発表しておわったことはもう一つの目印であった。

これらの指標は、世界の激動期の中で日本ブルジョアジーが開始した反動攻勢と資本攻勢のなかで、一歩一歩その力をたくわえ、昨年三月の春闘の国鉄闘争に爆発し、新潟闘争、秋季闘争、(鉄連、造船)今年の春闘(私鉄、全通、炭労)へと、資本に肉迫しながらなおこの抵抗の壁をうち破れないままに闘いを続けてきた労働者階級の闘いの今後を決定する指導部隊の再編成が始められつつあることをものがたっていた。

だがその再編は労働者階級の革命化を促進し、支配階級を震撼せしめるものであったか？ 否、総評主流派は、その左翼的言辭にもかかわらずあらゆる闘争の激化のどたんばでの裏切りの後退戦術によって、ブルジョアジーの各個撃破正面突破を許し、改良主義者としての姿をますますあらわにしていた。そして官僚主義者の面目を躍々と發揮して幹部をのりこえて進みつつある左翼化した労働者の闘いを孤立させ、冷却させる裏切りの方向に固定しようとしていた。「敵は強い、正面攻撃に対して姿勢を低くして迂回し組織をかためろ」かれらの有名な組織論は、国鉄労働者からその戦闘力を奪い、これに氣をよくした日教組への全力を集中したブルジョア反動政府の攻撃に対して、愛媛から東京へ、東京から和歌山へ、と頑強

生んで闘いは困難をきわめた。

このなかで学生運動の第一の段階が闘われる。

九・一五の闘いにおいて、さらに各地の勤評闘争とこの中で闘われる道徳研修会ボコイト闘争へ、革命的學生に導かれる学生運動は支配階級を脅かすとともに労働運動の指導部、「社会主義者」たち、小ブルジョア・イデオログたちをも驚かせる。

全学連のなしたげた転換が、労働者と共闘する學生の闘いによって労働者階級に伝播し、みずからの政治的仮面が下部労働者にはがされ窮地においやられることを本能的に感じとった労働運動の指導層たち、社会主義者たちは一斉に対策を講じあらぬ非難をあげた。共産党日刊機関紙「アカハタ」も公然と学生運動への批判カンパニヤをはじめた。

全学連の孤立が叫ばれる。

だが、孤立はいつもつきまとうものである。火瓶の類のばかげた極左セクツト的孤立は階級闘争のなかで粉砕されるだろう。

だが、労働運動の現存の指導部からの、そして「現在の社会主義者」からの孤立は名譽ある孤立だ。

名譽ある孤立は決して、すべてからの孤立ではない。

労働運動の守勢。学生運動を「友」にするべき、主力部隊の指導部からの非難。そして、偉大な転換をなしたばかりの革命的學生の政治的幼稚さ。

学生運動の転換は、この孤立の中で困難な形式をとって進められていく。しかし、まかれた種はやがて育つものだ。

学生運動の転換の正しさを本能的にとらえた上部の労働者階級の左翼は、この孤立を暖かく見まもる。

学生大衆のなかにも漸次、滲透していく。この芽生えまでの地下でつづけられる種のふくれを見ることのできぬ「社会主義者」たちは、全学連の衰退と、滅亡を予言し、「心配」する。

だがかれらは一カ月の後激動せる政治情勢の展開と下部労働者のエネルギー爆発をみずから、まごつきおそれさいいだいたその時期に、芽をふき見事な双葉をひらいた学生運動の転換の現実的成果に再度、仰天驚愕せねばならなかったのである。

理論と方針の左翼化を意味した「大会」での討議が「一部学生の革命的空論とお喋り」ではなくて、広汎な圧倒的學生をとらへ、さらに下部労働者への影響を強めて、労働者の革命的左翼とともに労働運動に影響を与えつつあることの事実について、おそれを抱いたとしても、もはや無視するわけにはいかなかったのである。

そこでこの現実をさまざまに解釈する「社会主義」評論家がふたたび労働者の味方の顔をして喋りだす。「学生があれほど動いたのは、政治危機意識が存在し学生をとらえたからで、全学連が正しかったからではない」

政治危機意識の内在だけが大衆をたすすならばいかなる前衛党もいらなくなるだろう。学生運動の昂揚は危機をつげる「ブルジョア新聞」の存在で十分だ。

なるほど政治危機意識と、労働運動の昂揚、広汎な知識人が立ち上ったことが多くの学生を政治活動に参加させたことは事実だ。

だが、この労働運動とともに、断乎たる政治的大衆行動に立上る方針をもっと早くうちだした全学連のよびかけのもとにこの広汎な学生の参加したのはなぜだろう。労働者階級にゼネストをいち

やくよびかけるその視点を全学連がうちだしたのはなぜだろう。

他の諸団体が「反対声明」をだしているだけで討論のみがおこなわれている十一・五以前に十一・一五、一二・二三と、多数の学生がすでにストライキを含む大衆的行動に立上っていたのはなぜだろう。

さらに、社会党の指導する国民会議の呼びかけた十月二十五日にはなく、全学連がよびかけた十一・二八、十一・五にこの広汎な学生が結集したのはなぜだろう。

もし全学連に反対しながら、このように広汎な政治的活動に参加した学生が、あらゆる弾圧と、誹謗と批判カンパニーが組織される「好条件」にあつて別の政治勢力として結集されないのであれば、さらにまたもつともらしいカンダリのすぎな論者はいう。「全学連は批判されて方針を右よりに転換したのではないか」

だが、十一・二八のあの未曾有の学生の参加にひきつづいて、労働者階級の政治ストの行われた十一・五に、国鉄労働者のストライキを支持し、これを防衛するという階級的闘いに四千名の学生が前夜から泊りこみで完全な行動隊として組織され午前三時から立上った（東京）ということは、全学連の方針の右旋回によって可能だったのか。

かの砂川闘争——何人たりともその意義と、そこでの全学連の役割について否定することはできない——もこの国鉄スト支援闘争にくらべるならば、階級的な性格においても、泊りこみ行動隊に組織された動員数においても劣るものであった。

しかし、今回の「国電をストップさせる国鉄労働者の闘い」を完全に支持し、その防衛にあたる」という行動目標は階級的視念にたたなくては決してできない方針ではなかったか。

無縁な老いた小ブルジョアの老練心、いやそれ以上に罪深い社会主義者の恥とすべき行為である。

四

日本労働運動がかかると重大な転機にたつてるとき、どの指導部も労働者階級への適切な答を与えないにもかかわらず、労働運動の重要な同盟部隊としてみずから転化させている学生運動に、執拗に浴びせられる異常なまでに憎しみをこめた批判と攻撃は一体なにを意味するのであるのか。

十一月十三日——敵も味方も、異常な関心でみつめているうちにひらかれた社会党臨時大会が、労働者階級の期待に反して妥協への道をひらく方向をとって、動搖に動搖をかされていた支配階級がほつと安どの胸をさすりおろしていたその翌日——おそらく十一・五以後の激動した政治情勢のなかでもっとも重要な新しい局面が生れようとしたその翌日——したがって十一・五以降なお昂揚の道をたどっていた労働者階級が、この労働者の政党である社会党にその方針を期待しながら、その期待を全く裏ぎられてこの昂揚したエネルギーをいかに導くかを見失っているその当日——労働者階級の前衛党日本共産党の機関紙「アカハタ」は労働者への指針を与えるべき「主張」の欄を大きくとって「学生運動にもぐりこんだ挑発者とたたかへ」とよびかけ、労働者・学生を当惑させ、全学連弾圧の機を狙っていた警察当局をよろこばせた。

学生運動の転換は、やがて労働運動の転換を誘うのであろう。労働運動のかかる転換をうながすことをサポータージュして、全学連の「左翼化」を憂い、歎くことは、プロレタリアートの仕事とは

げたこの「主張」をよんだころあるものは、ここにある内容と形式が、八年前に日本革命運動と学生運動が経験したあの恥ずべき、日本共産党の一派の言動とあまりにも相似していることに驚いたのである。

一九五八年の「アカハタ」はいう。

「……法政大学細胞の行動は、国際共産主義運動を破壊するトロツキスの思想のとりことなり、党の政策と規律に反抗し、これを破壊しながら自ら挑発者の役割を果している。かれらは……党と階級にたいしてゆるすことのできない犯罪をおかしている。」

第一に、かれらは、挑発者の言動によって政府自民党の悪質な策謀に手をかし、わが党にたいする敵の不法な攻撃に手をかしている。かれらの行動は国際共産主義運動とわが党を破壊しようとしているトロツキスの思想に根源をもっている。……かれらの行動は偶然なものでなくわが党をかく乱する意図によって行われている。それはわが党組織を破壊に導くものである。……第二に、かれらの行動は学生運動に大きな損害を与えている。

トロツキスト的挑発者の思想は、社学同、全学連指導部を動かし、かれらの指導の下にまじめな学生大衆の運動がつねにゼネスト、試験ボイコット、警官隊の衝突をめざすデモ、ピケの冒険戦術で誤らされている。

学生運動は危機におとしいれられている。……かれらの行動は、民主勢力の統一と、国民大衆の統一行動の可能性をぶちこわすものである」

「……われわれは……学生運動のなかにトロツキスト的挑発者がもぐりこんでいることに全党員の注意をうながすものである。」

同時に彼らの影響下にある多数の良心的学生をその影響下からきりはなすために、闘争を指導するよう訴える」（一九五〇年「アカハタ」原文のまま）

朝鮮戦争の前夜、戦争放火のために来日したダレスらの陰謀をいちはやく見抜いて、米軍の占領下のもとにありながら勇敢な闘いを組織するべく立上りつつあるその前にまたいう。

「……この重大な時期にあたって全学連中央に巣食う挑発的分子は危機を訴え、革命的言辭を弄しつつダレスの訪日のさい「直接」陳情させる計画を仕組んでいる。これはわが党の方針に無縁なばかりか全国的学生を反動の思うつぽに誘導し、はては日本全人民の愛国的行動を混乱に導びく重大な挑発行為の何ものでもない。」

愛国的学生運動を守るためにかかる計画を学生の手によって未然に粉碎し、学生の利益を本質的にさまたげる敵をうちくだくために……全力をそそがねばならぬ」（アカハタ一九五〇年六月一日付主張「学生運動の新しい発展のために」）

もし、日付を伏せておいたならばこの二つの引用した言葉の間に八年間の月日がながれているということを即座にみやぶるものはほとんどいないであろう。

しかも、確実に存在する八年間の時日の経過は、「アカハタ」にとつて、日本プロレタリアートにとつて、また日本学生運動にとつて忘れざるにはあまりにも悲惨な、無視し難るにはあまりにも豊富な、ふみにじり消してしまふにはあまりにも貴重な、革命的教訓にみちみちたものであるのに、

「べんの映画物語なら「八年目の浮気」と笑い流されるであらう。」

これらのトロツキスト的挑発者の言動にたいしてたかうことは党と階級の利益をまもり、敵の策謀を粉碎し、民主勢力の団結をかちとるために緊急の任務である。……全党員が警戒心、原則性、決断とをもつて、挑発者とたたかうことを訴える」（十一月十三日付「アカハタ」主張）

「一九五〇年「アカハタ」は全金属・全自などの労働者階級の六・三ストと反帝平和反イールズの全学連六・三全国ストの前日「警戒せよ党破壊の策動——全学連中央に巣食う悪質トロツキスト——」の東京都委員会の「全党員と学生に訴う」を掲げていった。

「……このなかで、さきに党から悪質な非階級的分子として排斥されたスパイ、分派主義者どもが表面はきわめて革命的言辭を弄しながら、党の統一を破壊する策謀をしつづけていっていること、たいし全党員が決定的な階級的防衛心をはらい、だんこれを大衆的に粉碎するために全力をふるわれんことを訴える」

「とくに全学連中央に巣食う委員長武井昭夫……東大の……らの行動にたいしては重大な警戒心をもつことが必要である」

「かれらの一味は五・三〇大会においても大会主催者の統制下に入らずかつてに挑発的行動を組織しようとした」

「かれらは学生のみを挑発的夜間デモを監視庁にかけ……」

「かれらは諸条件を無視した闘争方針を革命的言辭のもとに強調することによって、困難な闘争の現実を小ブル的に動揺する党の弱い部分につけいるとする……これこそ、きわめて危険なくむべき敵であることを全党員は銘記し、とくに学生黨員諸君がこの悪質なトロツキスト的分子の一団のあらゆる工作をだんこ革命の戦列からく逐することに努力する事を要求する。」

う。しかし「五〇年の党の分裂はわが党の歴史のなかでもきわめて不幸の出来事であった。それは全党に深刻な打撃をあたえ党の力を弱めただけでなく分裂した双方の誠実な同志に大きな犠牲を与え、また多くの大衆団体に分裂と混乱を波及させ、日本人民の闘争に大きな損害を与えた。そこから教訓を学んで、将来ふたたびこのような不幸な事態をくりかえさないようにすることは緊急の任務である」

（野坂参三「日本共産党第七回大会中央委員会」前掲誌一九五八年臨時増刊一四五号、五四頁）と、約三カ年にわたる月日と三冊もの文献までだして大衆運動の指導を忘れさせるほどの「熱意」をこめての討論の結果をたつた三カ月前にこのような言葉でかたつた前衛政、党と、「数年来……犯した数々の活動の誤りの累積」——「すなわち五二年、第五回大会において全学連創立以来一貫して日本学生運動の正しい発展の先頭にたっていた指導的メンバーを一党派の争いによって民主的規約をふみにじつて半ば暴力的に追放する行為」等々によって行き詰りを示していた日本学生運動。その結果「一九五五年秋にいたつて全般的混乱と沈滞に陥つた」（全学連書記局編「全学連第九回大会報告決定集」二八—三三頁）とき、「いくつかの学校ではじめられた過去の運動の誤りの科学的検討」（同上書）が「党」共産党の学生運動の指導の誤りから、党の政策の根本にいたり五〇年分裂の原因にまでさかのぼっておこなわれ」（加藤明男「六全協以後の党活動と日本学生運動の再建」日本共産党東大細胞機関誌「マルクス・レーニン主義」九号一九五八・一）この「つぎの時期に沈滞を打破る貴い基礎」（全学連九大決定集）があつてはじめて五六年四月以降の輝しい再建と今日にいたる発展がありえたという二年半の過程をへてきた全学連とのあいだに現在おこつ

ている生々しい物語りであるがゆえに、社会主義者は看過しえない。

そして問う。歴史は二度繰りかえされるであろうか？

結構な「時の動き」にとびついたNHKラジオ放送は録音構成「批判される全学連」（十一月十九日）を特集したが、私はここに登場する問題の人々の声をきいて、繰返されるものと繰返されないものを感じたのだ。

「学生の観念性による理論のもてあそびと小ブル的急進主義によって敵階級の挑発をゆるし彼らを利用している」（共産党書記長宮本顕治氏）というヒステリックな言葉のなんと八年前の罵言との相似性！

これとは全く対象的に、全学連香山委員長は全学連の創立と目的、そして現在の警職法反対闘争の方向をたんと語り、同じく森田中執は、代々木からの情報と公安調査庁からのニュースと伝えられる全学連、社学同の「二月革命説」の噂を強い語調で否定する。たしか香山、森田君は共産党から除名されているはずの人だが、三十万の学生の結集体全学連の指導部としての責任から、個人の感情を殺して、全学連と共産党をかみあわせようとするブルジョア・ジャーナリズムの挑発をかるくかわしたのであろう。

あるいはすでに一つの政治勢力にまで発展してきている現在の学生運動の力量についての自信のうえにたつて、現実の階級闘争の指導、とくに、学生運動の指導においてなんらの前衛としての役割をはたしていない共産党の批判はあえて反批判するのを感じなかったのかも知れない。

だがいずれにしても一九五〇年のそのままのくりかえしではない

「歴史は二度おなじようにはくりかえさない」とつぶやいたのだ。

つい個人のつぶやきが長くなってしまった。先へ進もう。

学生運動と社会主義的党との関係の新しい段階を予想させると客観主義的に私はいった。

しかしもっと目を運動の中においた立場に立つてものをいうならば、前章までにのべたように、学生運動の転換は、これを支える社会主義的學生によってなされたものであるかぎり、この仕事がいかに日本の社会主義運動との関連で行われ、また今後なされねばならぬか、学生運動のなかの社会主義的學生は、現在の社会主義政党によってなされている誤れる批判を、いかに克服して進まねばならぬか、そしてさらに一歩進んでいかに社会主義運動を発展させるのかというふうな問題を提起せねばならないであらう。

歴史はどのように進んだのか現在の学生運動転換にいたる歴史的過程の素描を行おう。

この観点からみると、戦後日本学生運動は戦後の再建から現在にいたるまで、誤れる社会主義——マルクス主義理論と、マルクス主義政党の内部における誤れる方針に対する革命的社會主義労働者學生の休みなない闘いなしには決してその発展はありえなかったといえる。学生運動は共産主義運動の消長をもっとも敏感に、もっともすなおに反映していたのである。その関係をごく簡単に見よう。

一九四五—四七年の日本労働運動の昂揚とその最初の挫折に至る時期。日本でのマルクス主義運動の再建と学生運動の創設の過程の闘い。四八年、労働運動の中での分裂工作の成功と学生運動における共産主義者の指導権の確立およびはじめの全国的政治ストライ

ことを感じたのである。また全学連批判者として登場したはずの日教組宮之原書記長が「若干のゆきすぎはあるかも知れないが、正義と恐れを知らぬ情熱にもえた学生運動に尊敬の念をいだいている」というを聞いたとき、はて日共書記長と、社民であり「宮之原派」の統領はいつのまにか右と左のいれかえをおこなったのかとまごついた。日共さえ極左と非難しているのに、社民幹部がほめこそすれけなしはしないこのことは、たとえ宮之原氏の腹の中がどうであれ、また実際にはどのようなことをしておれ、五〇年には考えられなかったことだろう。

さらにいかりに喘ぐ声をマイクにぶつけて「われわれはかかる代々木共産党の弾圧には対しては徹底的に闘う。このように墮落した前衛党はその名に値しない」と糾弾し「われわれはかかる無能な共産党をのりえて、新しい階級政党を結集しなければならぬ」と叫ぶ法政大の一社学同盟員の声には、共産党がただ共産党であるという理由で神聖化する権威主義の片鱗さえうかがえない。社会主義政党についての絶望と、これをのりこえてすすもうとする戦前の二〇年代にも似た闊腕に私は驚いた。

五〇年のときには全学連中執による大衆的抗議は激しく行われこそすれ、また共産党正統派Ⅱ統一会議派を組織し、対抗しこそすれ、「新階級政党」を叫ぶ學生は存在しなかった。

おそらくはデスクで大きくカットされた部分があるだろうと予測しながらも、各氏の声をきいた私は、この録音構成が現在の社会主義政党と学生運動との関係に生じている危機的状況と、その克服の道についてのある真実を語っているのを感じざるをえなかった。

そして

キと全学連創設の年。東大細胞の解散と、近代主義的日和見主義との闘い。

四九年—五〇年。日本プロレタリアートの大敗北と労働運動における共産主義の指導権の喪失の過程での学生運動。その論争。（戦後日本労働運動小史（）大学評論八号—一九五四・六発行および「最近の学生運動—全学連中央グループ意見書」一九五〇年発行参照）

五〇年—五二年。日本共産党の大分裂と学生運動の勝利に輝く反帝闘争から、全学連の共産党所感派による占拠および分裂。（学生評論、六号、七号、八号所載論文。いずれも一九五〇年発行。立命評論一五・一六・一七号所載、吉岡憲治「国際学連の旗はなびく」など参照のこと）

五二年。共産党の極左戦術の学生運動への潜入と学生運動沈滞の開始。

五三年—五五年。共産党の右翼的、セクツの方針の学生運動への漫延。（東大学生運動研究会「日本の学生運動—その理論と歴史」新興出版社一九五六年刊の戦後日本学生運動史など参照）

五五年—共産党の六全協と学生運動の沈滞と混乱。その中で革命的學生による再建の努力の開始（加藤明男「六全協後の党活動と日本学生運動の再建」日共東大細胞機関誌「マルクス・レーニン主義」九号所載）

五六年—五八年六月。共産党の統一を契機とした過去の教訓の摂取にもとづく再建。八中委路線の確立と、運動の再建。日本マルクス主義運動の再検討の動き。

砂川闘争を契機とした激しい論争の開始と、日共党章草案発表にもとづく革命論争の展開。ソ同盟廿回大会、スターリン批判、ハン

ガリヤ事件を契機とした国際共産主義運動理論の危機と再検討の開始（全学連書記局発行九十一大会、八十六中央委員会各報告決定集、立命評論十四、十五号など参照）五八年六月——現在。

全学連第十一回大会、社学同創立と十二回大会路線。日共「六・一学生事件」と第七回全国大会。

簡条書にただけでもこれだけになるこの論争の歴史は、日本革命運動の転換を準備せねばならないプロレタリアートが学ぶべきかぎりなく豊富な教訓にみちたものであるにもかかわらず、部分的には語られているが、いまに至るまで社会主義政党によって正しい回答はなされていないのである。そればかりかすでに批判され、実践の鉄火の試練の中で歴史的に破産を宣告されたはずの謬論が臆面もなく日々労働者階級に放散されている。

一九五五年七月にひらかれた、日本共産党第六回全国協議会は、それ以前のマルクス主義理論のおそるべき独断と、誤りにみちた共産党の戦術への徹底的批判を開始するべき一つの重要な機会を与えた。このとき以来、漸くにしてせきをきったとくなくされたかす多くのマルクス主義の再生の試みはまず過去のおおいかくされて五〇年―五一年の論争の発掘から始められた。

共産党の「犯すべからざる神聖さ」によって発言を封ぜられていた革命的分子は口をひらきはじめた。

共産党への「絶対的信頼」によって、その御用学者的存在となつて革命的レーニン主義を裏切り、学問的良心も売り渡していたマルクス主義学者たちは、共産党の自己批判の開始が突如として上から与えられたとき、電撃的ショックをうけ口をつぐんでしまった。そして次には涙を流さんばかりの自己弁明と党への不信を表明しつつ

起したのであるに！

だがこのときより二年半経った今、あの電撃ショックをうけたはずのマルクス主義の神経病患者は、全身をつらぬいた強烈な衝撃の記憶をもう全く忘れさったかのようになにごとにも感じないうつろな眼で修正主義との闘いを云々する国際共産主義文献をよんでその解釈に目を過している。

口をひらいたはずのかつての革命的分子は、またふたたび自己防御のカギの殻にとどこもったとくである。

三年間の年月をかけ、ほとんどこの間の重要な階級闘争まで忘れるまで費された五〇―五二年の分裂の教訓摂取の努力は「統一がなによりも大切だ」という一言だけで終り、その討論の結末がついたかつかないうちにふたたび、同じことばによる攻撃が学生運動に加えられているのを社会主義者たちは黙して手をこまねき眺めているかのようなものである。

五五年から三カ年の月日は社会主義者にとっていたずらに費されたのであろうか。

「だれもが語らないときに一層語ろう」という原始クリスト教殉難者の勇気は革命的社会主義者のつねに持ちあわせたものである。革命的精神をぬいてしまったマルクス主義があまりに往行している今日では、この書生、つばくみえるロマンティズムは決して笑い去られるものではない。

五六年一月―二月の授業料値上げ反対を契機として始った学生運動と解体の危機に類した全学連再建の過程は、決してただ学生運動の再建としてのみ記憶されるべきではない。

この過程は、五〇―五二年の経験を経て、党からスパイ扱いをさ

みずからの立場を合理化するための臆病な努力をおすおずと始めた。しかし、それがどのようなものであれ、与えられたこの機会には、社会民主主義者の指導の下にあって共産党の直接の影響からは遮断され、ほとんど相対的な独自の道を歩むべく余儀なくされているが、不屈な階級闘争をつづけて戦闘力を次第に蓄積してきた、労働者階級にとっては貴重な機会であったのだ。

保守合同と社会党の統一という戦後政党の再編成が行なわれたこのときに革命的プロレタリアートが、革命運動の教訓を完全にわがものとしつつ徹底的自己批判のうえに、マルクス主義の革命的再生に成功したならば！

五五年につづく翌五六年には、さらに数千倍も大きな電気性衝撃が国外から日本の、いや世界の共産主義者たちを見舞う。五六年二月のソヴェト共産党第廿回大会の席上のスターリン批判の報道。さらに六月のフルシチョフ秘密報告のアメリカ国務省によるすっぱ抜き。十月のポーランド政変。ハンガリー暴動。と目の廻るようにおとずれる国際共産主義運動にわたる歴史的諸事件の連続は、各国においてと同様に、それ以上に、国際的権威の上にのみ依拠していた日本の社会主義者マルクス主義者の仮死的症状をつくりだした。

しかし、病の根元が根深ければ根深いほど、その根治は一時的仮死状況におちいることをおそれない大手術を必要とする。

「三十年にわたるレーニン主義の忘却」は、五六年の「マルクス主義者」の痙攣性ショックを当然ならしめた。もしこののときに、大手術によって、奥深く潜んでいた血腫をだすことを嫌わない大胆さと勇敢さをこれらの患者が有していたならば、このショックはマルクス主義の革命的再生という劇苦に値する喜ぶべき結果を惹

れて戦線から離れていた共産党員の復帰をきっかけとして、東大、早大、立命大党細胞など、あるいは反戦学生同盟の伝統を守りつづけてきた中大などの一部革命的學生が共産党とこれに指導された革命運動の敗北の歴史とこの日和見主義に対する党内外の激しい論争の教訓を学ぶことからはじまった。

「結党以来のわが党の弱点と病毒が純粹に結晶し」「おそるべき腐臭をはなつていた時期」（加藤明男「六全協後の党活動と学生運動の再建」『マルクス・レーニン主義』九号・五頁）五〇―五五年の共産党に入党し、おどろべきほどの犠牲を嫌わぬ情熱をもって学生運動に、あるいは非合法的党活動に専心し活動をつづけてきたこれらの多くは傷つけられたみずからをいやすためにもある意味では捨身の形で党活動の検討を開始したのだ。自分の感覚にたよることしかできなかった当初の呻吟は、苦しめば苦しむほどその検討がマルクス主義の武器によらねばならぬことを教えた。しかも歪曲された虚勢された「マルクス主義」に代るに真のレーニンのマルクス主義の武器を求めねば！かかる呻吟のうちの発見は急速に、革命運動の諸戦術とともにマルクス主義理論、修正され、歪曲された歴史への検討にかれらを誘う。だが、革命的マルクス主義とは、過去の歴史を書くためにあるのではなく、現実の階級闘争の指針としてのみ、世界を変革するためにのみ存在する。

かかる論理の必然性は、かれらの努力の方向を規定した。

約半カ年の混沌のなかで、「六全協の皮相な理解反対」「科学的マルクス主義、自己批判に代る道徳的反省反対」のスローガンを掲げて、敗北の教訓を塗りかくそうとするものと闘ったかれらは五五年十二月にいたって、この間にのこした教訓をひっさげて学生運

動の革命的再建の第一歩を歩み、しかもこの実践のなかで破産した「新綱領民族解放革命論」をはじめとする、証明されたそれまでのマルクス主義理論の破産を宣告し、いきのこっている非マルクス主義的思考との論争を続け、マルクス主義再生の仕事にとりくんだのである。

いきのこっていた非マルクス主義思考から生れる理論と戦術がいかに当時の学生運動を危機におとしめていたか、そしてその克服をいかに短期間に成功に行いえたかは、全学連八中委から九大に至るまでに周知の諸論争と、学生運動の展開を見ればあきらかになるであろう。私はここでこれをくりかえしはしない。

ただ一つの事実。このように共産主義的学生によって学生運動再建が進められたにもかかわらず、共産党を代表する指導者たちは、全学連第七回中央委員会の席上で砂川一良東海地方委員が「学生運動に多くの迷惑をかけたことをお詫びする」とのべた以外には、なんらのマルクス主義的自己批判を学生大衆に示しえなかった。それだけでなく、小選挙区制反対にストに立上った学生運動に対し、「教授との統一をみだす傾向」という批難さえ中央委員会の名前で行われた（六中総）

学生運動において革命的學生の手によって、かかる急速な転換が行われているのに比して、「産別」を崩壊にまで導いた労働運動指導の誤りの糾明は遅々として進まなかった。

しかしちょうどこのときひらかれた第廿回大会によるフルシチョフ報告にはじまりコミンフォルムの解散、スターリン批判の暴露などの国際共産主義運動の新展開と、きわめてゆるやかながら漸次はじまったマルクス主義理論の再検討、過去の誤りについての諸検討

のひろがり、五六年十一月になって、共産党中央による新綱領の全面的検討の開始のよびかけ（九中総）をうながしたのである。このとき以来戦後のいづれの時期よりも活発に革命論争が始まる。

だが労働運動の主流よりはなれていく共産主義者たちのこの華々しい論争は、過去に経験した日本プロレタリアトに対する血のにじんだ敗北の歴史を学びとろうとしない無責任さと、さらに現実に生起する労働者階級の闘いをどう勝利に導くかという革命的姿勢の欠除の土俵でおこなわれたことのために、社会主義革命か人民民主主義革命か、平和革命必然論か、暴力革命不可避論か、独立か従属かと、はてしなく議論がくりかえされながら、復活しつつある日本帝国主義ブルジョアジーと日夜激しい闘いを行っている感覚とは全くかけはなれたものであった。

このなかで八中委―九大の転換のもとに砂川闘争の勝利にみられる無類の学生のエネルギ―の爆発をひきだすことに成功しつつ、労働者階級とならんだ一部隊として成長してきた学生運動の先頭にたっていた革命的學生は、ふたたび新しい実践的論争を経験する。砂川闘争をめぐるあらわれた高野（当時全学連書記長）牧（同副委員長）路線といわれた日和見主義との論争、第十一回大会まで続いた論争がそれである。

最初は、戦術問題と思考様式との相違に始まったこの右翼的ライソンの実践上での論争は、革命論争の進行につれて、理論上の論争に発展するというマルクス主義の論争として全く当然の、しかし、その逆をいく解釈学の大家が揃う日本の中では余りみられなかった、過程をとったのである。しかもこの論争は学生運動の第一段階の再

建の道筋が、革命的學生の革命理論の検討から始められながら、全国的には政党による統一の指導のないままに全学連の大衆的団体の大衆的闘争によって一挙に行われたため、学生運動の中の革命的マルクス主義の指導性の不均等を生みだしていた歴史的条件のなかで行われた。

この条件のため、論争の核心が暴露されるまでいくつかの不必要な雑音を伴い、その全面的な理論的対決と、この対決を通じて一層前進した革命的マルクス主義の均一化された指導のもとに、運動が再脱皮するには約一年半の月日が費される。

学生運動の指導層のなかに生じたかかる対立を敵階級はみのがすはずはなかった。そうしてまた、全国的にますます力を拡大し政治勢力としてまで発展し最左翼の道を歩む全学連や、そしてこれを指導する革命的分子を快よく思わず、しかも恐怖心まで感じてきていた社会主義者や共産主義者も、かかる分派の発生を喜んでこれに最大限の支援を与えた。

理論的には少しちがっても構わない。かくて全学連中央反対派がつくられる。一九五七年暮、運動再建後最初の大がかりな全学連批判カンパニーが組織される。

この攻撃は撃退される。

しかし、この撃退にもかかわらず、先述せるこの論争を通じて再脱皮の道が統一されていいたために、五七年暮からの若干の学生運動の下降と、部分的混乱が生じる。

しかし右翼的潮流との闘争と革命論争のなかで、学生共産主義者の真のレーニン主義理論の復活と再生への模索の道がつづけられていく。

さらに国鉄闘争、鉄と船の秋季闘争、全通、私鉄の春闘、日教組の勤評闘争、とつづく労働者階級の階級闘争を目の前に、これとともに関わっている革命的學生たちは、階級闘争の真の理論を求めざるをえない。

スターリン批判によってきりひらかれたかのごとく見えた国際共産主義運動の勝利と敗北の教訓についての深刻な検討は、「修正主義との闘争」という名のもとに、強制的な安定をとらせようとしていた。

ソ連の人工衛星の打上げを頂点とした「軍事的優位」という一つの現象で階級闘争の諸理論が塗りつぶされ、廿回大会路線への安易なよりかきりは、国内の階級闘争の現実から全く遊離した論争をくりかえしていた。

この最中に、学生運動の共産主義者はおそれることなく、あらゆるドグマを打破って、階級闘争のレーニン主義的理論の武装によって高野派の右翼的潮流と闘いつつ、革命論争の中の革命的左翼を形成しつつあったのである。

今年の四・五月闘争はかかるなかで闘われた。そして六月第十一回大会は、すでにのべたごとく、高野らの終焉の場と同時に学生運動転換の開幕を上げ、学生社会主義運動の新しい頁が始まる。

反戦学生同盟は、同じとき社会主義学生同盟へ発展転化を声明、解散した。

しかもこの転換の過程がただ一部分の左翼化によって特徴づけられるのではないことは、前号でのべたごとく、五二年―五四年、共産党所感派の指導によって学生運動が右翼の方針のために停迷の道歩んだそのときに全学連にあきたらずして結成された全教学協・

全夜学連が、五六年以来全学連との協同行動をつづけた結果、ついに新しい前進の開幕をつける全学連の方針のもとに統一することを決定し、その組織を発展的に解消したことをみても明らかである。

さらに、学生運動のなかでの革命的學生は、新しいマルクス主義の再生をめざした社会主義理論の創造的研究活動を組織し、五二年以来、崩壊していた全国社会科学研究会連合（社研連）の再建を八月になしとげた。

これらすべては、ただに「全学連の転換」のみではなく、日本学生社会主義運動にとつての新鮮なポリウムのある転換が、全学連創立十周年にふさわしく、世界的階級闘争の新段階に適応するかのごとく、行われたことを象徴的に語っている。

「全学連第十一回大会が創立大会にも比すべき重要な大会である」といわれた言葉を大人びた顔をしかめて、あざわらうように歎いた「全学連創立の貢献者」（「中央公論」九月号）学生運動家に忠告する「吉田嘉清」であり、かつて革命的學生の名を昂く響かせ「トロツキスト」と非難されながら、社会主義學生運動のために闘ったはずの先輩は、このことがわからないで、革命的姿勢を失ってしまった老いた「先輩」であることをみずから暴露してしまったのである。

革命的學生は、高野らのあくどい分裂策動の完全な封殺に満足せず進んでいる。

「六・一の代々木本部暴行事件」とこれを機会にして始められた共産党中央の全学連幹部に対する処分と、アカハタによる曝露の記事は、ジャーナリスティックな興味と、学生運動指導部に対する共産党同調者らの不信とをよびおこしたが、同時に大井介が「新日

派の指導する右翼反対派の裏切りの分裂工作と、その理論の誤りに

ついて、さらにこれと闘った全学連指導部の方針についての正しい教訓の撰取についてはかなりの頁を費して語っている。（「日本の学生運動」その理論と歴史」東大学生運動研究会）

しかし、約二年にわたる分裂と闘争ののち、五二年にいたって、「日共主流派および右翼反対派が学連における指導権を獲得し」「所感派の側から学連組織は一応『統一』をみた」（同右書二三〇頁）という結末の（たとえ一時的にせよ）事実については、ただ事実をのべるだけに筆をどめている。なにゆえに、この結果で終わったのか？ このマルクス主義者としての問は語られていない。獄中十八年を誇ることにによって戦前の党と人民の闘いの敗北の原因を追求しないで戦後の共産党の再建の中に、その誤りをもちこんだ思考方法と大差はない。

スターリンの恐るべき罪悪を暴露したのみでなにがこれを可能ならしめたかということを追求するのを怠ったフルシチョフ秘密報告の非マルクス主義的思考を非難するまえにみずからを省みなければならぬ。

しかも、あの「右翼反対派」による学連「統一」がもたらした数年におよぶ結果を見ると、「われわれは闘った。しかし敗れた」というのみでは済まされない。

「敗北の事実をみとめ、敗北の教訓を学ぶ」ことを怠る傾向が、国際的にも、国内的にも横行しているとき、われわれは声を大きくして敗北の教訓を学べ、という。

「歴史は二度同じにはくりかえさない」ことを保証するのは、かかる教訓を学びとって今後に生かす革命的學生の努力にこそかかる。

本文学」誌上で皮肉にのべているように、学生運動指導者と、共産党中央との間に長期の、しかも本質的な理論的政治的対立が存在することをはからずも、全大衆に示した。しかし、その後、六カ月、これらの対立の核心は未だに明らかにされておらず、そして今また学生運動指導部への攻撃がさまざまなデマを交えて行われている。学生運動そのものは、これらの攻撃に堪えて進んできている。

しかし私は、今後執拗に組織的にくりかえされるであろうこの批難を、もし許すならば、学生運動にとっても危機をつくりだすであろうし、さらにまた社会主義運動にも大きな害悪を流すであろうと考える。

革命的社會主義を名のるものはプロレタリアートであろうと学生であろうと、このことを銘記し、口をひらいて語らねばならない。ふたたび学生運動の歴史を想起せよ。もし、誤れる理論と方針に対する闘いにおいて革命的分子が屈伏したり、敗北したりして、運動の指導が非マルクス主義的分子（よし共産党を名のり共産主義を名のるうとも）の手にゆだねられるならば学生運動は停滞せざるをえなかった生々しい事実を目をつぶることは許されない。

もし革命的學生が、理論において非妥協性を貫かず、大衆的分裂工作に対して有効な闘いを組織することに失敗するならば、学生運動の沈滞によって学生大衆の利益を損うばかりでなく、革命運動の発展にも損害を与える責任の一半を担わねばならぬことを銘記するべきであろう。

かかるとき五〇—五二年の学生運動の分裂の教訓を再度学ぶことが必要になってきた。（不幸なことに、この分裂の教訓についてすでに書かれている論文はいくつかあるが、そのどれもが日共所感

ている。

五〇年のイールズ反対、レッド・ページ反対の歴史に残る大闘争を日共所感派からの気狂いじみた攻撃と敵階級の激しい弾圧にありながら右翼反対派の分裂的策謀を封殺して見事に闘った全学連が、なにゆえにその後わずか一年にして日共所感派による暴力的機関占拠を許したか。

この間に答えるにはいまだ書かれざる歴史についての一巻の書が必要である。

だが私はいま歴史的叙述をふたたびさかのぼっておこなう紙面と時間を有していない。

そこでここでは、私は歴史的経過を拾象し、しかもすでに明かにされている右翼反対派、日共所感派の悪い策謀のいわば外部的要因をもすべてぬきさり、問題を全学連多数派（「日共国際派」あるいは「統一会議派」に属した共産主義學生に導かれたところの）活動についての教訓をひろいだし、現在学生社会主義者がなすべき任務に役立つものとしてのみ簡単にまとめるにとどめよう。

第一、右翼反対派と比して、全学連中央派の方針の正しさは今に至るも明らかだが、彼らの理論と思想にも一貫していた階級闘争の利益に先行する国際的権威主義と絶対的組織論こそ、二度にわたるモスクワと北京の一片の報道によって自らの戦列を乱して（一九五〇年九・三「批判」による動搖。五一年八月のモスクワ放送による大部分の學生のなだれごとき「自己批判」と所感派への屈伏）非妥協的理論闘争を放棄させ、日和見主義への屈伏への道をひらくことによって、最後まで学生運動と革命の利益のために闘った全学連中央の革命的學生の孤立を導いた最も大きい要因の一つである。

第二、しかも四九年の敗北以後労働運動の指導が裏切りの右翼社民によって奪われ、革命の方針をもって闘う労働運動がほとんど存在しなかったこと。しかも五〇年分裂に際して、革命的労働者もまた、誤れる日共所感派との方針に抗して立上ったが、その存在はきわめて微弱であり、したがって、全学連の輝ける闘争を導く労働者階級の闘いがなく、必然的に、全学連の孤立が長く続き（この孤立はまさに名譽ある孤立だ！）その間ゲキを縫って所感派による労働運動と学生運動の離反のあくどい試みが一定の効果をおさめたこと。その試みを粉碎し前進しようとした革命的プロレタリアートも多かれ少かれ第一の傾向によって毒されて最後まで闘った部分はきわめて僅かであったこと。

この結果五二年全学連第五回大会での右翼反対派のテロルまで加った常識を全く超えた暴力的占拠が最後に行われるときに、これを批判し最後まで非妥協的闘いを続けたものは、一部の革命的學生を除いては、共產主義者、社会主義者、労働者學生のなかにほとんど存在しなかったこと。

第三、革命の方針のみでは不十分である。

全学連中央派の方針が右翼反対派のそれよりもはるかに優っていたにもかかわらず、第一にのべたことも重なりあって、闘争の沈滞期あるいは下降期における學生大衆の右翼的気分につけこんだ右翼反対派の精力的活動が行われたとき、また全学連中央派のものが動揺したり、あるいは左翼的言辭を弄することだけで真剣な大衆組織を怠りセクト的傾向で自己満足しているところでは反対派は一定の大衆を把握し、全学連中央を孤立させることに成功した。

第四、五〇年の闘争が単に学生運動の論争のみでなく、革命運動

における日和見主義との論争であり、その先頭に全学連中央がたち、しかもこの論争を通じてかれらの指導のもとに学生運動の転換ががちとられていったことと、革命的プロレタリアートが十分に独自的にこの闘いの中核にはなれなかったという東京での歴史的條件の重なりあいには全学連中央に政党的役割の過重な負担がかけられていくことは避けられず、このことが学生自治会の結集体としての全学連の活動を、ある程度抑制せざるをえなかったこと。たとえば五一年の地方選挙（都知事選）

第五、反対派の大規模の攻撃と敵階級の狂暴な弾圧のなかでの困難な時期に、彼らのなかでのいきいきとした理論的討論と論争を行い団結を強化するかわりに、疑心暗鬼による組織的排除や、規律と組織原則を云々した陰性のやりとりと、官僚主義が支配して戦闘力を衰えさせていき、しかも先にあげた外国の批判に接し多くのものが無条件な「ザンゲ」を行って、最後まで日和見主義との闘いの旗をすてなかったものとケツベツすることによって生じた彼ら自らの分裂に役立つ要素をつくっていったこと。

などがあげられよう。

真理をみつめることをおそれないマルクス主義者は、五〇—五二年の学生運動の分裂にあって、偉大な転換を行う航路を歩みながらも一年有半にして、五二年以降のあの悪路に船を進ませて波のまにまにただよわせ危く海底に沈ませるにまで導いた舵手の交替を行わしめたこのような側面を、いまはつきりとみつめることが必要に思われる。

五

もろもろの現時点の特徴と歴史的過程に目を向けてきたわれわれはいま、巨大な転換の影の困難さに直面しながら、同時に洋々たる展望をもつ学生運動の未来に目をうつさなければならぬ。

学生運動の中で社会主義的學生はなにをなすべきか？

私はここで社会主義學生の闘争方針をのべようとは思わない。それはすでに多くの人々や団体によって語られているから。

私はただ二、三の問題について側面的に言及するのみである。

学生運動は、いま転機にまつわるさまざまな苦難の試練のるつぽを経ながら進みつつある。

「転機」に際しての波立ちとは、すでに見たごとくあらゆる方向から激しくなってきた。もちろん転機を進めてきた彼ら、革命的學生は波立ちをおそれてはいない。

しかし、もし漕ぎ手が一步誤るならば、この波立ちは進みゆく船の命取りにもなるものであろう。しかも船をあやまらずものは外部からの要因のみではない。もっともおそろしいのは内部の要因ともいえる。

転換の過程は、外部的波立ちを荒だてるとき、往々にして漕ぎ手をも酔わしめるものである。このような危険をはらみながらも、いま学生運動はもののみごとに、第一の荒波をつききって、新しい航路の道をさだめた。

だがまだ、これは出発点にすぎない。長い洋々たる展望の航路を進むために、革命的社會主義學生は、内部のすべての要因を検査し誤まれる傾向があったなら双葉のうちにつみとってしまわなければならない。

その一、暴風雨にも決して壊れぬ頑強な、正確な羅針盤をもて

航路には水先き案内が必要だ。大洋の航海に船をただしく導く羅針盤が必要だ、暴風雨になっても、たとえ船に浸水してきても、半ば傾いたとしても決して壊れることのない頑丈な、そして目的地と船の位置を正確に指す羅針盤が！

階級闘争の激化のなかであるいは革命運動の高揚のなかでヘナヘナとつぶれてしまう役に立たない日和見主義理論と縁をきれ。困難なときに見舞われると、全く方向がわからなくなるようなたよりのない「マルクス主義」に用はない。ただ一つ階級闘争のプロレタリアートの権力獲得の勝利に役立つ革命運動の指針としての革命的なマルクス主義の理論のみが必要だ。語られているさまざまな図式的作文ではなく、日本プロレタリアートの階級闘争の現状に應えるために、一つ一つの高低の波間に間髪をいれず与える革命的戦術を社会主義的學生は一層習熟しなければならぬ。だがそれ以上に、戦術的左翼との統一戦術のマヌーヴァーに秀でること満了する前に、労働者階級を毒しているあらゆる色合いの日和見主義理論との決別を告げることが今必要である。

十月の勝利を導いたレーニンの思想が復活されねばならぬ。一八年から三三年にいたる三度にわたるドイツ・プロレタリアートの敗北の教訓がわれわれの血となり肉とならねばならぬ。フランスの労働者階級の一九五八年の敗北が何によって生れたか

を遠く戦前にまでかえってたどらねばならない。

日本労働者階級にあしかせをはめている資本主義の矛盾とその非人間性を徹底的に曝いたマルクスの思想をこそ復活させ、燃ゆるような資本への憎しみにとずいた資本家階級打倒の道、労働者階級解放の道が社会主義的學生によって語られねばならない。

こうしてつくられる革命的理論と思想の鉄の台上にこそ、暴風雨にもゆるがない羅針盤の精緻な機械がすえられる。

「労働者を赤化」させることを忘れて、**「なんとか政府」**だの**「独立」**だのという言葉が社会主義者によって、あまりにも多く語られる今日、社会主義的學生はまづ、みづから革命的理論と思想で**「赤化」**させ、そして、労働者を**「赤化させる」**ことに努めねばならぬ。

そしてまた階級闘争とプロレタリアートの利益に先立つ一切の国際的な、国内的な権威主義と絶対的組織論からみづからを解放しなければならぬという五〇年―五二年の教訓の現在の意義をあらためて確認しなくてはならないだろう。運動の利益を害するいかなる妥協も排し何者をもおそれずに革命的マルクス主義を堅持することがいまほど必要なときはない。このことによってのみ、学生運動を防御し、労働者階級の左翼化を促進せしめ、勝利の道を切りひらきうる。「学べ、学べ、そして学べ」はいまこそ必要な言葉である。

その二―革命的左翼を学生運動のなかに根深く組織せよ――

先進的學生がみづからを赤化させたのみでひとりよがりにおちいることはわらうべきことである。すでにみたように革命的社會主義的學生は、みづからを闘いのなかで左翼化させながらその方針のもとに学生運動の発展と転換を進めてきた。

その結果が日本学生運動の革命的伝統を形成する。このことによつて三十万の全学連の組織の闘いが、つづけられてきたのである。

しかし、すでにみたように労働運動と社会主義運動の現状と学生運動の発展過程は(4)および(5)のさらに一層の分化となつてあらわれているかのようである。

すなわち(4)は「経済主義」「改良主義」的思想和右翼日和見主義戦術によつて学生運動を阻害してきた一部の右翼的反対派。(2)革命的言辭を弄しながらその実は「改良主義」内容を持ち、右翼的戦術をとる一部の中間派(高野・牧ライン)としてしられる。(3)(4)の部分の圧倒的多数をしめる革命的左翼、へと分化している。

しかしすでに分析したごとく、現在の階級闘争の激化は、社会的階級的グループの再編に先立ってこの学生運動の政治的グループ分けの状況の変化を惹起してきている。

最近の専修大、日大、明大などにおける状況は(4)自民党反動派が(4)学園派、(4)自由主義派、(4)無関心派学生の大衆的獲得のもとに、「全学連反対」「政治ストライキ反対」をスローガンに、(4)の学生まで引きつける努力を行つて、(4)に反対を組織して、その影響力拡大を企てている。

さらに労働運動の諸潮流を反映して学生の中に(4)社会改良主義が(1)社会党右派、(2)社会党左派に分化し、この(1)の部分が(4)の(1)、(2)と手を結んで(4)の勢力を獲得して(4)の(3)に対抗する可能性が存在する。そしていまにもより学生運動にとって重要なことは、(4)の(1)の部分が(2)とともに(4)の(3)の革命的左翼に反対するために、(4)とくむことも辞さずに裏切りの分裂活動を組織しようとしていることである。

現在の日本の学生運動は、すべて国の、すべての時代の學生がそうであつたごとくそのなかに「社会全体における政治的グループ分け」を内包している。

「なぜなら、彼らはインテリゲンチヤのなかでもっとも敏感な部分であり、またインテリゲンチヤがインテリゲンチヤと呼ばれるゆえんは彼らがだれよりも意識的に、だれよりも決定的に、だれよりも正確に、社会全体における階級的利害と政治的グループ分けとの発展を反映し表現する点にあるからである。もし学生の政治的グループ分けが、社会全体におけるグループ分けと照応しているのでなかったら……学生は學生でなくなる」(レーニン「革命的青年の任務」レーニン全集第七卷三二頁、大月書店版)からである。

レーニンが一九〇三年のロシアにおいて學生の中に見出したグループ分けは、若干の異つた形式をとりながら現在の日本学生運動の中に本質的には全く同じようにみいだせる。

それは次のようにわけられよう。

(一)一部分の自民党・反動派、(二)多数の「学園派」(もっぱら学園的基盤のうえにたつ学生運動の支持者)(三)多数の無関心な学生、(四)多数の自由主義派(矢内原東大総長などの支持者として存在する)(五)社会改良主義的學生、社会党派、(六)共産主義的、あるいは革命的社會主義的學生。このような基本的な六つの政治的グループをもつ戦後日本の学生運動の特徴は一般的には(4)の學生が(4)の思想を徹底的に批判しつつ(一)との闘争を行い運動の指導権をとり、(二)、(三)、(四)の學生を、あるときには(4)の多数をも運動に参加させ、學生のあらゆる民主主義的諸權利を拡大し、共産主義的意識を拡大してきたといえる。

かかる状況にあつて、革命的社會主義的學生はきつぱりと(4)や(4)の(1)、(2)のごとき理論と思想を徹底的に批判し、みづからを区別し、(4)の革命的左翼のもとに統一し、全学連のもとに多くの(4)(4)の大衆を闘いに組織しつつ、革命的思想を伝播しなければならぬ。

「……學生の一部は、明確で全一的な社會主義的世界觀を自分につくりあげようとのぞんでいる。この準備活動の終局目標となりうるものは――革命運動に実践的に参加することをのぞんでいる學生にとつては――こんにち革命家のあいだに形成された二つの傾向の一つを意識的にきつぱりと選択することである。學生の思想的統合を名として、彼らの革命化一般等を名として、このような選択に抗議するものは、社會主義意識をくもらすものであり、實際には無思想性を説くものにすぎない。學生の政治的グループ分けは、實社會の政治的グループ分けを反映しないわけにはいかないし、あらゆる社會主義者の義務は、政治的に異種のグループのあいだにできるだけ意識的な首尾一環した分界線をもうけるために努力することである。

學生にむけられた社會革命黨の呼びかけ「一般的な政治運動との連帯を宣言し、革命的陣営における派閥的反目をまったく度外視せよ」という呼びかけはその實質上、社會主義的見地からブルジョア民主主義的見地へ後進せよという呼びかけにほかならない。

……社會民主主義(＝共産主義、筆者註)的學生があらゆる傾向の革命家や政治家と決裂することは、けつして全學生の組織や學習団体の分断を意味しない。それどころか、完全に明確な綱領の見地に立つてこそはじめて、きわめて広範な範圍の學生のなかで、学園的視野をひろげるために、また科學的社會主義すなわちマルクス主

義を宣伝するために活動することができし、活動しなければならぬのである」(レーニン「革命的青年の任務」全集第七巻四四頁)

もし革命的社會主義の學生が、革命的左翼の組織をおこり全學連、自治会の上部からの統一行動にのみその活動を限定して、いつまでもこれにおどることを考えており「全學連の転換」ということにのみ、転機の現段階の性格を考え、これにおどさっているならば、それは學生大衆をブルジョア・イデオロギーのもとにさらすことを意味するだけでなく、全學連、自治会をもセクト化する危険をつくりだすであろう。

革命的お喋りで大衆組織にあぐらをかくようなことなくすべての學校に革命的左翼を根深く真剣に組織しなければならぬ。

その三 革命的空白句をやめて組織せよ

あらゆる色合いの日和見主義の潮流から自己を区別した社會主義的學生が、左翼への転換にみずからを慰めて、全學連あるいは社會同大会での革命的演説に満場の拍手喝采をうけたことのみで満足しているならば、彼は酔っぱらいが自分の大言壮語に感激しているのを見て笑うことはできない。

だが現実の學生の政治的状況を冷静に見るならば、いまだに革命的社會主義への影響は程度こそちがえ、決して大きなものではない。

學生の中の社會主義者の任務はいかに革命的左翼が大衆を闘争に立上らせつつ、多数を獲得するか、プロレタリア・イデオロギーで赤く染め、ブルジョア・イデオロギーを放逐するかにある。

學生運動は小ブルの運動か階級闘争かという論議で、學生運動の

転換についての内容を論議することは、かつて行われた平和擁護闘争は階級闘争かいなかということと大差のない空論的議論である。

右翼反対派は、學生運動をそれ自体として考察し、二万の學生が政治的な果敢なデモを展開したことに對して、「十八万の學生が参加しなかったではないか」といって自らを「學園派」になりさがらせている。

彼らにとっては、學生がなにかしらやっていたらそれが「統一行動の發展であり」「學生運動の昂揚」なのである。

プロレタリアートにとって、問題は、小ブルジョアである學生をいかに、あらゆる色合いの政治グループからもみずからを区別した階級的革命的左翼が指導し(「その思想的影響力をひろめ」)いかに多数の學生をして階級闘争の試練を通じて暴政打倒の労働者の友となしうるかにある。したがって革命的左翼が、ただ日和見主義との分界線をひいたことだけで、革命的言辭を弄しただけで、さきほどの色別けをした(2)(3)(5)の部分の中の活動を行わずに、これらに闘いに立上らせることを忘れ、ひとり孤立することをもって尊しとなすというような態度でいるならば、多くの意識変革の可能な學生大衆の組織を怠り、さまざまブルジョア・イデオロギーの支配のままにまかせることは右翼的日和見主義と同じくまったく有害である。

革命的左翼は、極左的セクト主義とまた無縁である。

したがって革命的左翼は、一たん方針を確立したのちは、學生大衆に接近し彼らを立上らせるためのスローガン、宣伝と煽動、組織について細心の注意を払わねばならない。

また左翼は、組織そのもの、學生運動そのものを、すべての評価

の規準とする右翼的潮流の「統一論」と「大多数の學生の立上り」という理由の極左セクト主義批判と無縁である。

彼らはかくすることによって、今年の九月闘争の始め、英雄的な闘争を行って全國の學生を立上らせ「自治会解散」の攻撃に対する即時の反撃と、血みどろの試験ポイコットを行って、全國での最初の新しい形の弾圧を撤回させた、福島大學學友の闘いを誹謗する。彼らにとっての唯一の規準は、福島大學における學生運動の一時的停滯であり、學生の大量処分であり、學生と教授の離反である。

数百名の逮捕をだし、自治会が解散され数年にわたるその機能の麻痺という結果さえもなつた五〇年の英雄的レッド・パージ闘争は、かかるがゆえに間違いだつたのか。

一九〇五年の蜂起は、敗れたがゆえ、その後の反動を招いたがゆえに挑発であつたのか。

革命的左翼はこのような評価とは反對に、すべての規準を階級闘争の利益、いかに労働者階級が、そして學生が人民が階級闘争の試練のなかで革命的経験をみずから経て、眞の勝利への道をきりひらくにおく。

あるときには、自治会の破壊——これは支配階級によってつねになされるのであり、闘争によっておこなうのではない——団体の分裂さえおこなうことにも怖れをいだかない。

學生運動も少数の行動から始まることを否定しない。それがさらに一層の多数の學生と政治闘争へ立たす契機となるならば、それが労働者階級の階級的覚醒をうながすきっかけをつくるならば、労働運動の現状は、活動的學生としてあるときには大胆にそのまま政治勢力として、動員せねばならないことを必要とする。

しかし、同時に労働者階級の闘いにもっとも有効に學生運動を貢獻せしめる道、そして多くの學生とプロレタリアートの立場に立たせるもつともよい機会をつくる道は、労働者階級の解放の目標に向つて學生のみずからの要求にもとづいた政治的闘いに広汎な層をたすことにあることを再度確認しなければならぬ。

ただ「闘いの激発」を叫ぶことだけで広汎な學生の組織を怠ることをもつて左翼的と認めるものは革命的左翼の名に値しない。オッチョコチイカ、裏返しの日和見主義者である。

さらに革命的學生は、學生の要求がたとえ、學園的な性格をもつたものであるにせよ、これらの闘いに立上つた學生の行動を支持しつつこの中で有効に闘う能力をもたねばならぬ。

もし、「學生運動は政治闘争であり、階級闘争である」というだけで學生の學園的闘いを無視したり、軽視したり、あるいは、政治闘争と對置させたりするような「革命的左翼」に對しては、五〇年前レーニンが答えた同じ言葉をもちて応えよう。

一九〇八年多数の學生が「學園的綱領の下に」ストライキに立つたとき「われわれは學生運動とは一般的な政治行動と歩調をそろえたものとだけ考え、決してこれと別個なものとは考えない。だからわれわれは學園的行動に反対を表明する」とのべてきた社會民主主義的(「共產主義的」)學生に對してレーニンはこう答えた。

「こういう議論は根本的にまちがっている。プロレタリアートと歩調をそろえた學生の政治行動を目指さなければならない、うんぬんの革命的スローガンは、ここでは、ますます広範で、全面的で、戦闘的な煽動を行うべき指針から、いろいろな運動形態のいろいろな段階に機械的にあてはめられる死んだドグマになっている。政治

的行動のためにはすべての条件を、なによりも、先進分子と専制とのあらゆる大衆紛争をその煽動のために利用しながら活動を行う能力をもたねばならない。もちろん、あらゆる学生運動をあらかじめ必須の「諸段階」に分け、各段階をきちようめに踏んでいくようかならず監督する——「適当でない時期」に政治にうつりはしないかなどとおそれながら——ことが、問題なのではない。こういう見解は、きわめて有害な杓子定規であって、日和見主義的改革へ導くだけであろう。だが、不動のものとしてあやまって理解されたスローガンのために現実に作りだされた情勢と特定の大衆運動の諸条件とを考慮に入れようとするという逆のあやまりもまた、同じように有害である。スローガンをこういうふう適用すれば、革命的空白句に墮することは避けられない。

学園運動が政治運動をひっくりかえめるか、あるいはそれを細分するか、あるいは政治運動から遠ざけようとするような条件もありうる。そのときには社会民主主義的学生のグループはその煽動をこのような運動に反対することに集中する義務がある。……しかし現在の客観的政治的諸条件はこれとはことなっている。……このような状況のさいにはわが党に属する学生グループはこの運動を支持し利用し、拡大することに全力を上げねばならない。社会民主党が原始的な運動形態にあらゆる支持と同じように、この支持もまたなによりも、また主として、紛争によってめざめ、いたるところでこの形態の紛争の中で、最初の政治的紛争を体験しているより広範な層に対して思想的組織的な働きかけを行うことでなければならぬ……」(注レーニン「現情勢と学生運動」全集第十五巻二〇一—二、傍点はレーニン)

これらの指導層の影響下にある労働者大衆の多数を革命化する戦術を真剣に考えない「最後通牒主義」の残りかすを捨てねばならない。右翼反対派は、総評主流の日和見的社会民主主義幹部との無原則的統一を主張し、彼らの階級的裏切り性を暴露することを怠って労働者を小ブルジョアイデオロギーの影響下に放置する。ドイツのアシズムを許したスターリンの社会ファシズム論に根をもつ右翼日和見主義と裏腹の極左セクト主義は、現在の圧倒的労働者階級に影響をもつ総評主流派、全労働部革同派等の諸派の正しい分析を現実の闘争過程で行わないで、ただ社会民主主義幹部と一色に塗りつぶしてその裏切りを叫び、ただ下から統一というだけでいかに労働者の多数を獲得するかを考えない。

さらには、労働者階級の欲している革命的戦術をなんら提起しないで、総評幹部の右翼的戦術と癒着する一方、かれらが共産党との共闘を拒否するということを執拗に批難するという、右翼的日和見主義と極左セクト主義の奇妙な結合は、革命的社会主义の統一戦線戦術とはなんとかけはなれたものだろう。

右翼的、極左的なこれらの傾向とともに、労働者階級の左翼化、革命化を真剣に組織しない日和見主義の点で同罪である。幹部をして労働者階級の利益を守る闘いの先頭にたたしめよ。このとき、もし幹部が闘いを裏切るとき広汎な労働者大衆がかれの本質を理解するであろう。

政治方針の下での統一。そして批判の自由の留保。

国際的にもなおつづいている統一戦線戦術の右翼的、極左的理論を克服することは、学生運動を真の労働者階級の同盟者として発展させてきた現段階において社会主義学生の大緊急の課題であろう。

ここには政治闘争と学園闘争とに関する右翼の見解についての正しい批判とともに「左翼的」言辞についての適切な指摘がある。社会主義的学生はあらゆる学生の大衆の闘争の中にいて革命的左翼としての政治能力を発揮できなければならない。

その四—労働者と学生の同盟—

現在の労働運動とその指導部の状況は、労働者階級と学生の同盟について社会主義的学生に特殊に重要な問題を提起している。その一つは、労働運動の中に、革命的左翼を結集するために革命的學生に課している急がねばならない仕事である。彼らは現在この仕事に特殊のエネルギーをさいた努力を開始せねばならない。革命的労働者をあらゆる機会を通じて思想的理論的組織的に結集することを緊急の任務とせよ。その二つは、この革命的労働者の結集と、労働運動と学生運動との同盟の問題は一緒にされえないことである。すでに現在の労働運動の主潮流を分析し、その役割をも素描したが、革命的左翼の指導する学生運動は、かかる状況にあっては、その大衆的運動による力によって指導層の日和見主義を下部労働者に明らかにする任務をもっている。だがこのことは、学生運動をして革命党の事業そのものに転化させることでは決してない。このことを誤るならばそれは学生運動をして、危険に陥れ入れざるばかりか、労働者と学生の同盟を困難に追いやるであろう。さらには革命政党的存在の必要性を否定する解党主義的日和見主義に転落するであろう。さらに現在の労働運動指導部の諸潮流についてのより精密な分析と、統一戦線戦術の理解の必要性——社会主義学生は労働者階級の革命的統一をすすめ、また労働の正しい同盟を打ちたてるためにも総評幹部を裏切り者とのしり、革同を革命的理論がないというだけで満足し、

かかることをしないで革命的空白句のみでは決して労働者階級の多数を左翼化させることはできないであろう。

戦後学生運動史と日本社会主義運動史に強烈な刺激をもって忘れざるいく多の諸教訓と諸事件を残していった一九五八年の学生運動はやがて一九五九年を迎えようとする。

みずからの転換をなしとげた一九五八年の革命的學生は、一九五九年をいかに迎えるであろうか。

それは、読者諸君の問題であり、私の問題である。

それは、日本学生運動の問題でもあり、日本労働者階級の、日本革命運動の問題である。

日本の革命的學生は革命的労働者とに結ばれた太い絆と、マルクス主義再生の真紅の旗をにかけて、一九五九年をむかえるであろう。

【二頁よりつづく】全労働戦線が立ち上り、中間層も統一した、という事実をもって、経済闘争でなければ闘えない、という根強い理論に對置せよ。

この闘争の中で生まれた、革命的戦術の教訓を十分摂取すること。

東京地評のストライキ委の経験の総括と普及。東京その他において組まれた全戦線の政治ストライキにおける運輸部門のストを中心全体をこれに結びつける戦術が大きな効果をあげたこと、そして私鉄の脱路がもっともその戦術に打撃を加えたことの教訓の摂取。

全学連に寄す

角本 誠一

今 全世界は

正に勞と資に分裂せり
凡そ労働なくして人生なく
人生の内容は労働のみなり
労働は財を自然より採取し
資本は財を同胞より搾取す
勞資の是非自ら明白なり
今や資本の勢力旺盛にして
経済的封建社会を作り
民主自由の實既に失われぬ
自殺貧困失業犯罪
大勢滔々止まる所を知らず
重圧に泣く同胞幾百万
無告の蒼生又算なし
是皆惡政の産物ならざるなし
營利と階級なき社会を作り
彼等を解放するは何人そや
誰か祖国赤化の業を担う
是を捨てて学業遂に何するものぞ

視よ

政界は魍魎魍りょうの巷にして
為政者は皆資本の傀儡なり
グレンシャムの法則は政界を洩らさず
収賄汚職台閣を領し
政商と結託して国幣を盗み
汚吏は隙を窺つて血税を掠め
苛斂誅求至らざるなし
官僚は威を揮て人權を侵し
愛民なくして愛人を説く
今奸を斬らされは社稷危し
公明正大俯仰天地に恥しきものは
天下唯労働者あるのみ
知れ国家を活殺する實力は
唯労働者の手中に在ることを
畏れよ労働の神聖を 絶対に

私かに想う

社共労組果して純なりや否や
語に曰う 国乱れて忠臣現わる
全学連の出現は天の命なり
学連の一隊は虎より健なり
純真無私直情徑行

至誠の獅子吼天下を鳴動せしめ
奮迅の巨歩百難を踏破す
何ぞ怖れん権力の弾圧を
説くことを止めよ区々皮相の教訓を
我等の耳は唯天の声のみを聞く
仰き見よ隣邦中ソの空
日月高く舞いて世界を照す
炳乎たり社会主義の勝利は
安そ煩瑣言説を要せん

突如として

南方咫尺に砲声を聞く
黒雲揺曳して天日暗し
原子のしょう雲邦土を包まんとする
嗟 危ないかな祖国の運命
脚下は千仞絶壁の断崖
挺身国難を未然に防かんとする者
全学連を措いて何者ありや
平和を熱求して戦争を与えられ

嘗々と努める者に貧困を報ゆ
此矛盾果して何処より来る
思索一番淵源を剔決し
智剣を揮て隱魔を退治せん
青春の胸に沸騰するものは
確信 希望 黎明 剋服の歓喜
神を負うて前進又前進せん

友よ

手をつなごう
声を合わそう
歩をそろえよう
昂然と胸を張れ
高く大空を仰げ
全学連万歳

この詩は 大阪在住の七十余歳
の一老詩人が全学連に結集した
何十万の学生の革命的闘いに寄
せたものです 編集部としては
いろいろと注文をつけたので
すが、ともかくこの老人の気魄
を読者にご紹介することが先決
とここに収録しました

激動・革命・共産主義

—今日の階級闘争の諸問題—

姫岡玲治

一、今なにが必要か

プロレタリアートが始めて「理論的」に、(共産党宣言において)「実践的」に、(六月蜂起において)自らを一つの階級として表現して以来、ちようど一世紀と十年の歳月が経過した。プロレタリアートの前衛の最初の意識的組織「共産主義者同盟」の委託によってマルクスがかきあげたその宣言は、プロレタリアートの国際的団結に自らの解放の第一条件の一つを求めていた。世界市場の形成は、「所有をもたない大衆」という現象をすべての民族において同時に産出し、その民族のそれぞれを他の諸民族の変革に左右されるようにするとともに、資本主義の発展に力強い刺激を与えた民族国家は

生産力の進展にとつては余りに狭隘となつてしまつた。それ故に社会的生産諸力を奪取するためのプロレタリアートの闘争は生産手段における私的所有と世界経済の国家的分裂の双方に対してむけられねばならず「共産主義革命は支配的な諸民族の『一夢の』つまり同時の行為としてのみ可能」(マルクス「ドイツイデオロギー」全(集)改訂版)十五卷三四八ページ)となつた。資本主義の普遍的発展によつて「世界史的存在」となつた「プロレタリアートは全世界を獲得せねばならない」とその宣言はよびかけている。

その後の七十年間、共産主義運動の発展は根本において宣言で予見された道をたどりながらも、至難の道を行ってきた。パリ(一八七一年)モスクワ(一九〇五年)のプロレタリアートの蜂起は惨敗をもつておわり、激戦は沈滞の時期をもつて継がれた。しかし、資

本主義経済が帝国主義段階へ発展するとともに、資本主義の世界体系の体内に秘められた諸矛盾は巨人的な力をもつて帝国主義世界大戦争となつて一大爆発をよげた。資本主義の秩序の諸矛盾は飢えと寒さと途方もない抑圧となつてプロレタリアートの上におしかかり帝国主義戦争は内乱に転化した。資本主義の不可欠の一角がロシアにおいてくずれおちた。コミンタール第一回大会は「新しい時代が生誕した、資本主義の解体とその内部的分解の時代、プロレタリアートの社会主義革命の時代が」(「ザ・コミニスト・インターナショナル」)と高らかに宣言した。全世界を資本主義的秩序にかえるに社会主義的秩序をもつて組織するという課題をコミンテルンは全世界の労働者に提起した。

「あらゆる国で革命が突発しないかぎり権力をとるべきではないといひはる賢い人」(レーニン「全ロシア中央執行委員会とモスクワソヴエト同盟(七卷三二)」)と争つてロシアにおいて権力をとつたレーニンはロシアでの革命はただ世界革命の火蓋を切つたにすぎず、それはヨーロッパ人の手によって完成されるであらうということを期待していた。

残骸と煙れる廃墟をもつて覆われた西ヨーロッパでブルジョワジイとプロレタリアートとの一大階級戦が熾烈を極めている最中に開かれた十月革命三週年にレーニンは「われわれはつねに国際的の革命に賭けていた、……われわれは一国で社会主義革命の問題を達成することは不可能であるという事実を常に強調していた」と語っている。だがハンガリヤソヴエットはバリコミューンを思わせる敗北に終り、もしそれが成功するならば「帝国主義のあらゆる殻を一挙に、きわめてたやすくぶち割るであらうし、なんの困難もなく、あるいはわずかの困難で世界社会主義の勝利をきつと実現するであらう」と

(レーニン「左翼的な見解と小ブルジョア性」)ロシアの革命家が期待をかけたドイツの革命運動は敗北に終り、イタリアではファシズムの擡頭を許した。

こうしてロシアを除くすべての国のプロレタリアートが戦争によつて作りだされた資本主義の衰微の状態を決定的打撃に利用しなかつたので国際ブルジョワジーは社会民主主義に助けられながら自らの社会体系を救うことに成功した。ロシアにおけるボリシェヴィキ権力は孤立し「支配的諸民族の一挙の革命」は挫折した。

レーニン死後、はげしい内部闘争を通じて国際共産主義運動の指導者の地位にのぼつたスターリンは、反対派との闘争を通じてこのロシア革命の孤立と「資本主義の部分的相対的安定」という客観的事実を一国社会主義論として絶対化させていった。マルクスの命題はもはや「実際とは一致しなくなつた」と宣言されロシアプロレタリアートの運命を「国際革命に賭けていた」レーニンは一国社会主義革命論の創唱者としての役割を与えられることになった。

しかし小商品生産の圧倒的なロシアにおける自足的な社会主義建設はさまざまなジグザグコースをたどらねばならなかつた。マルクスは共産主義の前提に「所有をもたない大衆の産出」と同時に「生産力の高度の発展」を指適することを忘れなかつた。というのは生産力のそのような発展がなかつたならば欠乏だけが普遍化され、したがつて必要品のための闘争が再開されて昔の汚物がそっくりそのまま復活されるに相違ないからであつた。レーニンは帝国主義のもとに諸矛盾の加重が客観的に避けがたいものとしてロシアのプロレタリアートに一連の革命の火蓋をきくという役割を与えるであらうという見通しと、ロシアにおける生産力の発展が一国で社会主義を

組織するのに十分な段階に達していないという現実の矛盾を、ロシアの民主主義革命がヨーロッパのプロレタリア革命に火をつけるであろうという展望によって見事に解決していたのであった。「ロシア革命は勝利するために自分自身の十分な力をもっている、だがその勝利の成果を維持するためには十分な力をもっていない……なぜなら、小規模工業が巨大な発達を遂げている国にあっては、農民を含む小規模商品生産者はプロレタリアートが自由主義から社会主義に向う場合不可避免的に彼にそむくからである。旧制復活を防止するためにロシア革命が必要とするのはロシアの予備軍ではなくて外部からの援助である。世界的なそのような予備軍が存在するか？存在する。西ヨーロッパの社会主義的プロレタリアートである」レーニンがあらゆる瞬間にもっともすぐれた国際主義者として、すなわちロシアの階級闘争の諸課題を国際的な階級闘争の課題に従属させ不可分な一部分として捉えていたという事実の基礎には、共産主義は「世界的存在」としてのみ一般に現存しうる」(『ドイツ・イデオロギ』との理解があったのである。プロレタリアートが万国の生産諸力を狭隘な民族国家から解放し、生産を共産主義的に統制することによって、需要と供給との関係のもっている力は無に帰して、人間は交換、生産、彼ら相互の関係の様式などを再び支配できるようになる。だからレーニンにとってはロシアにおける社会主義革命は自足的な一国的過程ではなく国際革命の本質的な一部だったのである。「わがソヴェットロシアが全資本主義世界の孤獨な一国境国にすぎない内は」と彼は一九二〇年十二月第八回ソヴェット大会においていった。「われわれの完全な経済的独立を考えることは全くこっけいなことでありユートピアである」ところがドイツ革命の敗北によって比較の後

ろか社会主義的なものとして支持したのではなかった、レーニンは「社会主義ソヴェット」という表現は社会主義への移行を実現せんとするソヴェット政権の決意を表現するだけだと主張したし、また「ロシア共産党綱領」も「ソヴェット政権は一切の労働に対する平等の報酬と完全な共産主義とを目標として努力するものであるけれども資本主義から共産主義への過渡のやとと数歩を踏みだしたにすぎない現在においてこの平等をただちに実現する任務をうちたてることができない」(『レーニン全集第二』)とその一時的過渡的性格をあきらかにしている。

しかし、ロシアにおける一国の社会主義建設の強制と、国内戦での荒廃から生れた物質の欠乏はその不平等支払の是正を速かに許さなかった。そればかりか、新経済政策の導入によるネップマン(資本家)の登場や小商品生産の残存、長期にわたる国内戦によるオールドボリシエヴィキの死亡疲弊はともすると国家機関での官僚主義的歪曲を生みだしたのだ。官僚主義は「包囲」の遺産として、小生産者のばらばらに分散された状態にたいする上部構造として、その姿を完全にあらわした(『選集十三分冊八五ページ以下』)。レーニンは死にいたる最後の数年間にこのプロレタリア国家の官僚的歪曲にがくぜんとして「この悪とたたかうために」(同上)官僚的圧力に対するプロレタリアートのストライキ闘争の是認、労働監督人民委員部の改組等の手段を講じた。しかしスターリンは巨大な権力を集中している。そして彼が十分な慎重さをもっていないかの権力を行使すべきかを常に心えているかどうか疑問である(『レーニン』との懸念にもかかわらず、レーニンの死後スターリンは、ますますその官僚主義的傾向を増大させていった。スターリンはのちになって

進的なロシアが国境内の鎖国的な自給自足的な経済建設を余儀なくされることによって、その建設はさまざまな迂回を必要とせざるをえなくなった。資本主義の高度に発達した国のプロレタリア革命においては「資本主義から社会主義への直接的移行が可能であり特殊な過渡的な全国家的な方策を必要としない」(『レーニン「現物説にか」』が小ブルジョワ的要素の圧倒的なロシアの一国社会主義建設は「まずさきに国家資本主義に到達し、そのちに社会主義に到達する」(『選集十三分冊一五四ページ』)という迂回の路線を必要としたのであった。なぜなら小生産はまだそのような国にきわめて沢山残っておりこの小生産は資本主義とブルジョワジーをたえず毎日毎時間自然発生的にしかも大量にうみだすからである。レーニンはただちに、生産物の国家的生産と国家的分配とを、プロレタリア国家による直接的管理によって、共産主義的に調整しようとした試みの「失敗」をあきらかにしながら「直接熱狂にのってではなく偉大な革命によってうみだされた熱狂の助けをかりて個人的利益のうえに個人的関心のうえに経済計算のうえにたつて小農的な国での国家資本主義を経ながら社会主義へつうずる堅固な橋をまず最初に建設するよう努力したまえ——さもなければ諸君は共産主義に近づけないであろう」(『十月革命四周年によせて』)と、呼びかけざるをえなかった。この国家資本主義はレーニンが何度もくりかえしているように普通の文字通りに理解される国家資本主義ではなく「プロレタリア国家の統制と調節の下における資本主義」である。それは国营企業の独立採算制による「商業的原則」の導入(『ネップの条件下の労働組合』)と出来高払賃金制(『ソヴェット政権の』高給支払等の価値法則に対する妥協を意味していたのだ。しかしレーニンはこのような方策をなん

ついに平等主義は反動的な小ブルジョアイデオロギーだと宣言し、マルクスの「労働の量に応ずる」分配を公然と修正して「労働の質に応ずる」分配を主張した。労働の質にに応じた分配においては、労働者の生きた労働ではなく労働力そのものに対象化された労働、労働力の質の区別をもたらず労働の再生産費用、すなわち労働力の価値というものを導入せざるをえなくなるであろう。スターリンは、のちになって「わが国でわが社会主義制度のもとで価値法則が存在しているだろうか、そして作用しているだろうか」という「ときどきでる質問」にこたえて「そうだ存在しておりそしてまた作用している」(『社会主義経済問題』)と答え、理論的にもそのことを是認したのであった。

しかし生産力の高度の発展の基礎の上に立ちながら人間を物神崇拜的社会関係——価値法則から解放すること「資本主義的生産の基礎の上で初めて自由に発展する価値法則」を止揚することこそが、そのながきにわたる資本主義社会の運動法則研究の上に礎かれたマルクスの共産主義論の本質ではなかったろうか？商品形態は人間に対して彼ら自身の労働の社会的性質を労働生産物自身の、したがって生産者の総労働に対する社会的関係をも彼らの外に存在する対象の社会的関係として反映するという錯倒した関係をうみだす。しかし、その疎外の止揚の上に築かれた「自由なる人間の一つの協力体」である共産主義社会では「生産者は自分の生産物を交換することはない。同様にそこではもう生産物に費いやされた労働がこの生産物の価値としてその生産物の有する物的特性として現われることはない。なぜならば今や資本主義社会とは反対に、個人的労働はもはや間接にではなくむしろ直接に総労働の構成部分として存在するもの

だからである」マルクス（「ゴータ」）資本主義社会から生じたばかりで、生れてきた母胎たる旧社会の母斑をまだつけている共産主義の第一段階では個々の生産者は、彼が社会に与えた個人的労働量に等しいものだけを正確にとり戻しながら、能力に応じて欲望に応じての共産主義の第二段階を準備するであらう。しかし、いずれの段階をも通して生産の分配はあっても交換はなく社会的総労働は対象化されず価値は生ぜず人間は完全に物を支配する。

しかしこのマルクス主義の原則のスターリンによる修正はなにによって可能とされたのだろうか？「労働の質に応じた分配」という理論によって合理化された分配上の不平等の極端なまでの激化はなにによって可能とされたのだろうか？問題は過去の人物となった個人に対する、個人崇拜の裏返しにすぎない個人的責任追求によって解決されないであらう。

価値法則に向っての退却は、社会主義（共産主義の第一段階）を可能にするだけに十分な生産力の発展段階に達していないロシアの建設が、ヨーロッパ革命の成功による経済的協力によって補正されずに、それから断絶されたことによって余儀なくされたのであらう。戦時共産主義の下で生産はたえず後退した。レーニンはさきにおとずれようとしていた飢餓の問題について一九一八年四月モスクワ労働者に向って次のようにいった。「われわれはわれわれのあらゆる煽動の中で、われわれにふりかかっている不幸は国際的不幸であること、これから抜けでる道は国際革命の他にはないということを説明せねばならない」

しかし、ネップへの移行による最初の経済的成功は分配上の差別を生みだす余地を与えた。このような物質的基礎の上にたち、革命

じて「プロレタリア革命」「プロレタリア革命に転化するブルジョア革命」「ブルジョアの性質の広い任務をもつプロレタリア革命」「ブルジョア革命」を戦略的課題とせねばならぬという。それに従えば「従属国」でプロレタリア革命を目的とするのは、極左であり、トロツキストであるということになる。だが「どんな社会的組織も一切の生産力がその組織において余地のあるかぎり発展してしまうまで、消滅しない」というマルクスの定式を一国革命の見地からうけて、ロシア資本主義はヨーロッパないしアメリカの水準にたつするまではまだ長い道程をたどらねばならぬという結論をひきだしたのは他ならぬメンシェヴィキではなかったらうか。なぜこのメンシェヴィキ的修正が可能なのか、スターリンは「なぜなら」とその理論的根拠について答えている。「帝国主義の情勢のもとでの各資本主義国の発展の不均衡で飛躍的な性質、不可避的な戦争に導く帝国主義内部の破局的矛盾の発展、世界のすべての国における革命運動の発展——こうしたことはみな、個々の国におけるプロレタリアートの勝利が、可能であるばかりでなく必然的でもある」という結果をもたらすからである（「スターリン」レーニン主義の基礎、文庫版四九ページ）

だが同時革命論の根拠をマルクスの資本主義の不均衡発展の法則に対する無知に帰せしめるのは全く正しくない。マルクスはプロレタリア革命はただ絶対的にイギリスにおいてのみ完成しようと考えていた。二月蜂起がひき起し、全ヨーロッパに燃え広がった一九四八年の革命を回顧しながら「労働者たちは、ブルジョアと協力して二月革命を遂行した。そして労働者たちは臨時政府そのもののなかにブルジョアの多数派とならべてひとりの労働者を入閣させたようにブルジョアとならんでじぶんじんの利益を実現さ

と内乱の衝撃の後の大衆の疲弊から生れた国家機構の官僚主義的歪曲は、レーニンの危惧にもかかわらず、彼の死後ますます増大していったのである。

このようにしてスターリンの個人的独裁を頂点とする官僚層はますます社会から独立していったが、それは国際的には資本主義の「一時的相対的部分的安定」との評価にもとずく、国際的なプロレタリアートのブルジョアジーの一時的均衡の上に成立っていた。この官僚が寄生するところの無葛藤意識こそが、全世界的規模での共産主義の建設という国際プロレタリアートの戦略的課題の中においてソヴェト社会主義建設の意義を全面的に照しだすのではなくて、ロシアにおける自足的な一国社会主義論を絶対化していったのであった。もし地球の一隅で搾取と抑圧に悩む被圧迫人民が存在するならば、権力を握ったプロレタリアートはいくら高い生産力を享受するとしても、その人間は解放されたといえるであらうか。

さて一国社会主義可能論は一国社会主義革命論と表裏一体をなしている。一九二八年のコミンテルン第六回大会は反対派との闘争を通じて一層極端な形にまでそれを拡大し固定化する大会となった。スターリンは一国社会主義革命の理論を第三インターナショナルの政策とすることによって、ボリシェヴィズムの礎石たるインターナショナルナリズムを放棄したのであった。彼によれば資本主義の普遍的発展とそれによって生みだされたプロレタリアートの世界的存在という客観的事実が提起している国際革命をそれぞれの民族的自主性のうちに分散し「高度に発達した資本主義国」「中位の資本主義的發展段階である国」「植民地及び半植民諸国と従属国」のプロレタリアートはそれぞれの資本主義の成熟度と生産力の発展段階に

せようとしたり……労働者達はブルジョアジーとならんでじぶんじんを解放しようとしんじたように、その他のブルジョア諸国民とならんでフランスの国の壁の中でプロレタリア革命を完遂できるとかんがえていた。しかしフランスの生産諸関係はフランスの対外貿易によって制約され、世界市場におけるその地位と世界市場の法則とによって制約されている。フランスは、世界市場の独裁君主たるイギリスにはねかえるヨーロッパ的革命戦争なしに、どうしてその生産関係をうちやぶるべきであらうか（マルクス「フランスにおける」と彼は問いかけている。革命的イニシアティブの国と社会主義完成の国を対照するマルクスの予想は全くイギリスブルジョアジーの世界市場にもつその地位においてのみ理解されうるのである。

資本主義の最高の発展段階に達した帝国主義時代に、発展の不均衡、世界市場の無政府性は激しくなるが、それは全くスターリンの理解とは、逆に世界市場の組織化、計画化の必要性の促進を表現している以外のなものでもない。

世界市場の成長によって世界経済の有機的な一環となっている一国の革命はそれだけでは十分な全体ではなく、国際的な鎖の一環をなすにすぎない。国家的領域の中で始る社会主義革命は国をこえて発展しつづけ、ついには世界的領域へと発展せねばならないであらう。今日帝国主義のおそるべき重圧の下に、まだ巨大な資本を蓄積していず、しかも国際的競争に何ら特別な特権を与えていないアラブにおいて燃えあがっている革命の嵐が、アラブの国境の壁の中の自足的なものにとじめられ、ブルジョアジーのヘゲモニーのもとにひきよせられるならば、その莫大な大衆的エネルギーは民族国家形成のためにのみ消耗しつくされるにおわるであらう。一国にお

ける労働者の蜂起という革命の一つの実例がどういふ価値があるか」(『レーニン』労働ソヴェト第三回大会)を理解しているもののみがそれを国際革命に火花をちらす、あらたないまつとして利用することができる。また今日「世界市場の独裁君主」となったアメリカ帝国主義に対する闘争も、その「世界市場」においても、地位においてのみはじめて理解されうるのであって、一国の従属の度合によって測定しうるものではないであらう。

さてコミンタールンによって指導原理とされた一国革命の誤謬は第六回大会の直前にその指導をめぐって反対派とのもつとも深刻な対立を生んだ中国革命によってすでに実践的にも証明されていた。民族解放の任務を含む民主主義的諸任務を世界社会主義革命の任務から分離しそれを絶対化することは生きた現実の復合された過程を固定化された段階に分解することを意味していた。民族的課題の絶対化から生れる「四民ブロック」というブルジョワとの統一戦線のあやまった幻想を守るために中国共産党はコミンテルン第二回大会で指示されたプロレタリア運動の独立的性格の保持を放棄して無条件に国民党に加入し、その規律に服することによって、中国革命の裏切りと反革命クーデターとを用意したのであった。

このような敗北から第六回大会は一国革命の図式を完成させるとともに、いままでの右翼的偏向を突如もつとも極端な極左的偏向に切りかえたのである。綱領は戦後歴史の第三期を宣言し「社会ファシオ」労働組合幹部との統一戦線は裏切りとされた。しかしこれら左右への戦術のジグザグは全く同じ根拠——「一国革命論」をもつものであることは容易に理解されるであらう。

スターリンの「一国革命の図式と戦術の左右の偏向が生んだ最大の

悲劇はヒトラーによって与えられたドイツプロレタリアートの敗北である。一九二九年一〇月、ブルジョアの生産過程のあらゆる要素の衝突は恐慌として世界市場で一大爆発をよげた。焦点はふたたびドイツであった。ファシストの政権問題の提起は社会的危機が絶えがたいまでに白熱化し、帝国主義戦争と十月革命にひきつづく国際的な階級決戦が迫っていることを物語っていた。この歴史的瞬間の焦眉の急務は迫りくるファシズムの危険の前に全ドイツプロレタリアートのレーニン主義的な統一戦線の実現によってファシズムを粉碎することであった。ベルリンにおける勝利は、経済恐慌とともにスペインイギリスなどいたるところに発展していた革命的情況をさらに深刻化させたのであらう。しかし国際的な展望から抽象された「一国革命の展望に固守したドイツ共産党は以前としてザール返還に民族主義的な態度を示し、ヒトラーの排外主義に、真の国際主義を対置することができなかった。そして、スターリンが一九二四年に唱えだしたレーニンの政策を根本から破壊する「社会ファシズム論」に固守し、社会民主党傘下の労働者との統一戦線を拒否することによって、プロレタリア陣列を混乱させたのである。一九三三年ヒトラーは政権をにぎり共産党、「社会ファシスト」党员に対する残酷な攻撃を始めた。指導部を失った労働者大衆は混乱、解体し、ファシストテロルの前に史上最大の敗北を喫した。

このファシズムの勝利により震撼していた各国ブルジョアジーは強化された。資本主義はその固有の無政府性を生産の組織化によって克服しようとした。全経済政策は国家権力によって支配されるようになった。しかしながら世界経済における諸対立、闘争、無政府性はますます先鋭化し、最大の組織的強盗、国家間の闘争は鉄のごと

き必然をもつて、新たな帝国主義世界戦争へと導きつつあった。資本はプロレタリアートを「国際連盟」の仮面と平和主義的「祖国」に縛りつけながら、侵略戦争の準備を強行していた。

このブルジョア世界体系を覆った混乱と分裂の中でソヴェトロシヤは驚異的なテンポで生産力を拡大しつつあった。しかし一九二九—三三年のドイツ革命の最後の敗北によって余儀なくされた資本主義の包囲下での「一国社会主義建設は三十年代のプロレタリア国家にいわゆる「スターリン時代」と呼ばれるいくたの混乱と偏向とを生みだしたのであった。それはスターリン一人の「粗暴な性格」や「権力集中欲」という個人の性格に帰せられるものでは決してなかった。

世界革命からの孤立は国内においてはプロレタリア独裁の変型を生みだし、国際的には「ソヴェトを擁護することこそがプロレタリア国際主義の唯一の条件である」といった「一国社会主義革命論の絶対化を生みだしたのであった。資本主義社会と共産主義社会との間には前者から後者にうつる革命的転換の時期が存在し、この転換期の国家はプロレタリアートの革命的独裁であるということに疑うマルクス主義者はいない。しかしプロレタリアート独裁は搾取者に対する単なる強力でもなく、また、主として強力にあるものでもないということは社会主義建設の指導にあたったレーニンが常に語るのを忘れなかったことであつた。

農奴制的な社会的労働組織は「啓」の規律にもとづいて支えられ資本主義的な社会的労働組織は「飢え」の規律にもとづいて支えられてきた。社会主義がその第一歩であるところの共産主義者労働組織は地主や資本家の束縛を打倒した勤労者の「自由」な「意識」的

な規律に基いて支えられる。労働者の自発性、創意性、積極性は最大限に生かされ組織されねばならない。その物質的条件は今や工場や土地から資本家や地主が放りだされて搾取者のための強いられた疎外された労働ではなく、解放された労働の活動場が開けたということにある。こうして所有者が外に向っても、またうちに向っても彼らの利益と所有を守るために作りあげた組織は、今や、勤労者の意識的な組織に作りかえられなければならない。プロレタリア独裁は立法機関と行政権力との分裂なき労働者の自発的大衆組織として、大衆を行政からの疎外から解放するだらう。コミニオン、ソヴェトなどの「そのもとに労働の経済的解放が遂行される」ところの最後に発見された政治形態」はこのような原則の上にきづかれるだらう。

労働者は政権をかくとくしたのち旧い官僚機構を破壊し粉碎しながら、プロレタリア独裁の「従来の国家において不可避であった国家および国家机关の社会の公僕から社会の主人公への転化に対して誤りない手段」を講ずる公務員の官僚化、腐敗、官吏の特権化への転化を防ぐために「すべての公務員の完全な選挙制度およびリコール制」と「国家の全公務員の報酬」の「労働者賃金の水準への還元」というコミニオンの原則を適用することによって万人が一時は官僚になるかも知れぬが、それ故にだれもが官僚にならないような制度を作りあげねばならない。行政組織と生産組織との合一、立法と行政との分裂の止揚の上にコミニオン型国家は単なる共和国としてではなくプロレタリアートの創意性積極性が最大限に生かされる組織として作りあげられる。

ロシアの十月革命直後ブルジョア専門家に高給を支払うという間

題がおきた時にレーニンはこれがロシアの経済的および文化的後進性のために余儀なくされた「一時悪」であることをかくさなかった。それは「コミューンの原則からの後退であり、それを大衆の目からくしておくならば、それはブルジョアの策士の水準に墮落して大衆をあざむくことを意味するであろう」高い給料の腐敗的影響がソヴェト政権にもまた労働大衆にもおよびことは争う余地のないことである（「レーニン「ソヴェト」」と彼はいつている。しかし、一九三二年不平等賃金が「社会主義」として導入せられ、高給の賃金を支給される官僚層が増大するにおよんでこの「原則からの後退」が「原則」にまで高められたことは本来のプロレタリア国家からの逸脱を意味したといつてよいだろう。一九三五年のスターリン憲法はさらに候補者推せん制度、生産単位にかわる行政単位ごとの選挙、官僚機構の独立化などによってプロレタリアートの積極性の後退とを「法制」的にも確定したのであった。そして第十七回大会で選挙された中央委員候補の七〇%が党と人民の敵の烙印をおされたというおそろべき粛清の嵐は、一切の反対派を暴力的に放逐するというプロレタリア民主主義の破壊を最後までおくすめたのであった。

国内におけるところのスターリンを頂点とした官僚主義的圧力の増大は国際共産主義運動をソヴェト外交政策に従属させるというスターリンの「大ロシア民族主義者」（レーニン「少数民族の問題または自治（二七）」を強めていった。

当時ソヴェト国外ではフランス、スペインのファシズムの危機から生れた「人民戦線」の成功が疑いもなく革命的情勢を生みだしていた。情勢は単に崩壊しかけているブルジョア民主主義をささえる

て始められた。ルーズヴェルトの「善隣外交」とニューディールが世界史の上で反ファシヨ、ソヴェト防衛の上で重要な役割を演じたことをプロレタリアートの闘争から分離し絶対化することによってブルジョアの始めた対日・独帝国主義戦争の本質をカモフラージュすることは許されないのである。

しかし人民戦線戦術の厳密な総括の欠如とその経験の絶対化は、戦後の革命の高揚の時代に、階級闘争をふたたび広範な民主主義闘争の中に見失う結果を招いたのであった。ほとんどの先進資本主義国では「占領軍の解放軍規定」という、超階級的な幻想をうみだし、戦争から生じたブルジョアに対する断固たる闘争によって「人民的」民主主義を守り抜いた東ヨーロッパ、中国のプロレタリアートのみが反ファシヨ闘争の経験を通じて味方にひきつけることができた広範な革命的小ブルジョア、農民の支持のもとに自らの権力を樹立することに成功したのであった。

この中国革命の巨人的登場によって惹起された全世界的規模での二つの体系の生産組織の分裂はうたがいもなく資本主義の死の苦悶をさらに激しくしていった。

しかし、戦後の革命の一時期を、中国プロレタリアートによって加えられた打撃を最後に切り抜けた帝国主義ブルジョアはその後十年間というものの残余の未解放プロレタリアートの支配に比較的安全した力をもつことができた。朝鮮戦争で自らの準備不足をさとした帝国主義ブルジョアはジュネーヴでの一時的妥協に同意し自らの体制の生存に対する重大な脅威としてあらわれた社会主義体制の前に帝国主義の宿命的な経済的矛盾をも調整しつつ、政治的結束をかためつつ進んできた。しかし資本の蓄積の順調な進行が資本

ために自由主義者との共通の綱領を守ることに努力するのではなくさらに革命に向つて労働者の統一行動をすすめる必要ならなかったことを教えている。十月の教訓はコロニエフに対する民主主義の防衛を徹底的にやりぬくことによつて「権力獲得の任務にいちじるしく、だがわきから近づいていった」（レーニン「ロシア社会民主労働党中央委員会」全集第二十三巻二三三頁）ということを教えているのである。一九一七年において全農民を代表する独立した中間的な政権がありえなかった以上に三十年代の階級闘争は両階級の利害の渦まきヨーロッパの中心部での固定した「純粹」な民主主義的な諸任務を遂行しうる政治形態の存在を否認したのであった。一方ではソヴェトの孤立と全世界的な規模での戦争の危険はたえがたいまでに深まっていた。まさに仏スペインプロレタリアートの統一した革命的行動によつて全ヨーロッパのファシズムを打倒しソヴェトをその孤立から救い出すことが必要とされていた。しかしコミンテルンは「国民の統一」を守り、死滅しかかっている「共和制の枠」を守るために労働運動の「ハネ上り」をおさえることによつて、人民戦線は自らの命を断つたのである。スターリンは世界革命を質問した一記者に向つて「われわれはそんな計画や意図をもったことはない……これは誤解の産物である」（「プラウダ」三月）といひ放った。彼は帝国主義戦争におけるブルジョアの中立法を代償としながら、そのもとでドイツプロレタリアートの呻吟するファシストドイツの同盟さえあえて避けて避けた。

資本主義体系に内包する政治的経済的矛盾の累積はこのような政策の追求にもかかわらずたたび帝国主義戦争へと導いていった。第二次大戦はソヴェトの参加という特殊な現象をもっていたとはいへ、あきらかに帝国主義諸国家間の暴力的な帝国主義再分割をもつ

主義の矛盾の露呈の背景におしやり、ブルジョアの平和気運の増大とともに、われわれの一部には一國革命論を拡大再生産し、二つの体制の共存を固定化し、現状維持を絶対化する試みが始まった。

「われわれは国際革命のために働いている」と常に語るのを忘れなかったレーニンによつて指導された十月革命の四十年間は世界革命のプログラムによつてではなく「産業ブルジョア」をも含めた平和愛好諸国民に対する平和への呼びかけで祝われることになった。しかし核兵器生産の危険がすでに人類の生存の危機にさえ連なるという事実は資本主義の破滅的危機を象徴するものでしかないであろう。反戦の闘争は没階級的な「人類的」課題としてではなく、「両階級の共倒れ」をも生み出すような段階に對したプロレタリアートとブルジョアの階級闘争の一反映に他ならない。それ故にこそ一刻も早く、史上最後の支配者となったブルジョアを全世界的規模で打倒するという課題が、歴史の唯一の意識的主体としてのプロレタリアートに課せられているのだといえるであろう。帝国主義戦争の過程でレーニンが書いた「われわれがブルジョア平和主義者たちがうところは戦争が国内での階級闘争と不可避的な関連をもっていること、階級をなくし、社会主義をうちたてずには戦争をなくすことはできなかったことを、われわれが理解している点である」（「社会主義と戦争」全集第二十一巻三〇五頁）という階級的表現をわれわれはもう一度思いおこしてみねばきである。運動主体の変革の闘争から分離して「戦争の不可避性」を物神化し、消極的な現体制の維持を絶対化し、世界革命という国際的課題をそれぞれの民族的自主性のうちに分散することは全くマルクス主義から国際主義的な魂を抜きさるに等しい。

さらに過去数年間資本主義世界をおおったブームはその他にさまざまな誤った幻想をわれわれの陣営に持ちこんだのであった。資本主義生産の発条たる他人の労働の搾取による致富が「国家」によるもっとも巨大な詐欺の制度まで発展させられたことが「現代マルクス主義者」の頭の中では「議会」による政治的民主主義を履行すれば社会主義への「漸進的」移行を保障する物質的基礎を提供するのであるかのような倒錯した観念を生み出したのであった。このような議会的方針への転落は統一戦線における歪曲をうみだす。革命的翼の完全な独立性を達成したのちに、労働者階級の多数に対する影響力を獲得し、共産党「労働大衆」と非共産党「労働大衆」との間に「同時行動」を可能にするために提起された統一戦線は社会民主主義との統一に解消された。

一九五六年のソ同盟共産党二十回大会は世界史的重要性をもって開かれ、苦悶の絶頂にある資本主義に死を与える世界プロレタリアートの運動を毒していたスターリン崇拜を清算したが、そのスターリンの批判にもかかわらず、帝国主義戦争が勃発する根源を除去するために闘うのではなく、その一時的阻止を自己目的化し、絶対化された平和共存のため、各国プロレタリアートの階級闘争を導くことになり、その政策の本質は前と同一であった。帝国主義が残存しているかぎり戦争は不可避であること、社会主義への議会的な道、社会民主主義の性質と役割などレーニンが第二インターと闘ったまさにその点において現代マルクス主義者はレーニンを修正した。

ある「現代マルクス主義者」はスターリンがレーニン主義を「帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義」と呼んだ故事にならって、現在は「平和共存のマルクス主義」の時代であると誇ら

ぬに満足して、それが自然現象が生起する必然性とは異って社会を構成する意識的要因、プロレタリアートの闘争を本質的な内容として含むことを忘れるならば、そのような激動もブルジョアジーが更に徹底的な攻勢にでる機会を与えるにすぎないであろう。もしプロレタリアートの内部に、革命に対する徹底的で明確な意志がなければ、客観的には革命的な状況がないと結論してよいであろう。

そのような意味から歴史的にも理論的にも破綻の証明された平和共存と一国革命のコースを揚棄して、再びマルクスの人間解放の理論、世界革命にたちかえることが今われわれにとって死活の重要性をもっている。「共産主義はただ世界的存在としてのみ可能である」その把握をもう一度われわれがとり戻すことが今必要なのだ。

二、フランスの敗北の教訓

第一次大戦後のドイツがそうであったごとく、第二次大戦後のフランスは死の苦悶の絶頂にあるヨーロッパ資本主義の中でも常に危機の焦点にあった。ブルジョアジーはもっとも弱く、プロレタリアートはもっとも強大に組織されている。しかしプロレタリアートが正しい政策をもたねば、そのような危機を究極的な勝利に転化させることはできぬ。第二次大戦後のフランスをとってみよう。前章でもあきらかにしたように、プロレタリアートの反ファシズムの武力抵抗とソヴェトロシアの参戦によって複雑な現象を呈したとはいえず第二次大戦は仏ブルジョアジーにとっては、始めから終りまでドイツブルジョアとの間の市場再分割の強盗戦争に他ならなかった。「祖国」を持たないプロレタリアートにとっては「敵対せる兄弟間

しげに宣言し、マルクスの時代はブルジョアジーとプロレタリアートという「階級」の論理が支配していたが、今は戦争と平和という「平和の論理」が支配していると、いささか粗雑な着想を披瀝した。これらの粗雑な着想はスターリンのドグマの呪縛に長い間とらわれていた人々には、巨大な、だが漠然とした魅力を感じさせるのかもしれない。

しかし、今われわれの眼前にくり上げられている階級闘争はこれらの小ブルジョアの幻想の破綻を日に日にあきらかにしつつある。

昨年から始まりつつあるシリア、インドネシア、ヨルダン、レバノン、イラクなどにおけるいわゆる「平民的」手段によるところの革命的民主主義の闘争の発展、著しくプロレタリア農民の性格を帯びつつ進展しているアルジェリアでの革命戦争が生み出したフランスブルジョアジーの支配の危機等は、ブルジョアジーの「平和」な「秩序」の夢を打破するのに十分であった。資本主義の発展がもっとも遅れ、それゆえにこそ、その矛盾の重荷がどこよりも速く加重されざるをえないアラブにおける激突の開始はなにを意味するだろうか。「ブルジョアの肉体の末端では、その心臓部より速く暴力的爆発が起こるのは当然である」(マルクス「フランスにおける階級闘争」全集第五巻)おそらく資本主義史上最大の規模をもつであろう、恐慌に向っての世界史の不可避的な進行とともに、このような末端部における激発の始まりは、ブルジョア社会の心臓部であるアメリカにおける、ヨーロッパにおけるそれらにまで発展するであろう。世界史で何度目かの決戦の日が刻一刻と迫りつつあることをいまこそすべての共産主義者は、はっきり自覚せねばならぬといえるであろう。しかし「現代は資本主義から社会主義への移行の時代である」というような客観主義的評

の死闘」によって衰微した自国のブルジョアジーの状態は、彼らに對してドイツファシストに對して行ったような徹底的な闘争を継続するのには有利であつたろう。第二インターの背教者たちによってすでに試みられたことのある「民主主義的な帝国主義」と「反動的な帝国主義」との分類をソヴェトの存在の故に、固守することは国際プロレタリアートの戦略的課題「国際革命がまだ完遂していない」という中で、客観的にはブルジョアジーの存在を美化し、容認するものでしかなかったであろう。

しかし、ソヴェト同盟防衛の絶対化とブルジョアジーの中立化政策から生れ戦後国際共産主義運動を一時的に支配していた右翼的な潮流は、フランスにおいてはすべての「階級」が「国民」的統合の象徴ドゴールの下に協調して、疲弊したフランスを復興する試みとなつてあらわれた。「フランスの運命は大いに炭坑労働者の努力にかんにかかっている……反動とファシズムの企図に反対して解放の事業をつづけるために国(だれが支配しているか)のために生産することが大切なのである」「なまけ者や仕事をいかげんにする者は決して良き共産主義者にも革命家にもなれない」(トレーズ「人民版」とトレーズは呼びかけていた。しかし、第二次大戦とそれによって生じた荒廃、飢餓、滅亡の危機ほどすぐれて階級的意味をもつものはなかったであろう。プロレタリアートは資本主義フランスを救済するのではなく、戦争と飢餓の根源である資本主義からフランスを救済することによって自分の生活を救うことができたであろう。レーニンは「ベルリンインターナショナルの英雄たち」のなかでカウツキーを批判しながら次のようにいっている。「生産のことを考えよ」腹がへって力がなくなりいまにも飢え死しそうな労働者に

向って満腹したブルジョアがそういつている。そしてカウツキーは経済学をよそおって資本家のこの小唄をくりかえし、すっかりブルジョアの下僕になっていく、労働者階級が餓死からまったく破滅から救われるときこそ破壊された生産を復興することができである。だが労働者階級を救うためには戦争の重荷と結果が労働者の肩にかかってくるのをふせぐ唯一の手段としてプロレタリアート独裁が必要である」(全集第二十九巻四〇)このフランスプロレタリアートの経験は、恐慌の重荷がますますプロレタリアートの上に加重されようとしている中で、恐慌の根源である資本主義から世界を解放するという革命の展望ではなく、「恐慌の人民的克服」という階級協調的な幻想がふたたびわれわれを捉えようとしている今、とくに忘れられない教訓として残るであろう。このようなプロレタリアートの協調主義的な幻影によって決定的な混乱を脱けてたフランスブルジョアに、「世界市場の独裁君主」となったアメリカ資本ブルジョアの下にその宿命的な経済的利益を調整しつつ、政治的結束を強化し、プロレタリアートに対する政治的、経済的攻勢を開始していった。

彼らは帝国主義、市場収奪戦の激化の中で、自己の階級支配の不安定さからその龐大な利潤を国内の生産部門に投資せず、諸外国や植民地における資本投資にあてる伝統的な「経済的マルサス主義」を修正して、急速に資本蓄積の遅れを取り戻そうとするのである。五三年から五六年にかけて工業は全体として四二%の発展を見せた。しかし、この西欧随一の速度をもって発展したフランス資本主義はまたそれだけ鋭い矛盾を内包していたのである。

戦前のフランス資本主義は、植民地搾取や海外に投資された資本

資本の蓄積を強行してきた。しかし軍事生産、インフレーションによって媒介された生産の拡大によつては帝国主義列強間での市場争奪戦にたえぬ真の競争力を獲得することはできなかったであろう。国内においては巨大な生産力を獲得しながら、国外で諸帝国主義国家との狂暴な衝突の中に一步一步と後退を余儀なくされたフランス資本主義の危機こそ、現代の生産諸力を狭い民族国家からの枠とブルジョア生産関係から解放し、全世界を労働者が自分自身のために労働する共同体に転化することの必要性のことも鋭い表現といえるであろう。

フランスブルジョアは矛盾の重荷をすべて労働者に加重し、また植民地革命を圧殺することによってその困難を切り抜けるためにあらゆる努力をこころみている。好況局面の中で労働者に一定の譲歩を与えながら、彼らを欺瞞し、武器の威嚇を背後にしながら「被抑圧民族の間に全力をあげて改良主義思想をうけつけることに努力」したモレなどの改良主義的政府は、資本主義がその本源の矛盾を盾にするべくぐりぐりだす過程をいよいよ深く準備し、またアルジェリア戦争が著しくプロレタリア貧民の性格を帯びつつ発展することによって、その存在の基礎を掘りくずされてしまった。改良主義者の支持を通じての支配が困難を増すにつれて、通常の議会民主主義はブルジョアにとって手に余るものとなったにちがいない。「強大」な国家の探索はブルジョアを駆ってボナパルチスト型政権にその当面の救いを求めさせたのは当然であろう。われわれは「ボナパルチスト型政権」という概念を軍隊に依拠した行政権力が、社会から超越することによって議会民主主義の危機と不安定を解決しようと試みる政治形態に用いることにしよう。そのような支配形態

によつてもたらされる超過利潤にその比較的安定した力に基礎をもつことができたのであるが、しかし、第一次大戦後の相つぐ植民地の帝国主義本国に対する叛乱は、フランス帝国主義のこのような存在の基礎をゆるがしたのであった。インドシナの革命のプロレタリアート、貧民の戦いに無惨な敗北を喫し、スエズから後退を余儀なくされ、歴史的な資本の低蓄積によつて、帝国主義諸国家間の死闘におくれをとっているフランス帝国主義にとつて、サハラに眠る莫大な源はその唯一の再生の希望として残されたのである。しかし資富裕な階級層といえ若干の土地所有者と小ブルジョアの上層だけで、重要なたった一人の工業家も銀行家も持たず、やせた土地で飢えをいやす貧民と半プロレタリアだけが社会の八〇%も占めているアルジェリアにおいて一たん燃えあがった爆起はきわめて爆発的な本能的に革命的な大衆行動として発展してきている。廻りだしたおそろしく巨大な植民地革命の車輪をおしとどめようとしてフランス帝国主義は絶望的な試みをつづけている。この力に余る精力の消耗こそ今展開されているフランスの政治的危機の真の根源である。FLNの指導下で徹底的な大衆的抵抗として展開されているアルジェリア革命戦争は第二次大戦後のアジアアラブの植民地革命の大波が、今ここで西欧資本主義諸国の革命と合体せんという新たな一時期を劃している点で巨大な革命的意義を有している。

なぜならアルジェリア戦争はフランス帝国主義の北アフリカにおける覇権を直接に脅かしているばかりではない。アルジェリア戦争の出兵による、産業予備軍の枯渇は可変資本の貨幣価値の増大を余儀なくしたが、フランスブルジョアはそこから生ずる利潤率の減少を国家投資、投機的インフレーションによつていんべいしつつ、

は議会内の敵対的な諸勢力の均衡の上に立ち、諸階級の間で取引を行いつつながら、すぐれて支配階級の直接の利害を表現するものとなるであろう。それは階級闘争の力学によつて議会的偽装のもつた政権から一切の議会民主主義をはくたつる公然たる軍事的独裁にいたるまでの様々な現象形態を有するのである。

われわれはそのような支配もケレンスキーやヒトラー出現前のパーベン、シュライヒャーのように国が内乱に一步手前にあり、ブルジョアとプロレタリアートの階級闘争が極度に激しくなっている社会的条件のもとにいくたびか経験したのであった。しかし大恐慌後のドイツの階級闘争がそうであったようにボナパルチズムが時としてファシズムへの道を開くとはいえず、それはファシズムとは全く同一ではない。経済的危機の中でブルジョアは合理化を強行し、何百万という労働者を街頭に放りだすために、労働者の一切の民主主義的組織を野ばんに粉砕しつくすことが必要となる。彼らは通常の警察的軍事的手段ではこの目的が達せられなくなると、社会的危機がたえがたいまでに進行することによってその生活が信じられないほどはげしく急速に悪化し、破綻に傾き、資本主義への恐怖のあまり、狂暴になった小ブルジョアを大衆的武装部隊に組織することによって、プロレタリアートに対抗しようとする。社会的出口を失い、生活の破綻が労働者の革命的努力に起因するかのようにならに自らにうつり、社会的危機の中で大量に政治的過程にひきこまれ、たやすく革命的傾向を帯びた小ブルジョアを大ブルジョアが自らの支配の維持の「平民的手段」となそうと決心する時ファシズムの支配が現実の日程にのぼってくる。しかしファシストの国家機関の占拠は内乱の危機と多額の失費とブルジョアが上

からもうけた枠を大衆がたえずのりこえようとする傾向に対する正当な恐怖心などが、ブルジョアジーをして最後までその利用を逡巡させる。

「戦争はファシズムだ」等といった単純極まる論理によって、ドゴールや警戦法を提出した岸にいたるまで政治的上部構造におけるすべての反動的傾向に対してファシズムの概念をあてはめることは実践的な意義においてきわめて危険であろう。帝国主義の本質を何度くりかえし、それをいくらか狂暴化しても、ファシズムの「特殊性」は生れてこない。

このような粗雑な論理が横行する時、レーニンの統一戦線論を根底から破壊する社会ファシズム論によってパーベンやシュライヒャーのごときボナパルチストの出現を「まぎれもないファシストクデター」と見誤り、本物のファシスト・ヒトラーと真剣な抵抗をまじえることなしに敗退していったドイツプロレタリアートの貴重な教訓をわれわれは思いおこさずにはおれない。

ドゴールにはたしかにアルジュニアやアジャクシオにおけるファシスト暴動を横杆として登場したとはいえ、ファシズムとは明らかに異った条件の下に成立している。国の社会的経済的危機の中でもっとも乱暴な約束をすべての階級にふりまくことができ、しかもただ一つの約束もまもらないボナパルチストにすべての階級が自己の表現を見出すことによって、フランスの現在の支配形態は形成されたのである。ブルジョアジーは自らの搾取の条件を保障するために議会的取引から独立した権威ある支配を欲し、プチブルジョアジーはまだたえがたいまでに生活がおびやかされてはいず、したがってまた多分に受動的で内乱の脅威におびえており、プロレタリアートの

相当部分までが、過去数年間つづいたブームの余沢に幻想をもちながらドゴールの空文句にまどわされるという情勢こそがボナパルチズムの社会的環境を説明するものとなる。

ドゴールの出現はフランスに一定の「秩序」をもたらしたことはちがいない。ファシストの騒擾とプロレタリアートの実行の行動によって極度に不安定な雰囲気を選び、たやすく階級闘争の劇的な展開を許すような状態は六月を境にして急速に冷却し、そしてボナパルチスト型政権に救いを見出したフランスの大ブルジョアジーはファシスト運動を当面は必要としなくなったかのように見える。アルジュニアにおけるファシストのストライキを彼らが必死になって抑圧したのはブルジョアジーの大衆に対する正当な恐怖心をあらわしている。なぜなら最後まで大衆を政治から疎外しようという願望こそ支配階級を大きく捉えるものだからだ。

だが、ボナパルチストでブルジョアジーはやって行けるであろうか？ 彼らは早晩揺いだ支配をファシストによって支えようとする試みに駆りたてられるのではないか？ この問に対する解答は第一にアルジュニア革命に第二にフランス本国の民衆の抵抗の展開いかんによって与えられるであろう。アルジュニア革命がその光輝ある戦闘を継続する力をもつならば、それはフランス本国における革命的階級闘争の勝利への基礎を提供することができるであろう。アルジュニアの革命を絞殺から救いだし、その戦争によって生みだされたブルジョアジーの動揺を徹底的に自らの解放のために利用するためにフランスプロレタリアートは真剣な抵抗を組織せねばならぬであろう。すでにアルジュニア革命はその赤道下の山谷で闘われている軍事的戦闘の帰すうによってではなくフランス本国における階級

闘争の展開によって、また国際的規模で闘わるべき帝国主義戦争反対のプロレタリアートの闘争にその解決の鍵を委ねている。一国革命論の視野にたつもののみが国際的規模での両階級の対立、中でもフランスのそして国際的なもとの階級闘争からアルジュニア戦争を分離して、それをアルジュニアの独立闘争のみとして捉えることができる。現状維持的な平和共存の幻想に溺れるもののみが戦争に対するプロレタリアートの根本的態度を忘れ、それを単なる平和の闘争に解消することによって、武器をとってたちあがったアルジュニア人の行動を裏切ることができる。ただプロレタリア国際主義と国際革命の見地にたつものが、アルジュニア人民の革命的民主主義のための反帝武力闘争によってあがきのとれなくなっているフランス帝国主義者に死を与え、世界社会主義革命の突破口を切り拓く任務を提起することができるであろう。フランスの現実の階級闘争の進展は、フランスブルジョアジーのアキレス腱たるアルジュニアに対する帝国主義戦争を公然たる国内の階級戦に転化させることを必要としている。アルジュニア戦争こそがフランスブルジョアの危機の根源であり、その戦争に対する幻想がドゴールを生み、その戦争の展開にドゴール政権の安定の条件が課せられているとするならば、その戦争に対する徹底的なプロレタリア的、革命的立場の見地の保持こそが歴史を進展させる唯一の原動力を生み出すであろう。

十一月九日付の書簡はドゴールがアルジュニアに対しては五十万の軍隊とともに策略をも必要としていることを示している。この策略がいくらかでも成功したらドゴール独裁は強化されるであろうがさなければアルジュニア人民皆殺し作戦のために総力を結

集するという右翼の冒險主義的路線が強化された力に立上り、ファシスト独裁の脅威が飛躍的にも高まるであろう。ドゴール主義の生んだあらゆる幻想をうちやぶるためには人々の日々の要求、日々の生活の単純で具体的な事実から出発しなければならぬという経済主義の枠をこえて、アルジュニア戦争に対する国際主義的態度を大胆に採用しなければフランスのプロレタリアートとアルジュニア人民には早晩恐るべき運命がましかまえるであろう。

×

×

×

ドゴールがその空文句によってすべての階級に幻想をふりまき、ブルジョアジーの救済者としてあらわれることは、プロレタリアートにとつてたしかに「重大な失敗を意味する」ものにちがいない。アルジュニア戦争の展開のいかんによつては、ドゴール登場によって一旦拒否されたファシストの極右冒險路線がふたたびさらに緊迫した条件のもとで立上る可能性さえ左右する。そしてフランスの情勢は、おそらくは世界史上で最大の規模をもつであろう恐慌の不可避的な進行とともに、多くの資本主義国の近い将来において基本的に再現するであろう。そうした意味において、フランスの「敗北の教訓」をわれわれが厳密に検討することは、単に好事家の趣味や批判的批判の対象としてではなく、すぐれて実践的な意味において重要な意義を持つであろう。ポリシェヴィズムはブルジョアジーの打倒へ向って幾千万大衆を動員する技術であり、この技術の適用に失敗するならば、労働者のおどろくべき現実的潜在力も有効に發揮せられずにおわってしまう。

フランスプロレタリアートの指導部の犯した誤謬、民族主義、議会主義、統一戦線戦術の適用における偏向等はいくつかの国、とく

に日本においても例外ではない。このような偏向と闘う努力を一層強くおし進めることこそ革命を勝利に導く唯一の主體的保証であることを今や理解すべきであろう。

第一に、アルジェリア戦争に対する民族主義的偏向についてのべよう。

FLNの闘争はたしかに社会主義的な、あるいは革命的なマルクス主義の運動ではない。それは革命的な反国主義的性質をもった広汎な大衆運動であって、その中で異なった社会的利益を擁護する異なった政治的潮流の結晶化はようやく始まったにすぎない。そしてそれは今後も促進されるであろう。しかしその革命的努力はアルジェリア人のアルジェリアの国家形式のためのものにすぎないであろうか。

フランス帝国主義者の民族的抑圧、植民地略奪の強化のための侵略戦争はプロレタリアートの状態を悪化させている。しかしフランスプロレタリアートは「すべての破壊活動、民主的自由への攻撃はアルジェリア戦争の結果であり、この戦争をつづけることはフランス国民の意義に反している」から、その国民的利益を守るためにアルジェリア休戦実現に努力すればよいのだろうか。

フランス帝国主義者がかつてなかったごとく無恥に振舞いながらアルジェリアに唯一の再生の望みを託しているのは理由のないことではない、安価な労働力、年二〇〇〇億フランの商品に対する市場を提供するばかりでなく、膨大なサハラ資源を蔵するアルジェリアは資本主義フランスの生存にとって最早不可欠のものとなっているのだ。アルジェリア民族の独立とフランスからの分離は苦悶にあえぐフランス資本主義の死を早めるであろう。アルジェリア人民の

最終的解放は、フランスブルジョアジーの支配を打倒した時にのみ究極的に勝利しうる。そのことはアルジェリア革命が本国のプロレタリアートの行動なしには敗北の運命にあるという敗北主義を意味しない。それどころか、アルジェリアの革命は大胆に進進し、帝国主義に対して打撃を与えることによって本国の革命の高揚に参加しつつあるのだ。帝国主義奴隷所有者に対する被抑圧人民の解放戦争と帝国主義国の労働者階級との間の統一戦線による帝国主義の打倒、これのみが真のレーニン主義を意味する。資本主義フランスがアルジェリアを強制的に資本主義の渦巻の中に引込んだとするならば、社会主義フランスは解放された植民地を技術組織、精神的影響をもって援助し、計画的組織ある社会主義経済への移行を容易ならしめるだろう。それによってアルジェリアにおける民主民族革命の戦略は一国革命が生んだ単なる図式にすぎないことを証明するであろう。しかし、このことは本国のプロレタリアートがアルジェリアの即時解放をめざす即時のものとも断固たる闘争を放棄することを合理化することはない。これを放棄すればブルジョアジーを利するだけだろう。「帝国主義のもとでの民族抑圧の強化は社会民主党が民族の分離の自由のための——ブルジョアジーにいわせると——「空想的」な闘争を放棄する条件となるものではなく反対にこの基盤のうえでも発生する衝突を大衆行動の、またブルジョアジーに対する革命的行動のきっかけとしていっそう強力に利用する条件となるのである」(「レーニン」全集第二十二巻一六九ページ)ここには民主主義の闘争と社会主義革命との関連の生きた弁証法的把握がある。アルジェリア独立の闘争に大衆を積極的な行動に引き入れその闘争を拡大し、燃え立たせてブルジョアジーに対するプロレタリアートの直接の突撃にす

なわちブルジョアジーを収奪する社会主義革命に導かなければならぬ。

フランス共産党の方針はこの点について、レーニンが「改良主義的カウッキ主義的な自決擁護者」と呼んだものに墮して広汎な小ブルジョア層とプロレタリアートの相当部分を排外主義的なブルジョアイデオロギーに追いやってしまうことである。

一九五四年十一月一日「自由への愛、勝利への絶対的確信に鼓舞された解放戦士たちが、ありあわせの武器をもって二十世紀の奴隷狩たちに対して」闘いを始めた時、その時、その植民地人民の闘いを擁護してその自決のために闘うのではなく「共産主義者は労働者階級と大衆に対し彼等の本質的目的からそれたりその闘争を弱めたり、とくに敵のわなにはまりその計画をいかなる方法によるにせよ容易にしたりする危険におちいることに対して警告」(「レオン・フェー」)したのである。一九五六年には、中央委員エチエンヌフアジンは、党を代表しながら次のように演説している。「われわれは、フランスとアルジェリアが、ほんとうのフランス連合のなかで政治、経済、文化の各面で永続的な結合をつくることに賛成である。これは、フランスの利益でありフランスが諸大国に伍していく保証である。これはまた、アルジェリアの利益でもあり、アルジェリアの経済と文化を進展させるもつとも有利な条件である」(「アルジェリアの政治資料三十ページ」)そして、「社会主義の実現がフランスやアルジェリアにとって当面の問題ではない」からその「永続的な結合」は「共和国憲法の実施」によってのみ可能だという。だが、被抑圧民族のプロレタリアートはどんな平和主義的ブルジョアでもくちかえして口にして一般的千べん一律の併合反対や一般に民族同権

賛成の空文句にとどまっているわけにはいかなない」(「レーニン」全集第二十二巻一七二ページ)資本主義の最高の発展段階に達したフランス資本主義は民族国家の枠をこえて成長し、競争を独占におきかえ社会主義を実現するためのあらゆる客観的条件をつくり出した。この段階で純粹に民主主義的な共和的な結合の実現など全くのナンセンスであろう。「共和国憲法」の行方をみればわかるようにプロレタリア民主主義の綱領によってか、ブルジョアの非共和的綱領によってそれをおきかえることが今問題にされているのだ。分離の権利という民主主義のための一貫した革命的闘争を行いながらプロレタリアートはブルジョアジーに対する勝利の準備を整えねばならないであろう。だがフアジンは「今話しあいと休戦を支持するすべてのフランス人を団結させ、ともにその実現を目指してたたかわせることこそ共産党員の偉大な任務である」と呼びかける。そこには、分離の権利の承認も「この基盤の上で発生する諸衝突を大衆行動のまたブルジョアジーに対する革命的行動のきっかけ」となさんとする姿勢もない。現状維持を固定化する以外のなものでもない「平和共存」の戦略はこのようにして抽象された平和闘争を絶対化することによって、アルジェリア人民の一切の妥協の許されない非和解的闘争を裏切り、その戦争が生みだすブルジョアジーの動揺を利用することができる。それは行動の領域にもあらわれている。「アルジェリアに平和を」のスローガンをかかげたデモンストレーションが数回組織されただけで、港湾には一つのストライキもなく兵や武器をつんだ船が停止したこともなかった。一九五五～六六年予備役の動員に反対したらグルノーブルのデモはユマニテから「左翼主義者、挑発者」として非難された。

「われわれの理屈が正しいとすれば、それはわれわれのアルジェリア民族支援の闘争でプロレタリアート国際主義の原則と、フランスの利益（？）という立場のどちらとも固守することがわれわれにとってどれほど大切であるかの証明である」（「最後の勝利を確信しつつをむかえる」世界政治、三六三頁）とトレーズはドゴールによる敗北をふり返っている。フランス共産党の理屈は、ドゴールの空文句に民衆が幻想をもち、また「独立したアルジェリア領はアメリカ領に等しい」などといったファシストのウルトラ排外主義に少からぬブルジョアが指導されたのを最後の打撃することができなかった。アルジェリア戦争によるブルジョアジーの動揺がドゴールを生んだとするならば、この戦争に対してプロレタリアートが断固とした革命的立場を守らないならば、その戦争の継続から生れる矛盾はいよいよ重くプロレタリアートの上に加重され、ファシスト独裁の脅威も飛躍的に増大するであろう。

そのような民族主義的な偏向は平和共存コースから生れる一国革命の展望、国際的課題の民族的自主性への分散から必然的に生ずる。それは日本はアメリカによって支配されているという現状規定によって、資本制生産の廃棄とプロレタリア権力の樹立を当面の目標としない人民民主主義革命という幻想さえ可能にする。日本が資本主義国であること、日本プロレタリアートはなによりも日本ブルジョアジーとの闘争に直面していることを彼らは強引に見ようとしていない。絶対主義天皇制にはさすがにみつかなかったものの社会主義革命に対する極端な恐怖症は依然として資本制度の転ぶくを回避する改良主義とアメリカによる半占領というドグマと民族解放革命となっている。警職法闘争がまさに日本のブルジョアジーとプロ

レニンは帝国主義戦争とロシア革命に対して裏切りの立場に転じた第二インターの日和見主義的な潮流から革命的な翼を分離した後、議会政治と選挙への参加拒否、労働組合活動の拒絶等々という革命的理論しかもてあらず、プロレタリアートを動員し、指導するという革命の基本問題を見失った「右翼」に対しても鋭い批判を浴びせかけた。レーニンはつねにプロレタリアートの団結こそ基本的な目標をおき、その能力を失った「右翼」と「左翼」に鋭い批判の対象をおいていたのだった。

ファシズムというブルジョアジーの側から創設された大衆運動を槓桿として生れたドゴールはただ団結したプロレタリアートの実力行動によってのみ粉碎できたであろう。四〇年前にケレンスキーが空文句をふりまきながら「ボナパルティズムの第一歩」を踏みだしたときに、レーニンはその空論にまどわされず広大な政治的規模で闘われ、深い階級的利益に立脚する真剣でねばり強い闘いを組織したのだった。「諸事件がきわめて急速に進んでいること、勤労者の大多数が自の運命を革命的プロレタリアートにゆだねざるをえないつぎの時期にわが国は近づきつつある。革命を開始し、すべての先進国のプロレタリアートをこの革命に引き入れ、戦争をも資本主義を

レタリアートの階級闘争の中心をなしている時に、それを安保条約廃棄の闘いにまで高めねばならぬということによって切実な中心的な課題を稀薄にする傾向は日本労働者階級の闘争に重大な損害をもたらすであろう。

第二に、われわれがフランスプロレタリアートの敗北から学ばねばならぬのは議会的方針と統一戦線戦術の歪曲によって生じた誤謬についてである。

アルジェリア戦争反対の闘争に大衆を動員させ、燃えあがらせるのではなくて、議会内での社共の統一行動にアルジェリア休戦の措置での具体的可能性を求めたフランス共産党がついに社会党との分裂をおそれるあまり、アルジェリアに弾圧体制を引く特別権限法に賛成するまでに至ったことは今や有名なエピソードとして語られている。エチエンスフアジンは「共産党議院団の政府信任の投票がギー・モレの軍事措置にたいする賛成投票でないことはいくまでもない。それは社共両党の統一行動の発展に道をひらくおおきな政治的行為であった。この統一行動がなければ、このような軍事措置に反対し？勝利し、さらに政府に軍事措置ではなく、話しあいと休戦を実現させることはできないのである」（同上）この行動を弁明しているが軍事措置に対する信任投票が軍事措置に反対する行動を意味するとは、いかなる「弁証法的」な論理構造をもつものであるか。フランス社会党は骨の髄まで議会主義的クレチン病に侵され、モレはアルジェリア戦争において、帝国主義者としての地位をなにつ放棄しなかったし、ドゴールの登場の茶番劇においてもその振り当てられた役を見事にやってみせた。そのような社会党との議会の中での取引、無内容な「左翼の統一」ほどナンセンスなもの

現すること——それがレーニン主義的な統一戦線の原則に他ならない。「統一戦線の戦術は決してあれやこれやの議会主義的目的を追求するいわゆる「尖端の選挙連合」を意味するものでもない。統一戦線の戦術はブルジョアジーに対して労働者階級のもっとも基本的な生活利益を擁護するために共産主義者が他の党や集団にぞくする全ての労働者および無党派労働者と共同闘争をなすことをいうのである」（「コミンテルン四回大会」）

レーニンは帝国主義戦争とロシア革命に対して裏切りの立場に転じた第二インターの日和見主義的な潮流から革命的な翼を分離した後、議会政治と選挙への参加拒否、労働組合活動の拒絶等々という革命的理論しかもてあらず、プロレタリアートを動員し、指導するという革命の基本問題を見失った「右翼」に対しても鋭い批判を浴びせかけた。レーニンはつねにプロレタリアートの団結こそ基本的な目標をおき、その能力を失った「右翼」と「左翼」に鋭い批判の対象をおいていたのだった。

ファシズムというブルジョアジーの側から創設された大衆運動を槓桿として生れたドゴールはただ団結したプロレタリアートの実力行動によってのみ粉碎できたであろう。四〇年前にケレンスキーが空文句をふりまきながら「ボナパルティズムの第一歩」を踏みだしたときに、レーニンはその空論にまどわされず広大な政治的規模で闘われ、深い階級的利益に立脚する真剣でねばり強い闘いを組織したのだった。「諸事件がきわめて急速に進んでいること、勤労者の大多数が自の運命を革命的プロレタリアートにゆだねざるをえないつぎの時期にわが国は近づきつつある。革命を開始し、すべての先進国のプロレタリアートをこの革命に引き入れ、戦争をも資本主義を

もうちやぶるであろう」(ボナパルティズムの陥り)と彼は語っている。

そこにはフリムランの信任投票でアイマイな態度をとることによって社会党のまったくさげすまれた議会的クレチン病に追隨したフランス共産党の議会主義的方針のかけらもない。多くの民衆は「議会」の無力に幻滅を感じることによって、ドゴールの権威政体に幻想をよせたのだ。それは圧倒的な民衆を革命的行動にひきいれることによって、自らの実力で他にも出口を切り開くことができることを経験させることが必要だったのだ。闘争の議会主義的方向は民衆に無力感を与える。ドゴール登場後の憲法においても一片の「ノン」の用紙によってドゴールの「ファシズム」に反対して第四共和制を擁護するという議会主義的な方針は民衆を無関心と未明から解放することはできなかった。民衆をしてブルジョアジーによって与えられた「第四共和制」の否定のイデオロギーから切りはなし、プロレタリア民主主義の闘争に引き入れ、それを指導することこそプロレタリアートの指導部に課せられた唯一の方向だった。それは「共和制」擁護というあらかじめ与えられた図式をはるかにのりこえて進んだであろう。死の苦悶にみちた資本主義フランスは、ボナパルティズムとファシズムの道をたどらないならば、プロレタリア民主主義への道に必然的にたどりつくことを要求しているからである。民衆は革命的展望をもった指導部によって革命的闘争にひき入れられ、自分の経験でその正しさを吟味しながら進んだであろう。しかし闘争の一切を議会主義のコースへ導こうとする努力は、議会すらブルジョアジーの手によって破壊することを許してしまっ

た。

なぜ敗北したのかの問いに答えてセルヴァンはいふ。人民は一九

五六年左翼に投票することによって政策転換の賭けをやった。しかし「社会党とその政府内での同盟者はあきらかに人民とかわした契約をふみにじった」その結果「政策転換に対する人民大衆のふかい願望はついえさった」「彼らはこれまで左翼に投票してきたがうまく行かなかった。彼らはそこで自分たちののぞむ」(「今後へかたがた資料五五号」)政策転換の達成の道を他に求めたのだと。

しかし労働者の多数を獲得しそれを実行行動にたたせるという革命の方針ではなく「社共の統一こそがファシズム粉碎の道である」というような社会民主主義への追隨と議会主義の方針によってその敗北は促進されたのであった。敗北の口実を社会民主主義の裏切りにかけることはできない。社会民主主義が歴史的意義を喪失したからこそ第二インターが生れたのであった。改良主義者の影響下にある労働者をも行動にたたせながら、もし改良主義者が闘争を抑制しようとし、裏切ろうとするならば自らの経験によって大衆の圧倒的部分が革命的翼の下に近づくのを援助することこそがプロレタリアートの指導部の任務であろう。それはただ大衆が自分の行動によって吟味しえた時にのみ可能である。労働者の多数を自らの行動によって革命的部分に引きよせるために統一戦線戦術は採用されるべきなのだ。現在のフランスの情勢は労働者や小ブルの多数が、議会主義コースにひきいられることによって、自らの実力に確信をもっていないことを示している。もし労働者が断固とした実行行動にたちあがるならば、そのことによって動揺している小ブルジョアはひきよせられる。はりつめた綱の上であぶない綱渡りをやっているドゴールはふきとばされてしまうであろう。だが民衆はまだドゴールに対する幻想をすてていない。

北は議会による道が閉された事を意味している。出口はただ一つ——革命的なそれしか残されていない。

《編集者より》この論文の後半部は、紙面の都合によって次号にまわすことにしました。それは《三、アラブ革命の行方》(アラブ革命の評価と労働独裁論の検討等)《四、帝国主義は変わったか》(帝国主義本国のプロレタリアートの闘争、恐慌、国家独占資本主義の問題等を取扱う)からなっています。

理論戦線

日本社会主義学生同盟理論機関誌

第2号 一九五八年十二月十一日発行

編集

日本社会主義学生同盟全国執行委員会

発行所

リベラシオン社

東京都練馬区豊玉北五丁目八

振替 東京三七〇九九

定価八〇円

年四回三〇〇円次号二月の予定

印刷

東銀座印刷出版株式会社

ドゴールの空文句と社会党の裏切りを行動で経験することを助けねばならぬ。われわれにとって陳腐なことは大衆にとって陳腐なことではないからだ。ところが圧倒的な大衆を革命的行動にひきよせることに失敗したフランス共産党は今度は左への偏向に走る。今フランスの無数の壁にはりつけられている「悩める社会党員への公開状」は次のようによびかけている。「五週間前に行われた新憲法の国民投票で社会党と共産党が歩調を合わせて投票したならばドゴールを負かすことができた」「これが実現しなかったのは社会党の最高指導者であるギー・モレ氏の責任であり、彼は裏切者、スト破りとなった。」「だから社会党の同志よ、われわれは諸君に呼びかける。これほどにまで害悪を与えている諸君の反共政党を拒否せよ」

一九三三年世界史の運命を決する鍵をにぎっていたドイツプロレタリアートがナチスの前に屈服した時にも、コミンテルンは社会民主主義の裏切りを追求したのだった。しかし、社会民主主義をファシズムと同一視し、これとの統一戦線を拒否し、その影響下にある労働者を「下から統一」という最後通牒をつきつけることにより、共産主義労働者を孤立させ、ブリュニン、パーベン、シュライヒャー等のごとくファシズムであると規定し、ファシズムはすでに実現されているのだと説いてプロレタリアートの陣列をナチズムの攻撃の前に完全にこならんさせ、まひさせたのは他ならぬドイツ共産党であった。

社会党員とその傘下の労働者に対して、彼らの指導者の裏切りを言葉によって説明し、共産党の陣列に参加せよとの最後通牒をつきつけるのではなく、革命の方針で大衆を組織することによって、改良主義者の本質を彼らにあきらかにすることこそが必要なのだ。敗

「理論戦線」

社会主義学生同盟
理論機関誌
・執行委員会編集

☆第1号 内容 ￥80

★学生運動の転機とは何か?熊谷 信雄

第2号で完結した同名論文の予備力作

★「社会主義への平和移行の経済学」批判

.....清水 丈夫

社会主義への平和的移行を、経済学で論証しようとした*現代マルクス主義学派。井沢卓一氏への批判。国家独占とは政府の「系統的努力」すなわち「人為」なのか? 井沢氏におけるマルクス主義国家論のゆくえはどこか? それは消え失せたのか?

★理論学習のために

「共産党宣言」の現代的意義花村 司

110年前ウィーンでもパリでもベルリンでもミラノでもブルジョア打倒! であったのに、110年たつた今、なぜパリでも東京でも独立を! でなければならぬのか?

社会主義思想における「資本論」の地位山川 和夫

ヘーゲル哲学批判から、また人間解放の法哲學的考察からマルクスはいかに進んだか?

★危機に立つ労働運動小野田 猛史

秋までの運動のこめいはいどこからきたのか? 大きくのしかかった不況をどうにのけて突き進むか? 反撃の機は失われ後退期の戦術がとられればならぬか?

★恐慌論深化のための一試論杉田 信夫

☆第2号 ￥80 (本号)



定価 ￥80、支部で5部以上まとめて前金でお申し込みの場合にかぎり割引いたします。当季一年四回発行 購読料 年 ￥300

発行所 リベラシオン社

東京都練馬区豊玉北五丁目八 振替 東京37099